兵庫県文化財調査報告　第402冊

加古川市所在

天王山古墳群
天王山窯跡群

－主要地方道加古川小野線（東播磨南北道路）改築事業に伴う発掘調査報告書－

2011（平成23）年3月

兵庫県教育委員会

加古川市所在

天王山古墳群
天王山窯跡群

－主要地方道加古川小野線（東播磨南北道路）改築事業に伴う発掘調査報告書－

2011（平成23）年3月

兵庫県教育委員会

例言

1．　本書は加古川市八幡町上西条に所在する天王山古墳群・天王山窯跡群の発掘調査報告書である。

2．　天王山古墳群･天王山窯跡群の調査は、兵庫県東播磨県民局県土整備部加古川土木事務所が計画･施工する主要地方道加古川小野線（東播磨南北道路）改良事業に伴うものである。

3．　分布調査は平成 12 年度に、確認調査は平成 16・17 年度に、本発掘調査は平成 17・18 年度に行った。すべて兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が調査担当した。

4．　本発掘調査は、平成 17 年度は西口圭介・長濱誠司が、平成 18 年度は渡辺　昇・上田健太郎が担当した。

5．　調査で使用した方位は国土座標第Ⅴ系を使用し、水準は国土交通省設定の 2 級基準点ならびに兵庫県加古川土木事務所設定の 3 級基準点を使用した。

6．　基準点の測量ならびに平面図の図化は㈱パスコ神戸営業所に委託して実施した。遺物出土状態や土層断面図は調査員・調査補助員が実測した。

7．　遺構写真は調査担当者が撮影した。図版 4 の空中写真は国土地理院撮影のものを使用した。それ以外の空中写真は㈱パスコ神戸営業所に委託して撮影したものである。

8．　整理作業は、平成 21・22 年度の 2 ヵ年に渡って兵庫県立考古博物館で行った。

9．　執筆は天王山窯跡群・天王山 1 号墳を長濱が、それ以外を渡辺が行い、編集は前山三枝子の協力を得て渡辺が行った。

10.　本書にかかる遺物や図面・写真などの資料は、兵庫県立考古博物館（加古郡播磨町大中 1-1-1）ならびに兵庫県立考古博物館魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下 630-1）に保管している。ご活用ください。

11.　発掘調査・整理調査にあたって、地元関係者をはじめ多くの方々・機関のご協力･ご指導を得ました。感謝致します。（敬称略・順不同）

加古川市教育委員会・西川英樹・奥田智子・横田真吾

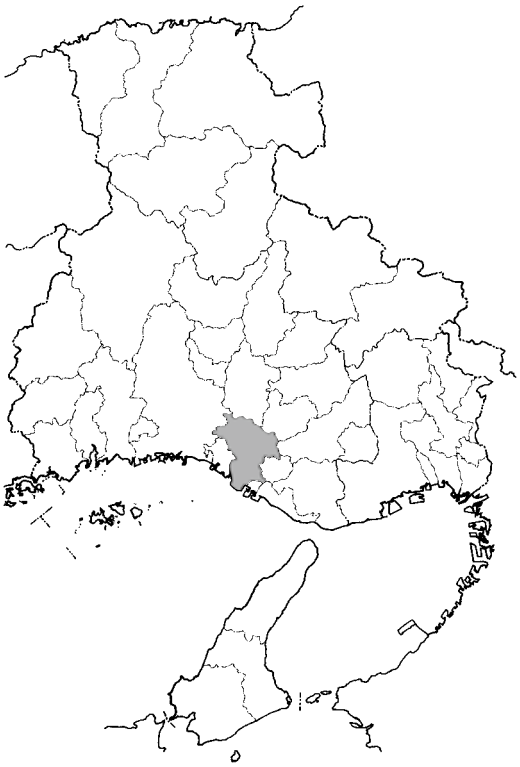


図1　加古川市の位置

本文目次

例言

Ⅰ　はじめに …… 渡辺

1．調査に至る経緯 …… 1

2．確認調査の経過と結果 …… 1

3．平成 17 年度本発掘調査の経過 …… 3

4．平成 18 年度本発掘調査の経過 …… 3

5．整理作業の経過 …… 4

Ⅱ　位置と環境 …… 渡辺 …… 6

Ⅲ　天王山古墳群の調査

1．古墳群の位置 …… 渡辺 …… 11

2．天王山 1 号墳 …… 長濱 …… 13

3．天王山 2 ～ 5 号墳の概要 …… 渡辺 …… 13

4．天王山 2 号墳 …… 14

5．天王山 3 号墳 …… 20

6．天王山 4 号墳 …… 25

7．天王山 5 号墳 …… 30

8．旧河道 …… 30

9．その他の遺構 …… 30

10．小結 …… 33

Ⅳ　天王山古墳群の遺物 …… 渡辺

1．1 号墳出土遺物 …… 35

2．2 号墳出土遺物 …… 36

3．3 号墳出土遺物 …… 42

4．4 号墳出土遺物 …… 44

5．5 号墳出土遺物 …… 48

6．包含層出土遺物 …… 50

Ⅴ　天王山窯跡群の調査 …… 長濱

1　概要 …… 54

2．天王山 1 号窯跡の調査 …… 54

3．天王山 1 号窯跡の遺物 …… 59

4．天王山 1 号窯跡小結 …… 62

5．天王山 2 号窯跡の調査 …… 67

Ⅵ　おわりに …… 渡辺 …… 68

挿図目次

図 1	加古川市の位置	i
図 2	確認調査出土須恵器	1
図 3	調査風景	2
図 4	確認調査出土硯	2
図 5	調査風景	3
図 6	調査風景	4
図 7	整理作業風景	4
図 8	調査区位置図	5
図 9	加古川下流域空中写真	6
図 10	坂元遺跡埋甕	7
図 11	調査風景	7
図 12	坂元遺跡方形周溝墓出土土器	7
図 13	坂元遺跡埴輪窯跡	7
図 14	天王山古墳群の位置と周辺の遺跡	8
図 15	宮山古墳	9
図 16	二塚古墳横穴式石室	9
図 17	教信寺石棺仏	10
図 18	西条廃寺	10
図 19	天王山古墳群周辺空中写真	11
図 20	天王山 1 号墳調査区全体図	12
図 21	現地説明会	14
図 22	天王山 2 号墳～ 5 号墳調査区全体図	15
図 23	天王山 2 号墳平面図	16
図 24	天王山 2 号墳断面図	17
図 25	天王山 2 号墳横穴式石室平面図	18
図 26	天王山 2 号墳横穴式石室実測図	19
図 27	天王山 3 号墳平面図	21
図 28	天王山 3 号墳主体部実測図	22
図 29	天王山 3 号墳遺物出土状態図	23
図 30	天王山 4 号墳平面図	24
図 31	天王山 4 号墳周溝・墓道断面図	25
図 32	天王山 4 号墳横穴式石室平面図	26
図 33	天王山 4 号墳横穴式石室断面図	27
図 34	天王山 4 号墳横穴式石室実測図	28
図 35	天王山 5 号墳平面図	29
図 36	天王山 5 号墳主体部実測図	31
図 37	流路（旧河道）実測図	32
図 38	土坑実測図	33
図 39	1 号墳出土遺物写真 (1)	35
図 40	1 号墳出土遺物実測図	35
図 41	1 号墳出土遺物写真 (2)	36
図 42	2 号墳出土遺物写真 (1)	37
図 43	2 号墳石室内出土土器実測図	37
図 44	2 号墳出土遺物写真 (2)	38
図 45	2 号墳勾玉写真	38
図 46	2 号墳勾玉実測図	38
図 47	2 号墳鉄器実測図	39
図 48	2 号墳鉄器写真	39
図 49	2 号墳墓道出土遺物実測図	40
図 50	2 号墳墓道出土遺物写真	40

図 51　2 号墳周溝出土遺物実測図　41
図 52　2 号墳周溝出土遺物写真　41
図 53　3 号墳出土遺物実測図　42
図 54　3 号墳出土遺物写真　43
図 55　4 号墳出土遺物写真　44
図 56　4 号墳出土遺物実測図　45
図 57　4 号墳大形提瓶内外面の製作技法　46
図 58　4 号墳再利用時の遺物実測図　47
図 59　4 号墳再利用時の遺物写真　47
図 60　5 号墳出土遺物写真　49
図 61　5 号墳出土遺物実測図　49
図 62　5 号墳出土金属器実測図　50
図 63　5 号墳出土金属器写真　50
図 64　包含層出土遺物実測図（古墳時代）　51
図 65　包含層出土遺物写真（古墳時代）　51
図 66　包含層出土遺物実測図（古墳時代以外）　52
図 67　包含層出土遺物写真（古墳時代以外）　52
図 68　石器実測図　53
図 69　石器写真　53
図 70　天王山窯跡群全体図　55
図 71　天王山 1 号窯跡調査区全体図　56
図 72　天王山 1 号窯跡土層断面図　57
図 73　天王山 1 号窯跡　58
図 74　天王山 1 号窯跡　59
図 75　天王山 1 号窯跡出土遺物実測図 (1)　60
図 76　天王山 1 号窯跡出土遺物実測図 (2)　61
図 77　天王山 1 号窯跡出土遺物実測図 (3)　63
図 78　天王山 1 号窯跡出土遺物実測図 (4)　64
図 79　天王山 1 号窯跡出土遺物実測図 (5)　65
図 80　天王山 2 号窯跡調査区全体図　66
図 81　天王山 2 号窯跡出土遺物実測図　67

表目次

表 1　天王山古墳群と周辺の遺跡　9
表 2　1 号墳出土遺物観察表　35
表 3　2 号墳石室内出土遺物観察表　39
表 4　2 号墳墓道出土遺物観察表　40
表 5　2 号墳周溝出土遺物観察表　42
表 6　3 号墳出土遺物観察表　42
表 7　4 号墳出土遺物観察表　46
表 8　4 号墳再利用時出土遺物観察表　48
表 9　5 号墳出土遺物観察表　49
表 10　包含層出土遺物観察表（古墳時代）　50
表 11　包含層出土遺物観察表（古墳時代以外）　53

天王山古墳群　図版目次

図版1	上	天王山古墳群　遠景（北西から）
	下	天王山古墳群　遠景（南東から）
図版2	上	天王山古墳群　遠景（北西から）
	下	天王山古墳群　遠景（北東から）
図版3	上	天王山古墳群　遠景（北東から）
	下	天王山古墳群　垂直写真
図版4		天王山古墳群　周辺空中写真（国土地理院撮影）
図版5	上	1号墳　調査前全景（南から）
	下	1号墳　調査区空中写真（南西上空から）
図版6	上	1号墳　全景（北西から）
	下	1号墳　全景（南東から）
図版7	上左	1号墳　SX01礫散布状況（南東から）
	上右	1号墳　SX01完掘状況（北西から）
	中左	1号墳　SX02礫散布状況（南西から）
	中右	1号墳　SX02完掘状況（北西から）
	下左	1号墳　SX03全景（北東から）
	下右	1号墳　SX03礫散布状況（北東から）
図版8		2～5号墳調査区全景（南から）
図版9	上	2～5号墳　全景（北から）
	下	2～5号墳　全景（南から）
図版10	上	2号墳　検出状況（南から）
	下	2号墳　全景（南から）
図版11	上	2号墳　横穴式石室全景（南から）
	下左	2号墳　横穴式石室全景（南から）
	下右	2号墳　横穴式石室（北から）
図版12	上	2号墳　石室奥壁
	下	2号墳　西壁
図版13	上左上	2号墳　石室堆積状況（奥壁から）
	上左下	2号墳　棺台
	上右上	2号墳　床面堆積状況
	上右下	2号墳　奥壁西側遺物出土状態
	下左上	2号墳　西壁沿い土器出土状態
	下左下	2号墳　奥壁堀り方断面
	下右上	2号墳　開口部付近土器出土状態（北から）
	下右下	2号墳　床面下層土坑（南から）
図版14	上	2号墳　石室と掘り方（南から）
	下	2号墳　石室と掘り方（北から）
図版15	上	2号墳　西側墳裾平安時代流路
	中	2号墳　平安時代流路断面
	下	2号墳　石室石材矢穴
図版16	上	3号墳　全景（検出状況・南から）
	中左	3号墳　南側周溝アゼ
	中右	3号墳　北側周溝アゼ
	下左	3号墳　開口部アゼ
図版17	上	3号墳　全景（南から）
	下	3号墳　全景（東から）

図版18	上	3号墳　墓壙全景（北から）
	下	3号墳　石室遺物出土状態（東から）
図版19	上	4号墳　検出状況（南から）
	下	4号墳　全景（南から）
図版20	上	4号墳　石室内堆積状況（南から）
	下左上	4号墳　石室内堆積状況
	下左下	4号墳　石室内中世椀出土状態
	下右上	4号墳　調査風景
	下右下	4号墳　調査風景
図版21	上	4号墳　石室全景（南から）
	下左	4号墳　石室全景（南から）
	下右上	4号墳　石室西壁
	下右下	4号墳　石室東壁
図版22	上	4号墳　石室全景（北から）
	下左上	4号墳　東壁
	下左上	4号墳　墓道堆積状況
	下右	4号墳　石室基底石全景（南から）
図版23	上	4号墳　全景（南西から）
	下	4号墳　石室基底石全景（北から）
図版24		4号墳　石室基底石・墓道全景（南から）
図版25	上	5号墳　検出状況（南東から）
	下	5号墳　全景（南東から）
図版26	上	5号墳　全景（北西から）
	下左上	5号墳　石室内堆積状況
	下左下	5号墳　耳環出土状態
	下右上	5号墳　全景（北東から）
	下右下	5号墳　全景（南西から）
図版27	上	5号墳　墓壙全景（南東から）
	下左上	5号墳　石室全景（北東から）
	下左下	5号墳　石室全景（北西から）
	下右上	5号墳　周溝堆積状況
	下右下	5号墳　周溝中世土器出土状態
図版28	上	5号墳　全景（東から）
	下	5号墳　全景（南から）
図版29	上	SR01堆積状況（南から）
	下左上	SK01（西から）
	下右上	SK03断面
	下右下	SK03（南から）
図版30		天王山窯跡群　全景
図版31	上	天王山窯跡群　全景（北から）
	下	天王山窯跡群　全景（北西から）
図版32	上	1号窯跡　調査区遠景（北東から）
	下	1号窯跡　調査区遠景（南東から）
図版33	上	1号窯跡　調査区全景（南東から）
	下	1号窯跡　窯体検出状況（北東から）
図版34	上	1号窯跡　窯体内遺物出土状況（北東から）
	下	1号窯跡　窯体完掘状況（北東から）

図版35	上	1号窯跡　窯体断ち割り状況（北東から）
	下左上	1号窯跡　炭化材断面（1）（南から）
	下左下	1号窯跡　炭化材断面（3）（南から）
	下右上	1号窯跡　炭化材断面（2）（南から）
図版36	上	1号窯跡　還元面除去（北東から）
	中左	1号窯跡　還元面除去縦断（1）（南から）
	中右	1号窯跡　還元面除去縦断（2）（南東から）
	下左上	1号窯跡　溝断面（東から）
	下左下	1号窯跡　SX01断面（東から）
	下右上	1号窯跡　灰原断面（南東から）
	下右下	1号窯跡　調査区南北断面（東から）
図版37	上	2号窯跡　調査区全景（南から）
	中	2号窯跡　西壁断面（北から）
	下	2号窯跡　南壁断面（北西から）
図版38	上	天王山古墳群　出土遺物
	下左	天王山古墳群　2号墳出土鉄器
	下右	天王山古墳群　5号墳出土金属器
図版39	上	天王山古墳群　2号墳出土遺物
	下左	天王山古墳群　2号墳出土勾玉
	下右	天王山古墳群　4号墳出土遺物
図版40	上	天王山古墳群　再利用時遺物
	下	天王山窯跡群　出土遺物
図版41		天王山窯跡群　出土遺物（1）
図版42		天王山窯跡群　出土遺物（2）
図版43		天王山窯跡群　出土遺物（3）
図版44		天王山窯跡群　出土遺物（4）
図版45		天王山窯跡群　出土遺物（5）
図版46		天王山窯跡群　出土遺物（6）
図版47		天王山窯跡群　出土遺物（7）
図版48		天王山窯跡群　出土遺物（8）

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経緯

兵庫県東播磨に位置する加古川市周辺は国道２号・国道２号バイパス（加古川バイパス）・国道250号（明姫幹線）と東西方向の基軸は整備されつつあるが、南北方向は十分整備されているとは言えない。そのことから南北方向の渋滞が朝夕の通勤時を中心に頻繁に生じている。それを緩和するとともに新しい南北基軸を確立するために都市計画道加古川小野線改良事業として東播磨南北道路が計画された。

計画に伴って加古川土木事務所から調査依頼があり、平成12年度に分布調査が実施された。計画用地内には望塚銅鐸出土地や猫池窯跡・新池古墳群が知られていた。分布調査の結果、複数の地点で広範囲に遺物が採集された。調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が調査主体となり、種定淳介・甲斐昭光・大崎晃司・小川弦太・海邉博史が担当した。

２．確認調査の経過と結果

平成12年度の分布調査の結果を受けて、平成16年度に確認調査が実施された。加古川バイパスから八幡町に至る広範囲を対象としている。地点が分かれることから地区名を付けて調査している。南から「溝之口地区」「水足地区」「神野地区」「カマ谷地区」「望塚地区」に分けられ、天王山古墳群周辺は「カマ谷地区」として調査されている。一部用地買収などの理由から調査出来なかった地点もあるが、215本のトレンチを計画して調査が行われた。水田部分は3×3ｍを基本に、それ以外は2×5ｍを基本にトレンチを設定して調査が実施された。遺跡範囲が確定出来ない地点や曖昧な箇所について追加調査を行った。追加調査には、トレンチを18本費やした。「溝之口地区」では奈良時代の溝と遺物が確認され、「水足地区」「神野地区」では遺物はほとんど出土せず遺構は確認されなかった。八幡町の段丘上の「カマ谷地区」「望塚地区」の２地区では明瞭に遺構が検出された。この時点で天王山古墳群・天王山窯跡群も確認された。ただ、西側ならびに南側については用地買収が遅れたことから、平成17年度に改めて確認調査を実施した。

調査は埋蔵文化財調査事務所が調査主体となり、吉識雅仁を中心に実施された。平成16年度は山本三郎・吉識雅仁・深江英憲・池田征弘が、平成17年度は吉識雅仁が担当した。確認調査の結果、望塚銅鐸出土地で新たに古墳が確認されたのをはじめ、天王山古墳群・天王山窯跡群・東沢古墳群・東沢中遺跡などが確認された。猫池遺跡周辺では窯跡や集落の可能性が考えられたが、確認調査では遺構は検出されなかった。

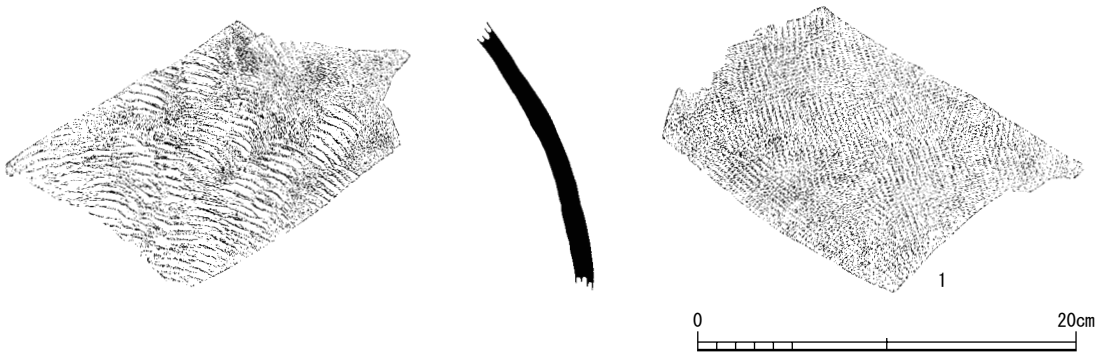


図2　確認調査出土須恵器

天王山古墳群は確認調査の 114 ～ 116・148・149 トレンチに該当する。114-1 トレンチも追加され、周溝と横穴式石室と考えられる石組が検出された。結果的に、114-1 トレンチの溝は 5 号墳の周溝、149 トレンチの石組は 4 号墳の主体部であった。そのことから、2 基の横穴式石室を埋葬主体とする古墳が存在するものとして、今回調査した水田 1 枚が本調査必要とされた。平成 17 年度に西側と南側の確認調査を実施したが、遺構は確認されなかった。調査は平成 16 年 9 月 13 日から 11 月 26 日までの間、調査面積 2,263 ㎡の調査を行った。

調査の組織

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会

埋蔵文化財調査事務所

所長　平岡憲昭

主幹　輔老拓治

総務課　課長　織田正博

企画調整班　主査　深井明比古

課付　稲田　毅

調査担当　調査第 2 班

調査専門員　山本三郎

主査　吉識雅仁・深江英憲

池田征弘

調査参加者　五百蔵道代

図3　調査風景

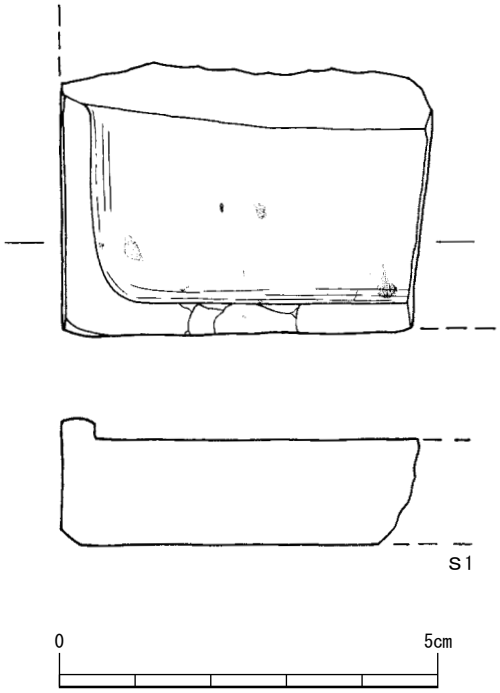


図 4　確認調査出土硯

３．平成 17 年度本発掘調査の経過

平成 17 年度は天王山１号墳と天王山１号窯跡・天王山２号窯跡の本発掘調査を行った。

調査の組織

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会

埋蔵文化財調査事務所

所長		平岡憲昭
主幹兼総務課長		若生晃彦
主幹		輔老拓治
総務課	事務職員	丸野真衣
企画調整班	主査	深井明比古
	課付	稲田　毅
調査第１班	調査専門員	吉田　昇

図５　調査風景

調査担当	調査第１班	主査	西口圭介・長濱誠司
		調査参加者	櫻井雅子・野村大作・門田論佳・井守芳美・覚野郁子

４．平成 18 年度本発掘調査の経過

平成 18 年度は天王山古墳群の本発掘調査を実施した。確認調査で２基の古墳とされたので、当初天王山２・３号墳として調査に着手した。調査は従前と同様に兵庫県東播磨県民局長からの依頼によって実施した。6 月 28 日に発掘調査工事の入札を行い、30 日に現地立会を行った。調査打ち合わせののち、翌週の 7 月 5 日に調査区の設定を行い、翌日から機械掘削を行った。包含層上面までを機械掘削の対象とした。ほとんど耕土だけを除去する程度であった。翌週の 7 月 10 日から人力掘削に入った。まず、確認トレンチを掘り直して断面観察を行う。北側から掘り下げ、古墳周濠と思われる堆積土の異なる部分を確認する。その面まで下げることとする。7 月 16 日からの１週間は梅雨明け前の天気で連日降雨のため作業を止めざるを得なかった。7 月 23 日(月)まで雨天は続き、梅雨明けとなった 24 日から粗掘りを終え、北側から面精査に入る。北西の古墳は墓壙と周濠が一体となって明瞭に検出された。確認調査で石室と考えられた地点である。さらに作業を継続すると南側にも２基の古墳があることが判明した。北東を２号墳とし、西側を北から３～５号墳と名付けて調査を行った。検出状況を写真撮影し、全体を平板測量する。その後、２号墳から石室の掘り下げを行い、順次調査を行う。石室は２・４号墳が残存しており、３・５号墳はほとんど残っていなかった。床面まで下げた状態で全体に清掃し空中写真撮影を 8 月 1 日(火) に行う。全景写真や個別写真も前後して撮影する。8 月 9 日(火) に中間検査を受け、 8 月 12 日(土) に現地説明会を実施する。

その後、２・４号墳奥壁・側壁を基底石だけ残すように取り除き、清掃し石室全景写真撮影する。墓道掘り下げや断ち割り作業を行い、8 月 18 日(金)に器材・出土遺物などを搬出し、天王山古墳群の発掘調査を終了する。

調査の組織

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長　平岡憲昭

主幹兼総務課長　若生晃彦

主幹　池田正男

総務課　事務職員　丸野真衣

企画調整班　主査　中川　渉

調査第１班　調査専門員　吉田　昇

調査担当　調査第１班　担当課長補佐　渡辺　昇

技術職員　上田健太郎

調査参加者　森本文子・赤壁千恵子・井守芳美・五百蔵道代・前田陽子・覚野郁子

図６　調査風景

５．整理作業の経過

整理作業は発掘調査段階から順次行っていた。埋蔵文化財事務所は組織の改編で兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部となる。現場事務所では一部の土器洗浄と台帳作成を実施した。それ以降の作業は平成21年度と平成22年度の２カ年に渡って兵庫県立考古博物館で行った。平成21年度は水洗い作業から実測作業と写真撮影・復原作業までを、平成22年度はトレース作業と原稿執筆・レイアウトを行い、報告書を刊行した。

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県立考古博物館

館長　石野博信

埋蔵文化財調査部長　若生晃彦

主幹　吉田　昇（平成22年度）

総務課　課長　前川浩子

主査　大西晃彦（平成21年度）

事務職員　川原聡介（平成22年度）

図７　整理作業風景

整理保存班　調査専門員　森内修造（平成21年度）・村上泰樹（平成22年度）

（課）担当課長補佐　岡田章一

主査　菱田淳子（平成21年度）・篠宮　正・山本　誠（平成22年度）

調査担当　担当課長補佐　渡辺　昇・西口圭介

主査　長濱誠司

嘱託員　前山三枝子・吉田優子・佐伯純子・加藤裕美・又江立子

保存処理　　主査　　岡本一秀

　　嘱託員　　長濱重美・前田恵梨子・浜脇多規子・桂　昭子

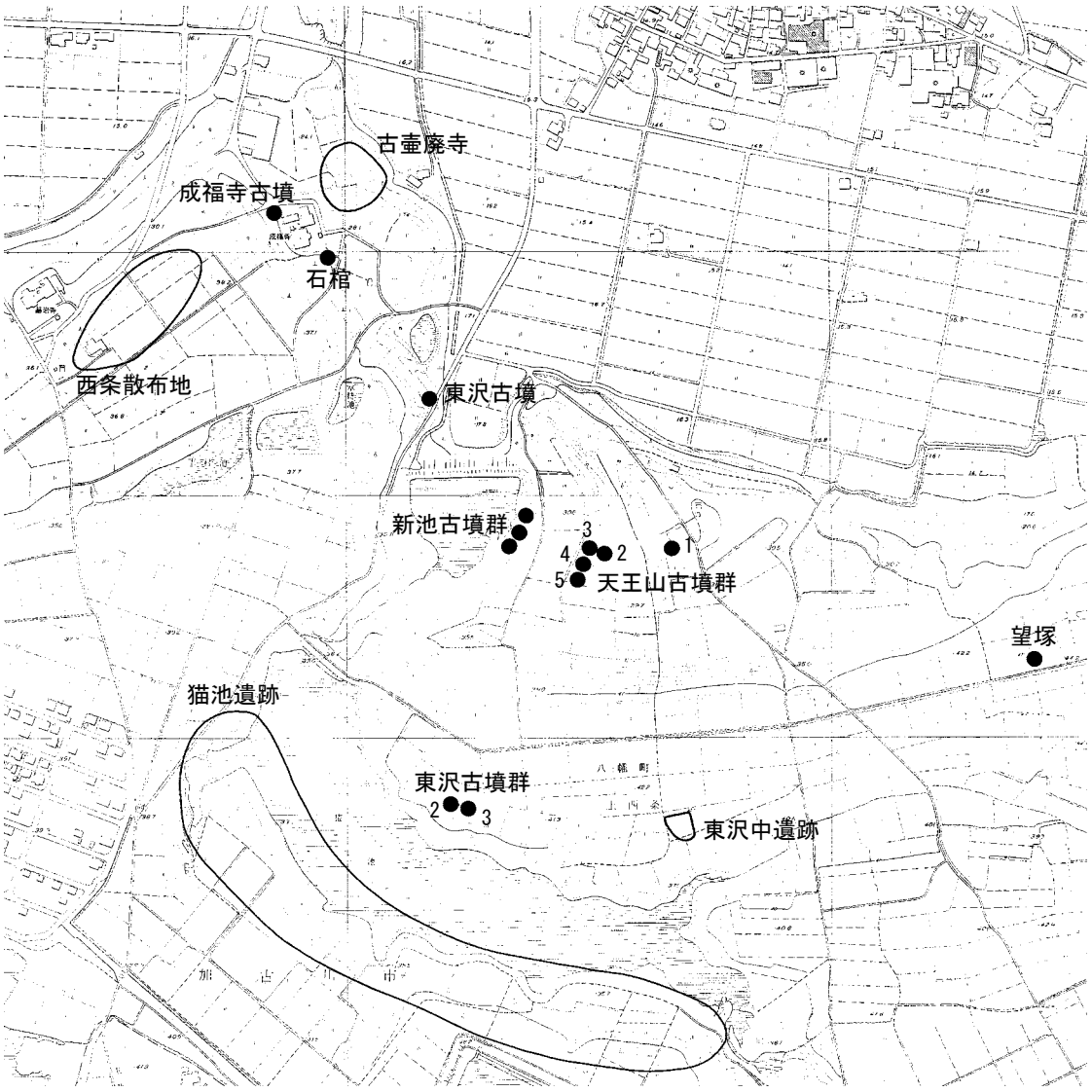


図８　調査区位置図　（S=1:7,500）

Ⅱ　位置と環境

天王山古墳群は加古川市八幡町上西条の段丘上に立地する古墳群である。加古川は丹波に源を持つ兵庫県最大の河川である。丹波市石生で標高差のない分水嶺となって北側は円山川につながっており、早くから歴史的な回路として注目されている。石剣の道としても知られ、瀬戸内海と日本海を結ぶ重要なルートと考えられている。

加古川は丹波である多紀郡を流れる篠山川と同じく氷上郡西半を流れる佐治川の２河川の支流を合わせて丹波市山南町至山で加古川となる。丹波市から播磨である多可郡に入り、南流を続け西脇市･加東市･小野市・三木市を経て加古川市を流れる。杉原川・野間川・東条川・万願寺川・美嚢川などの支流を合わせて徐々に大河の様相を濃くしていく。美嚢川の合流部から加古川大堰を越えた部分から川幅を広げはじめる。独立丘陵である城山にあたり、川筋を変えて加古川平野を流れ、さらに川幅を広げていく。加古川による沖積地はこの部分から発達していく。両岸では河岸段丘が発達している。この地域で旧郡の境界となっており、美嚢川合流部以北が賀茂郡、美嚢川流域が美嚢郡、その南が印南郡、加古川以西が賀古郡である。

城山から南側には段丘面が広がり、多くの古墳などが構築されている。この段丘は一般に印南野台地と呼称されている。天王山古墳群の位置する丘陵は日岡段丘２－１面とされている。南側東沢古墳群の丘陵は加古段丘２－２面である。

図９　加古川下流域空中写真

加古川市域は多くの遺跡が広がっている。全時代の遺跡が存在している地域として特筆される。旧石器時代から連綿と遺跡は続いている。旧石器の遺跡は主に溜池などで表面採集されていたが、志方町広尾東遺跡で本格的な調査が行われ、そこから旧石器研究が進んだ画期的な遺跡である。隣接する志方町七ツ池遺跡でナイフ形石器がまとまって出土したことも重要である。小型のナイフ形石器から国府形ナイフ、有舌尖頭器まで確認されている。その後、小野市勝手野遺跡で台形石器などが出土し後期旧石器の良好な資料が提出されているが、他地域と比べて層序関係が明らかな調査例は少ない。兵庫県では七日市遺跡・板井寺ケ谷遺跡で火山灰層の存在から明確な時期が明らかになった良好な資料が提起されている。播磨では明石市西脇遺跡で明美礫層の上下から石器が出土している。天王山古墳群周辺では西方日岡山丘陵、南側野口町坂元遺跡・加古川町溝之口遺跡でナイフ形石器が出土している。播磨町との境界に位置する平岡町山之上遺跡は複数の石器が出土しており、長期にわたる旧石器の遺跡の可能性が高い。

縄文時代の遺跡も多くはない。草創期の有舌尖頭器は旧石器出土遺跡から出土しており、志方町から加古川右岸に広がっている。遺構が検出されているのは八幡町宮山遺跡で後期の竪穴住居跡が検出されている。敷石住居という特殊な遺構で土坑なども調査されている。後期までの遺跡は点的に知られる程

図 10　坂元遺跡埋甕

図 11　調査風景

度であるが、晩期になると遺跡数は増加する。唯一岸遺跡だけは後期からの土器が出土している。それ以外は晩期から生活をはじめ次代弥生前期まで継続する遺跡で晩期の土器が確認されていることが多い。坂元遺跡、神吉町東神吉遺跡・砂部遺跡で認められ、坂元遺跡では 4 基の埋め甕が調査されている。

図 12　坂元遺跡方形周溝墓出土土器

弥生時代になると遺跡数は増加する。加古川右岸の岸遺跡・東神吉遺跡・砂部遺跡は前期で営みを終え後期に再開する。岸遺跡では晩期の土器に籾圧痕があることで知られている。砂部遺跡では土器焼成遺構が注目される。弥生時代の中心遺跡は加古川左岸に移動し、溝之口遺跡が拠点集落と考えられている。その北側には美乃利遺跡・大野遺跡が広がり、南東側には坂元遺跡が広がる。坂元遺跡は溝之口遺跡からの分村と思われる。中期後半から後期にかけての集落跡で、墓域・居住域・生産域が調査で確認され、15 基の方形周溝墓と 11 基の木棺墓を検出している。石剣・石鏃が副葬されており、周溝から多数の土器も供献されている。段丘上に流れる旧河道を最大限利用して土地を活用している。中期後半に大きなムラを営んでいたが、後期に縮小・拡散していく。溝之口遺跡は前期から後期さらに古墳時代に継続する集落跡で、坂元遺跡同様墓域・居住域・生産域が確認されている。美乃利遺跡は中期から後期の竪穴住居跡が検出され、前期の水田跡が検出されている。大野遺跡は中期から後期の集落である。日岡丘陵や西条丘陵でも中期から後期の遺物が採集され、少数ながら竪穴住居跡も確認されている。中期は溝之口遺跡を中心に栄えており、播磨特有の加飾土器が製作されている。加古川右岸では後期になると生活を再開し、加古川南側には北在家遺跡など小規模集落が形成される。加古川市に隣接する大中

図 13　坂元遺跡埴輪窯跡

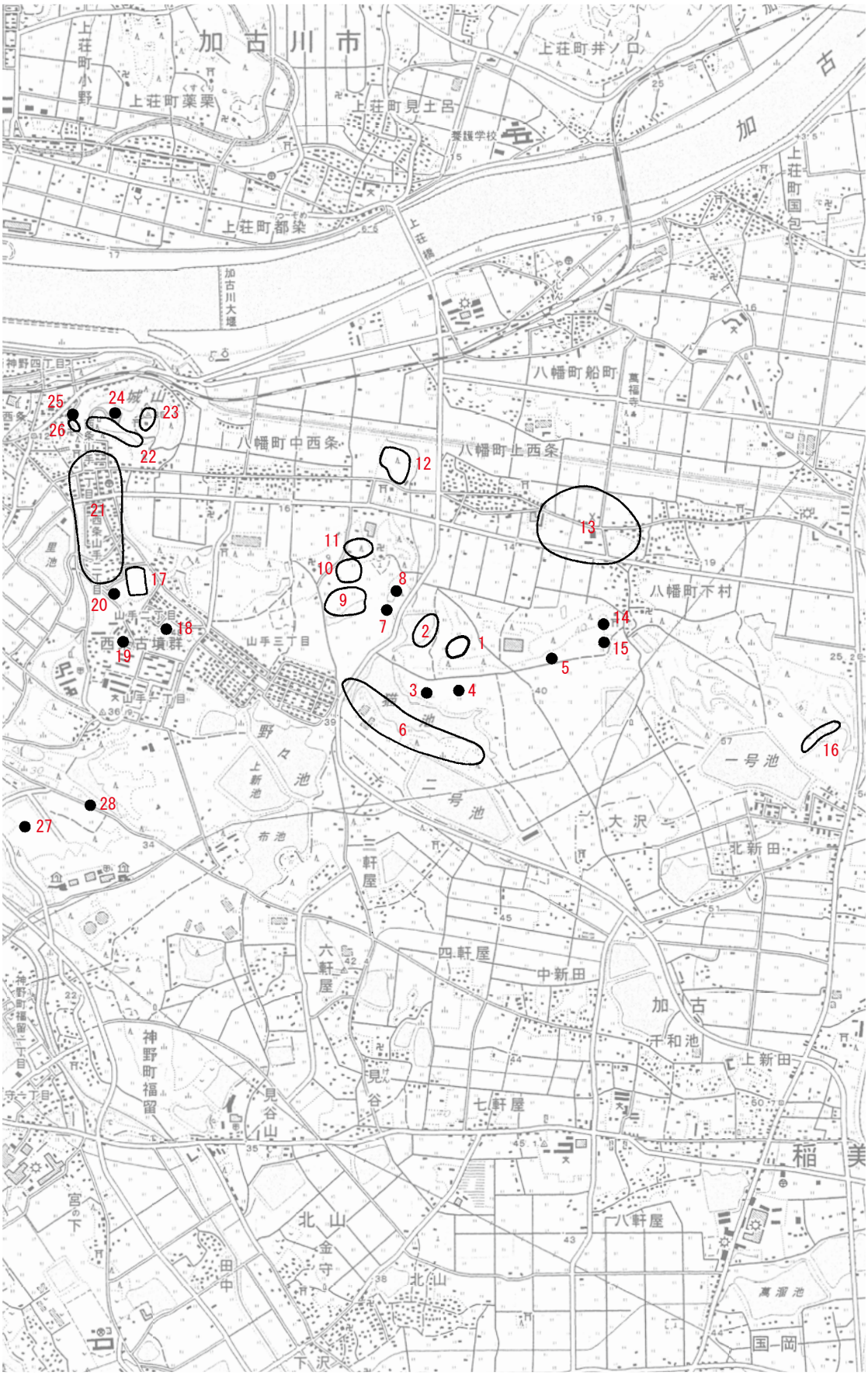


図 14　天王山古墳群の位置と周辺の遺跡（S=1:25,000）

表１　天王山古墳群と周辺の遺跡

No.	遺跡名	所在地	時代など	No.	遺跡名	所在地	時代など
1	天王山古墳群	八幡町上西条	古墳後期　本報告	15	下村古墳	八幡町下村	古墳後期
2	新池古墳群	八幡町上西条	古墳後期	16	野村窯跡群	八幡町下村	奈良
3	東沢２・３号墳	八幡町上西条	古墳後期	17	西条廃寺	神野町西条	奈良
4	東沢中遺跡	八幡町上西条	古墳後期	18	行者塚	山手1丁目	古墳中期 前方後円墳
5	盆塚銅鐸出土地	八幡町上西条	弥生～古墳	19	尼塚	山手1丁目	古墳中期 帆立貝式
6	猫池遺跡	八幡町上西条	縄文～弥生	20	人塚	山手1丁目	古墳中期 帆立貝式
7	東沢遺跡	八幡町上西条	古墳	21	西条古墳群	西条山手1丁目他	古墳前期～後期
8	東沢古墳	八幡町上西条	古墳後期	22	神野城山遺跡	神野町西条城山	旧石器
9	上村池遺跡	八幡町中西条	奈良	23	西条城跡	八幡町中西条	室町
10	古堂廃寺	八幡町中西条	奈良	24	城山1号墳	八幡町中西条	古墳後期
11	成福寺古墳群	八幡町中西条	古墳後期	25	西条土坑墓	神野町西条	中世
12	宮山遺跡・古墳群	八幡町中西条	縄文～平安	26	西条蔵骨器群	神野町西条	中世
13	下村遺跡	八幡町下村	弥生～平安	27	神野大林窯跡群	神野町神野	古墳後期
14	大日山遺跡	八幡町下村	弥生後期	28	神野北山遺跡	神野町神野	古墳後期

図 15　宮山古墳

図 16　二塚古墳横穴式石室

遺跡は後期からの拠点集落跡で、溝之口遺跡に匹敵もしくは越える集落である。後期には古墳の胎動を予測させる墓も加古川流域に認められる。西条52号墓が調査された遺跡で木蓋の竪穴式石室を主体部としている。内行花文鏡・鉄剣などが出土している。神吉山5号墓・八ツ塚古墳群でも貼石を有する墳丘墓が存在している。揖保川流域ほど多くはないが、加古川流域にも墳丘墓が広がっている。

図17　教信寺石棺仏

加古川中下流域の賀茂郡・美嚢郡・印南郡・賀古郡は古墳が多く、この地域で1400基を越える古墳の存在が知られている。今まではその中でも賀茂郡で古墳数は卓越していた。木棺直葬の群集墳があることも多い理由であろう。しかし、賀古郡・印南郡では今報告の天王山古墳群のような昭和になってからの開発による破壊が多かったのではないかと思われ、極端な数値の差はないものと思われる。ただ、主体部は横穴式石室が多く木棺直葬例は賀茂郡のように多くはない。

墳丘墓から前期古墳は加古川下流域に多く、前期古墳は日岡丘陵に集中して築造される。日岡古墳群は5基の前方後円墳と20数基の円墳から成り、盟主墳の日岡陵をはじめ大塚・車塚・狐塚などの前期古墳があり、三角縁神獣鏡・石釧などの遺物も出土している。次代は拡散し中心は北東2㎞離れた西条古墳群に移動する。西条古墳群は全長100ｍの前方後円墳行者塚と帆立貝式の尼塚・人塚の中期古墳から後期古墳さらに西条廃寺に引き継がれる。後期古墳は横穴式石室もあるが、木棺直葬や方墳も認められる。後期には傑出した古墳はない。大形石室墳は加古川右岸に築かれる。稚児窟とも呼ばれる池尻16号墳は兵庫県最大の石室である。升田山古墳や池尻16号墳など大形石室が多く右岸に見られる。この時期の加古川流域の最大の特徴は竜山石製の石棺である。現存するものは石棺仏としての方が多く見られるものである。天王山古墳群では確認されていないが、八幡町では確認されている。

加古川市から加西市にかけては古代寺院の多い地域である。律令期になると各郷単位で寺院が建立されるようになり、その代表例のように建立される。天王山古墳群周辺でも西条廃寺・石守廃寺・野口廃寺が存在する。南側には山陽道も東西に走り、日本最大の駅家である賀古駅家が古大内に築かれた。

図18　西条廃寺

Ⅲ　天王山古墳群の調査結果

１．古墳群の位置

天王山古墳群周辺は農地開発によって大きく改変され、多くの古墳は破壊されている。現状では耕作地となり、平坦になっている。古墳として認識出来るのは、県道西側にある成福寺参道付近の東沢古墳と新池東岸に残る新池古墳群だけである。実際は望塚一帯までも含む上西条の丘陵上に多数の古墳が存在したことは確実である。西側から東沢古墳・新池古墳群・天王山１号墳・天王山２～５号墳と尾根ごとに築造されていたようである。1単位５基前後から10数基となる支群が複数存在するものと思われる。新池・猫池をはじめとする谷部分には比較的多くの石材が散乱していることが知られている。そのことと、今回の調査結果から主体部は横穴式石室を有するものが大半だったと思われる。現在では、東沢古墳の１基、新池古墳群の３基、天王山１号墳の支群は１基だけ、天王山２～５号墳の支群は４基、そして南側にやや離れて東沢２・３号墳の２基の11基が確認されているだけである。東側に離れて盆塚に造り出しを有する方墳が１基確認されているが、時期が遡る中期の古墳である。後期群集墳に先立つ単独墳と思われる。

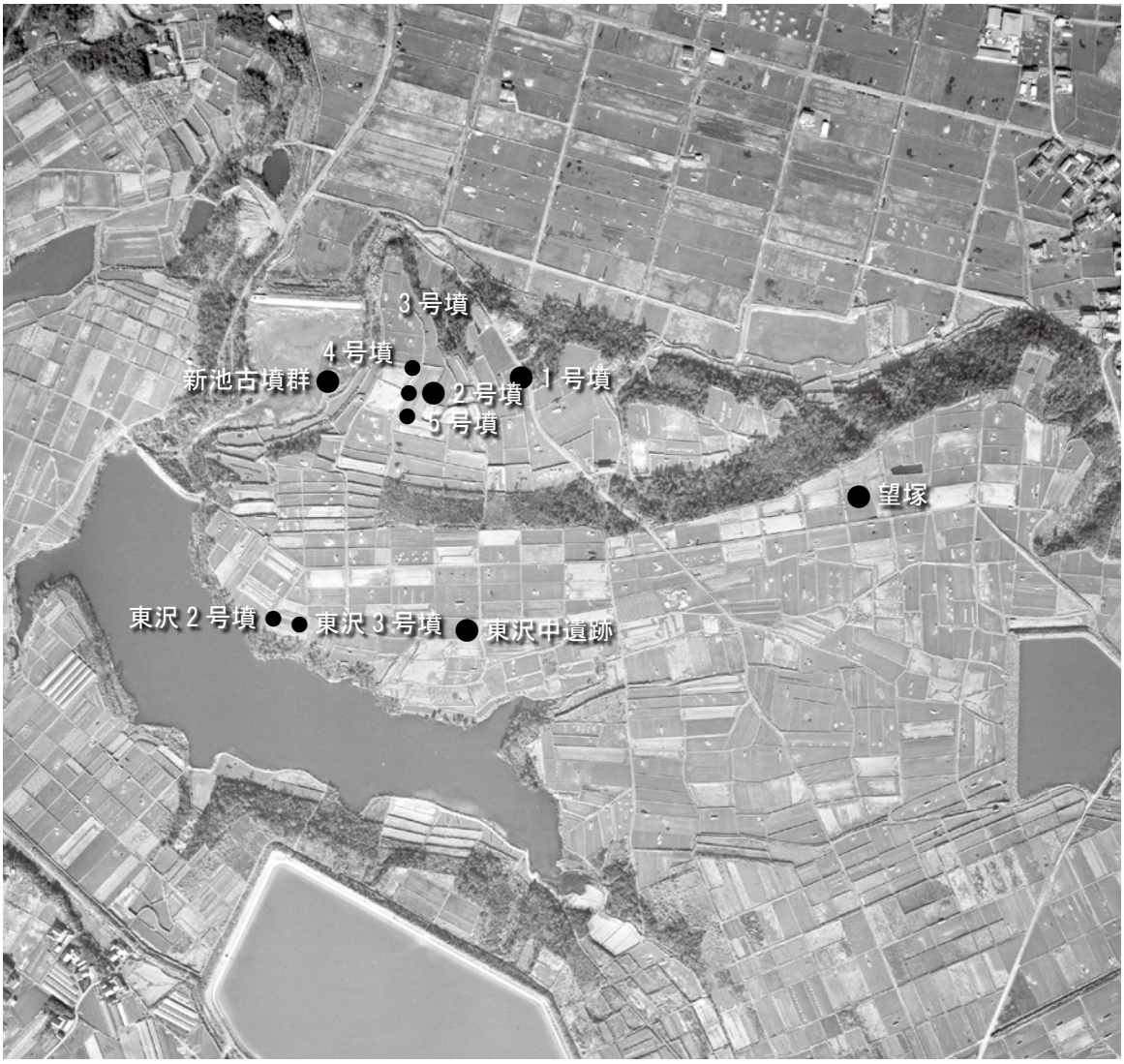


図19　天王山古墳群周辺空中写真

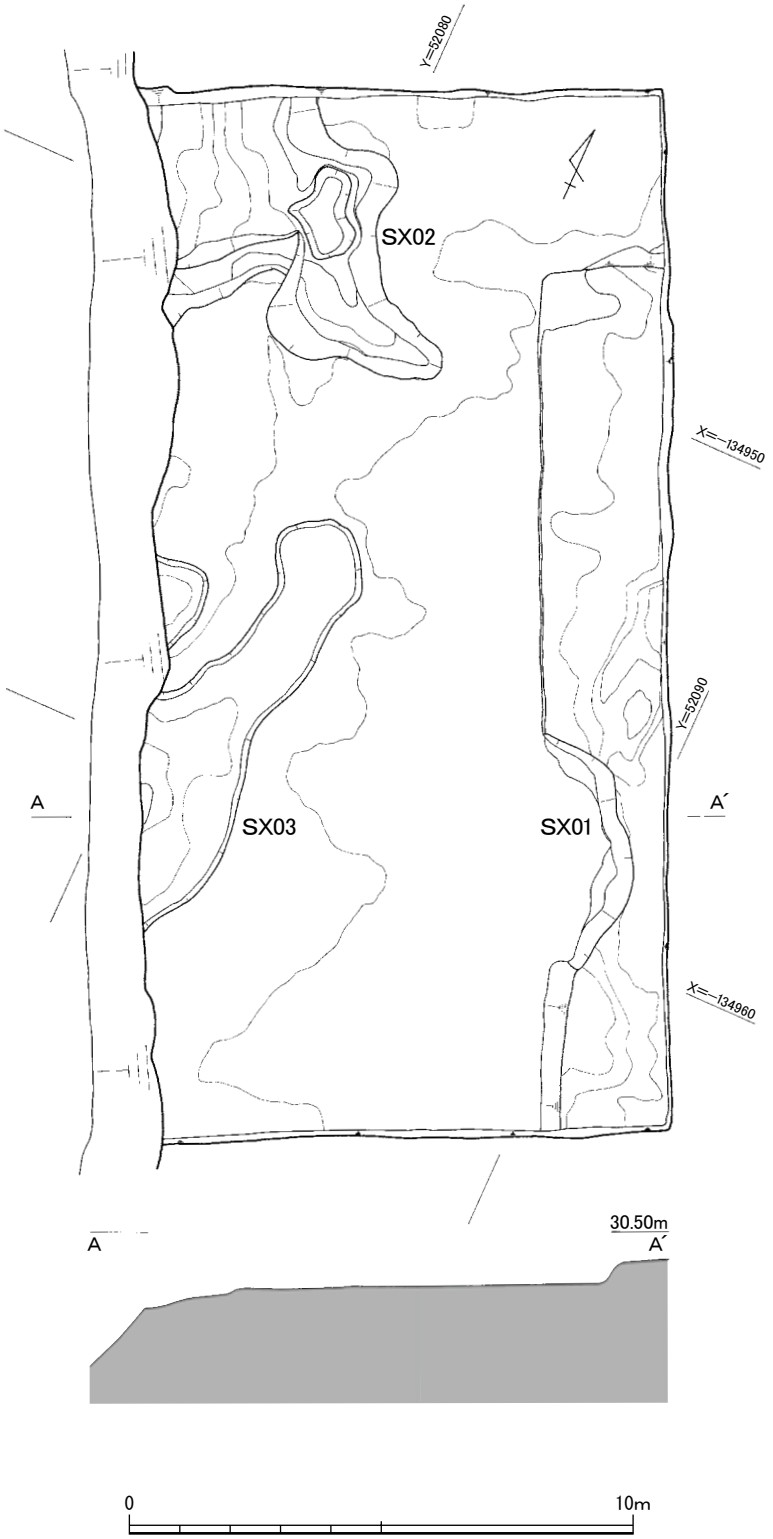


図 20　天王山 1 号墳調査区全体図

２．天王山１号墳

後述する２号墳以降の古墳とは谷を挟んだ東側に位置する。調査時の現況は休耕田であり墳丘や周溝など古墳に伴う遺構は全く認められない。ただし付近の水田畦畔の一角に横穴式石室を構築していた可能性のある大礫数石が土留めとして用いられている。調査区は耕土直下で地山となる。西側は地下げが行われるなど現地形は大規模に改変された結果によるもので、旧地形は損なわれているものと思われる。

調査地点は近現代の削平が激しく、耕土直下は地山になっている部分が多い。逆に水田面を形成するために石垣を伴った盛土も見られた。石垣や盛土内に石材が多く見られ、これらは横穴式石室の石材として使用されていた可能性がある。

調査区南東隅において石材が集中する部分があり、長さ 3.0 m、幅 1.0 m前後の不整形な落ち込みが検出されている。石材は２号墳と同じ地元で採取される流紋岩である。横穴式石室の墓壙の可能性は高いと考えられるが、埋土から近世陶器 (6) が出土しているので、墓壙と断定はできない。

遺物は集中して出土している。器種も杯身以外に壺・甕・平瓶・鼎と変化に富んでいる。かたまって上向きの出土状況であることから、大きく流れてきたとは思われない。出土状況が正しいとすると、横穴式石室の可能性が高いと考えている。

ＳＸ０１

かつての水田段差の痕跡がありその一部をえぐるように落ち込みがある。現況で不整な半円状を呈するが、残存するのは東半のみであり、本来は西側に続いていたものと思われる。南北 4.7 m、東西の残存長 1.5 mを測る。上段からの深さは最大で 36 ㎝程度である。落ち込み内には礫の集積がみられたが、石室を想定するような意図的な配列はみられない。付近で須恵器破片が出土している。

ＳＸ０２

調査区中央付近から南西隅付近へ延びる溝状遺構である。北側は調査区内で収束し、南側は隣接する水田の地下げにより消滅する。幅 1.5 m、深さ数㎝～最大で 20 ㎝程度である。南へやや下がり気味である。溝内に礫の集積がみられる。

ＳＸ０３

調査区北西隅で検出した不整形の落ち込みである。底は南東から北西へ傾斜をもち、深さは最大で 30 ㎝程度になる。北側調査区外へ続くため全容は明らかでない。落ち込み内には礫の集積がみられる。

小結

調査の結果、礫を伴う落ち込み３箇所とごく少数の須恵器片を検出したのみである。ＳＸ０１を横穴式石室の掘方、ＳＸ０２を古墳周溝と想定することも可能だが、確証に乏しい。調査時に地元住民から伺った話では、明治時代に行われた一帯の開墾より前に調査区付近に塚らしきものがあったとのことである。２号墳同様平野を眺望できる段丘上に立地すること、須恵器片の出土や付近の土層に含まれない巨礫が付近に所在することなどの理由から、消極的ながら古墳の所在が推定されるのである。

３．天王山２～５号墳の概要

４基の古墳と鎌倉時代の旧河道を調査した。４基の古墳はすべて円墳で横穴式石室を埋葬主体としている。墳丘は開墾などで削平され、石材の多くも持ち出されている。墓壙の深い２号墳と４号墳は石室の基底部と２石目の一部が残存していた。墳裾に周溝が巡らされているので規模は把握しやすい。また、主体部墓壙も明瞭に検出されている。墓壙には墓道が接続して延びており特徴的である。

2号墳が最初に構築され、4号墳・3号墳・5号墳と営造されたと思われる。2号墳だけが直径からみて切り合い関係があると思われる（3・4号墳に西半を切られる）。3～5号墳は切り合うことなく並んでいる。3・5号墳が4号墳を意識して構築したものであろう。3号墳と4号墳は周溝肩同士で0.4 mと近接している。4号墳と5号墳は2.0 m離れている。前後関係はあるものの築造時期に大きな差はないと思われる。古墳の集中度などから調査区外にも本来古墳が多数存在したと推測され、開墾削平されたものと思われる。

4．天王山2号墳

2～5号墳の支群中、最も大きな古墳で最初に構築されたと思われる。一部は調査区外の東側に延びている。古墳北側から南西にかけて旧流路（SR01）が通っており、西半は旧態を残していない。墳丘は水田開削時に削られ、ほとんど残っていない。周溝は旧流路の及ばない部分のみ残っており、北側で8.5 m、南側で2.5 mを調査している。それ以外は残存していないが、南北方向で19 m測り、古墳の大きさを表している。他の古墳例と比べてもより歪な円形になっている。東西方向に復原すると、3・4号墳に重なることになる。墳裾は3号墳築造時によって削られた可能性がある。最大径が19 mと思われる。幅は0.8～1.2 mで、深さ0.1～0.4 mである。断面形状は浅いレンズ状である。堆積土の下半は黄褐細砂～極細砂に盛土と思われるやや濁った色調となるにぶい黄褐細砂ブロックを含む土層である。上半はSR01の埋土と同じにぶい黄極細砂である。溝上面では平安時代の須恵器が出土している。

主体部は横穴式石室である。墓壙は南北10.3 m、東西3.8 mの羽子板状（口すぼみ状）の平面をしている。奥壁のある北側では幅3.2 mあり僅かに広がっていく。開口部付近は幅2.5 mとすぼまり墓道に繋がっていく。残っている深さは最大で1.1 mを測る。底面は平坦で両側に高くなっている。基底石を据える部分は安定を図る程度に掘り込んでいるが、全体的に床面から一段下げているわけではない。

石室は基底石と2石目が主に残っており、一部3石目が確認されている。開口部付近の残存度が悪く

図21　現地説明会

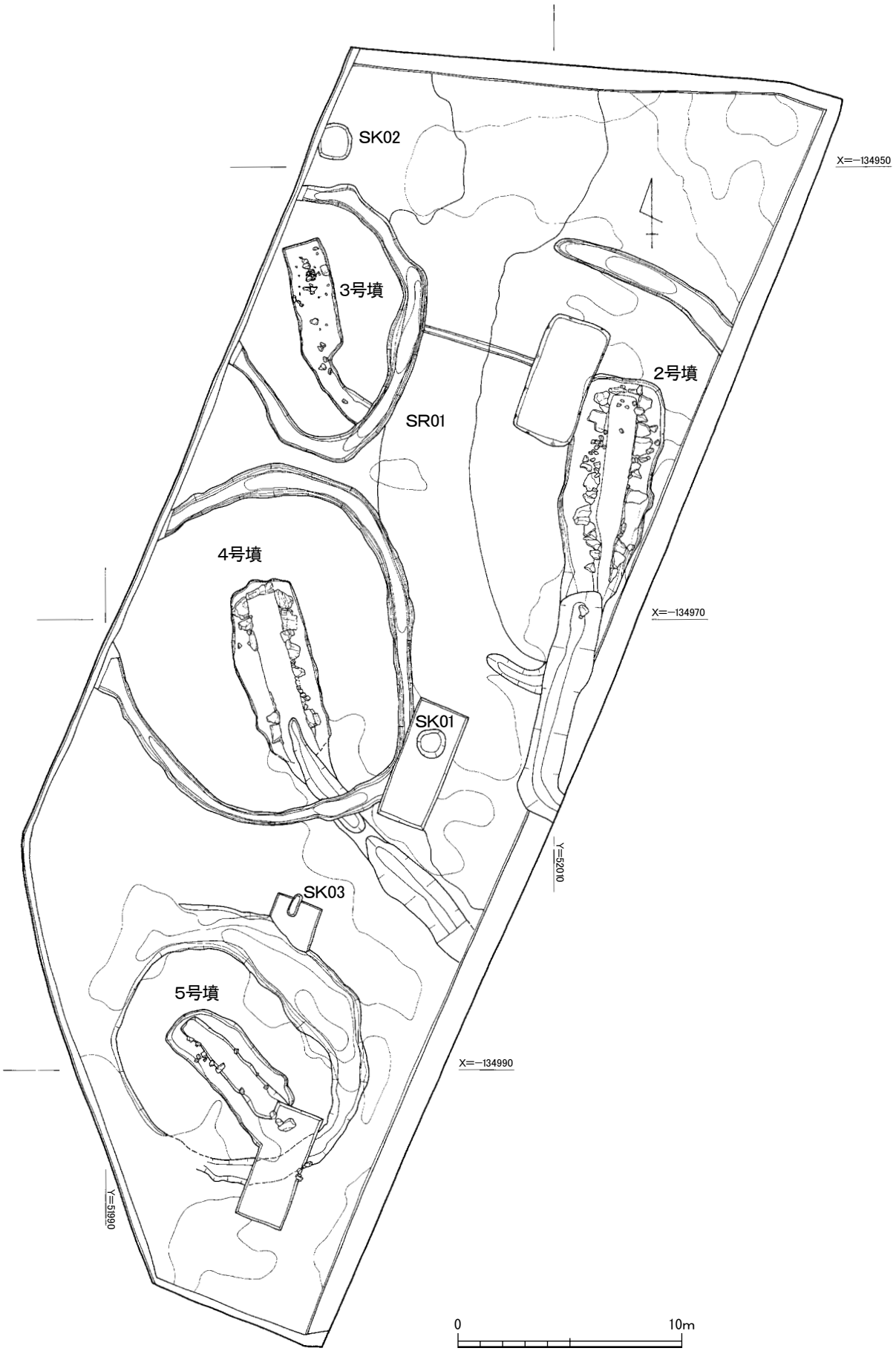


図 22　天王山 2 号墳～ 5 号墳調査区全体図

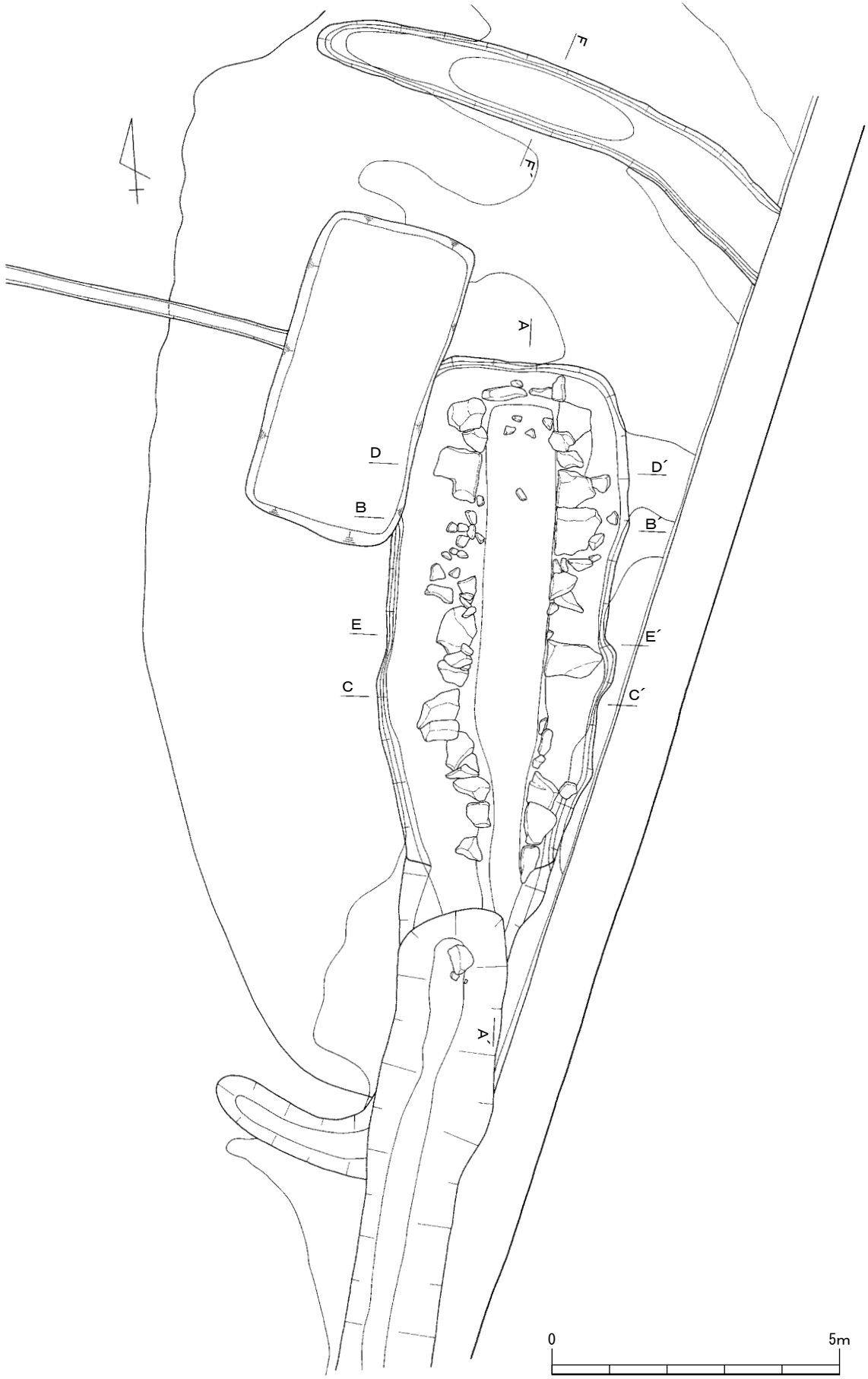


図 23　天王山 2 号墳平面図

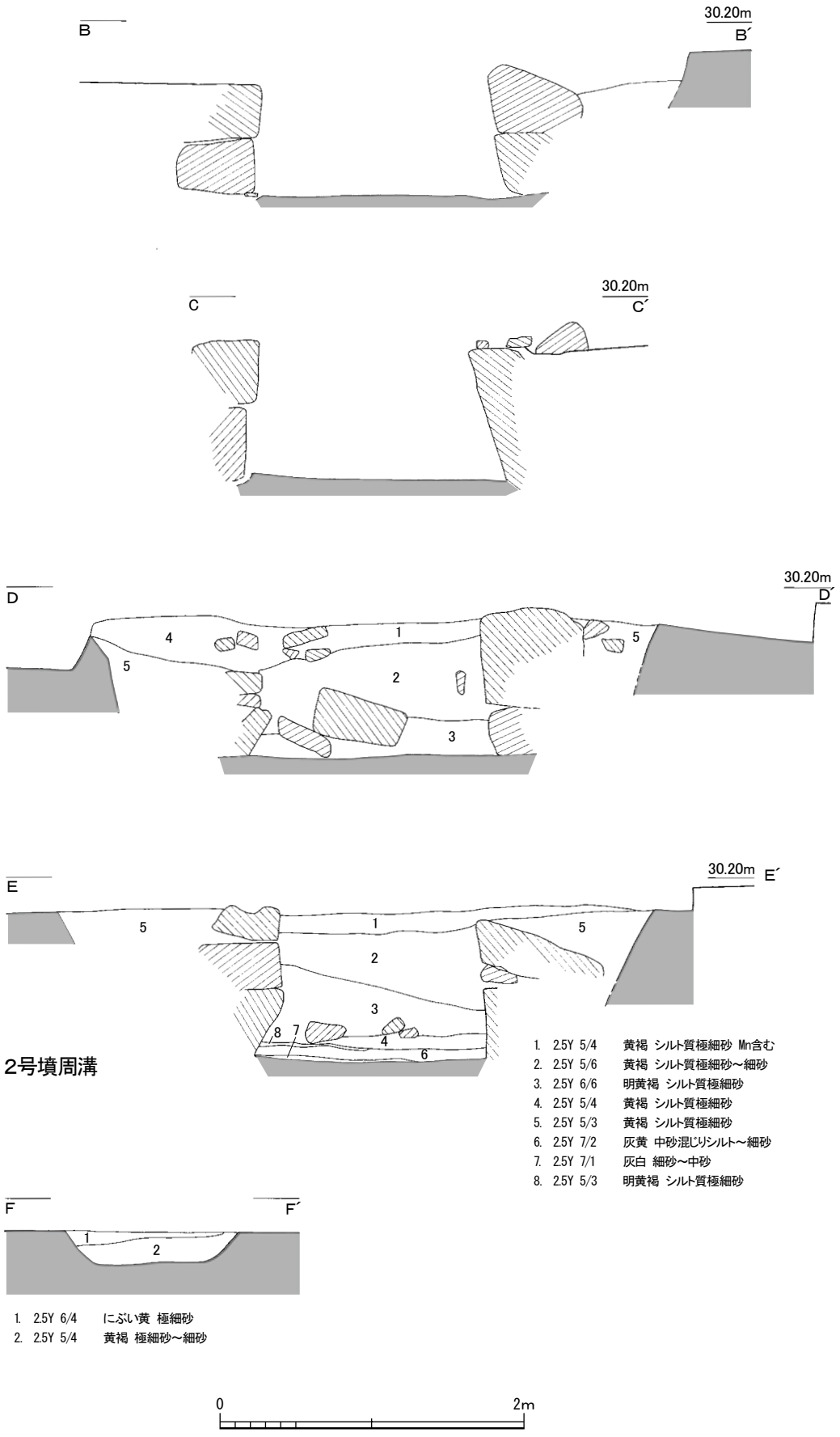


図 24　天王山 2 号墳断面図

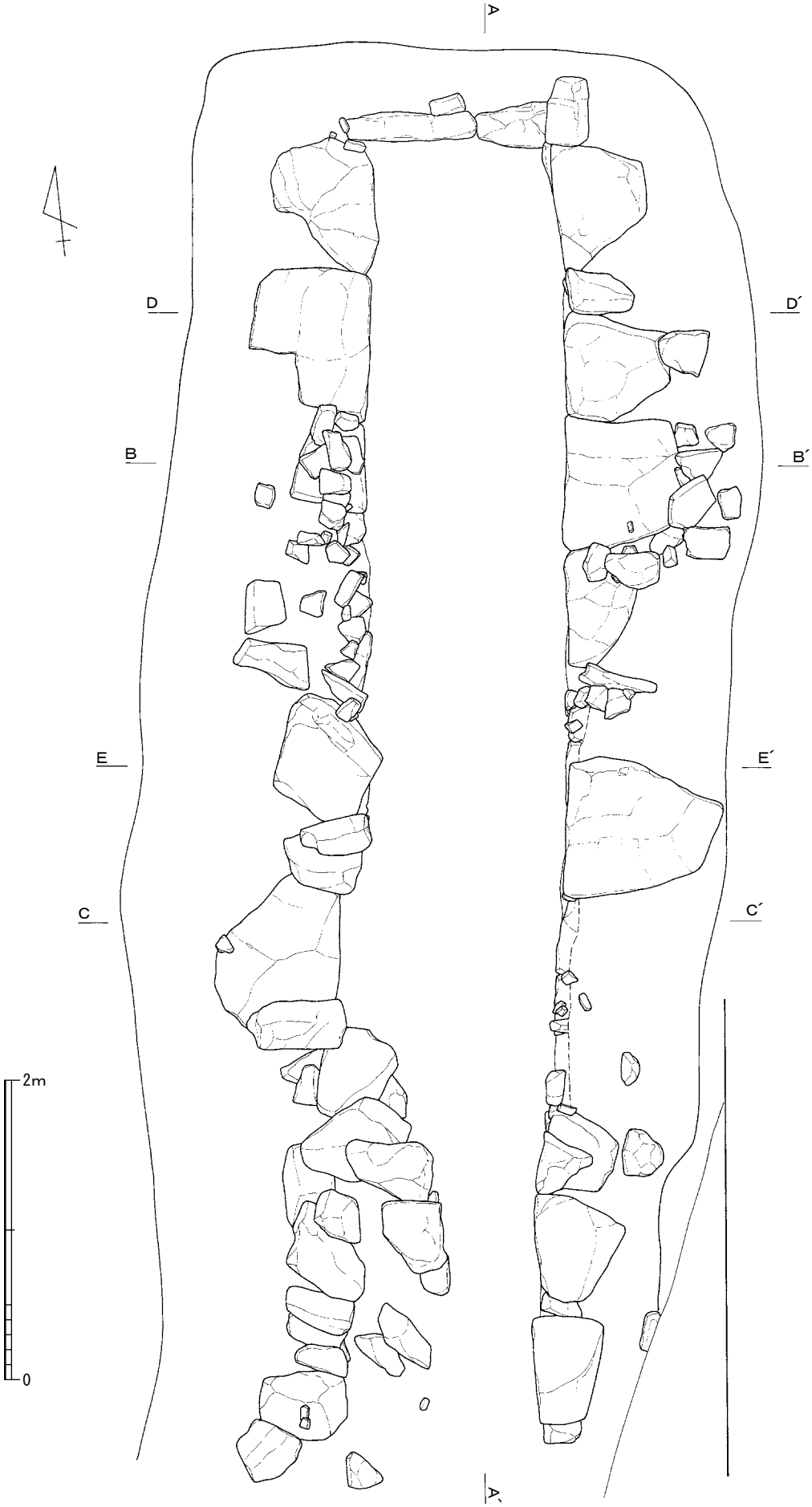


図 25　天王山 2 号墳横穴式石室平面図

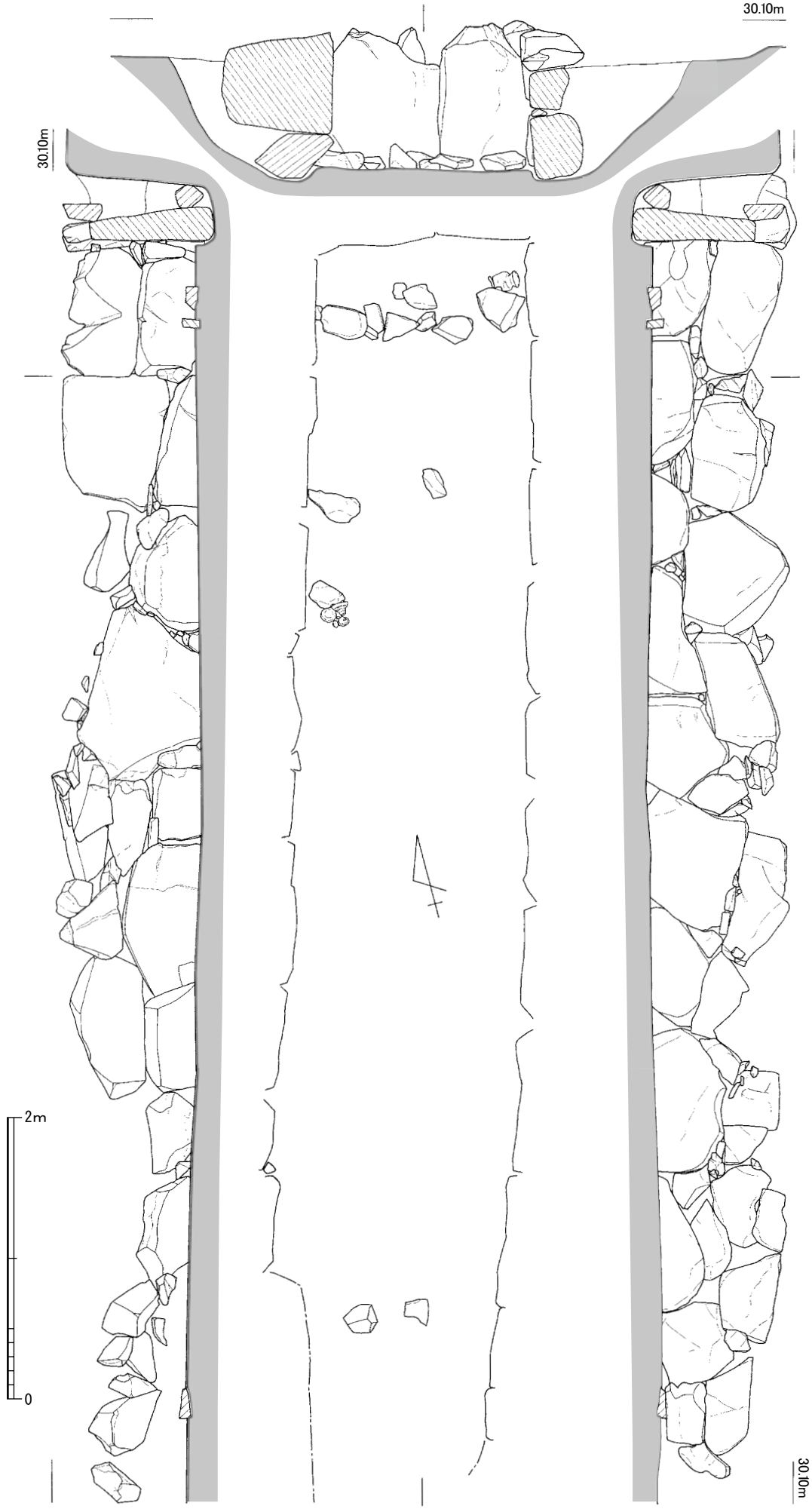


図 26　天王山 2 号墳横穴式石室実測図

手が加わっている。特に西壁の方が劣悪である。そのため、片袖か無袖かも決定できないが、右（西）片袖よりも無袖とした方が妥当であろうか。石室の長さは墓道が位置していることから、大きく延びることはないが、僅かに長くなるかもしれない。袖があるとすれば、石室の規模は玄室で長さ 7.5 m、奥壁幅 1.45 m、最大幅 1.6 m、玄門の幅 1.3 m、袖幅 0.25 m、残存する高さ 1.1 mである。羨道の長さ 1.1 mが残存している。石室の残存長は 8.6 mとなる。墓道上面に 1 石存在しており、そこまで側壁残存部からさらに 1.2 mある。この石材まで生きているとすれば、全長 9.8 m（羨道 2.3 m）となる。玄門から周溝（墳丘裾）まで 5.5 mある。

石材は地元で採取される流紋岩を使用している。用石法は一部縦積みしているが多くは横積みである。縦積みとなっているのは奥壁である。 2 石を奥壁として並べている。幅 0.9 m、0.7 m、高さ 1.0 m余りの大きめの石材であるが、ただ厚さは 0.3 m足らずと板石である。厚い部分を下に据えている。奥壁だけは墓壙内に奥壁を据える小口穴を設けている。幅 0.4 m、深さ 0.1 mの穴である。奥壁は側壁に付けており、側壁 2 石に接している。高さもほぼ同じで 2 石目に目地が通っている。 3 石目は側壁と奥壁にまたがって配している。側壁は西壁中央付近に最も大きな石材を配している。長さ 1.3 m、高さ 1.0 mの石材である。次に東壁の袖付近に大きい石材を配置している。基底石が必ず大きいという訳ではなく、２石目の方が大きめの石を使っている。

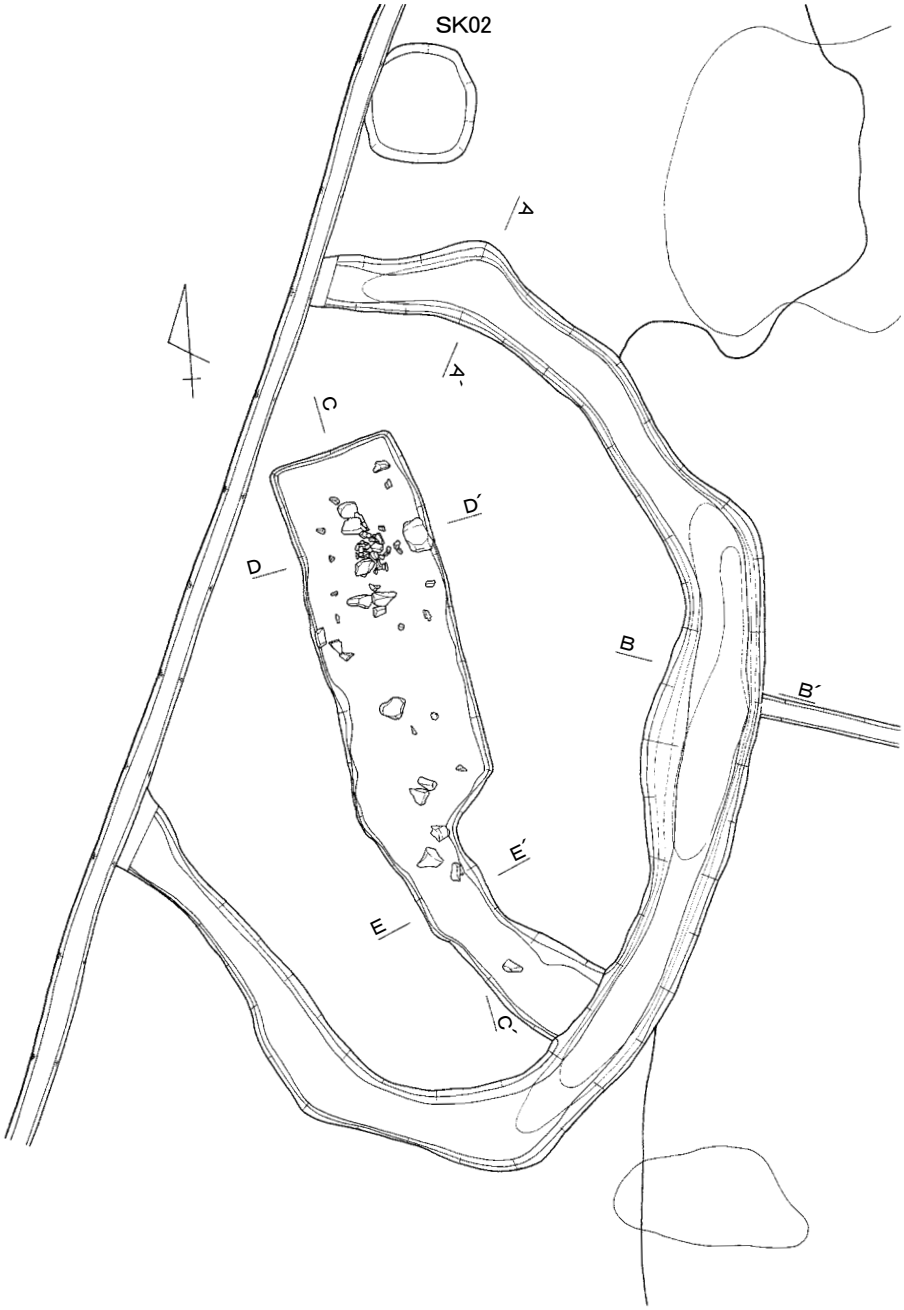
床面までも手が加わっており、石室を崩した際の石材が入り込んでいた。開口部付近と石室中央付近が強く改変されており旧状を残していない。石材には近代以降の矢穴が見られることから、開墾に際して石材を割って耕地化したものと思われる。幸い奥壁手前と開口部付近だけ旧状が残っていた。奥壁手前は棺台と思われる石材が存在し、その間から須恵器壺（盌）・勾玉が出土している。開口部付近からは須恵器杯蓋と長頸壺が出土している。玄門推定付近西側は側壁が崩壊しており、その下から瓿・壺が出土している。開口部中央に径 1.7 mの不定円形の浅い土坑が存在した。最大深さ 0.1 m前後で痕跡程度の浅さでレンズ状の断面であった。遺物は出土せず、埋土も黄灰細砂で特徴的なものではなかった。開口部中央の土坑という点で注目される。

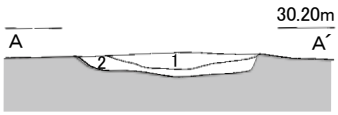
墓道は開口部から直線に 10 m延び、そこから東側に曲がっているが調査区外である。幅 1.5 ～ 2.0 mで深さは 0.5 ～ 0.6 mで底面はやや平坦である。断面形状は逆台形に近く傾斜していない。開口部付近の墓道北端には 0.45 mの石材が置かれ、その下からミニチュアの提瓶が出土している。埋土からは須恵器甕と土師器甕が複数出土している。

５．天王山 3 号墳

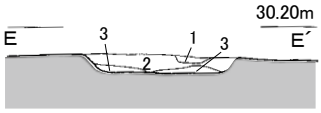
２号墳の西側に位置している古墳でやや小さい。南側にある 4 号墳の後に構築されたと思われる。主体部は削平されているが、墓壙と周溝は明瞭に検出された。墓壙内に流紋岩の石材が残存していることから、主体部は横穴式石室であったろうと思われる。

周溝は南北方向に長い楕円形を呈している。南北は最大12.3mを測り、東西は10m前後である。幅は最も広いところで1.5m、狭いところで0.8mとなっている。深さは最大で0.2mと浅く、最も浅いところで0.1mを測る。底面は比較的平坦で逆台形を呈している。底には有機質を含んだ黒褐シルト質極細砂が堆積している。その上に地山土の２次堆積土を含む層があり、上に灰オリーブのシルト質極細砂が堆積している。4号墳周溝上端と最短部で0.8mと近接しており、2・4号墳を意識して構築するのは当然として、さらに計画的に配置されたものと思われる。

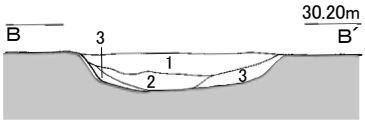




1. 5Y 5/2　灰オリーブ シルト質極細砂 礫含む
2. 10YR 5/8　黄褐 シルト質細砂



1. 2.5Y 6/2　灰黄 シルト質極細砂（耕作痕）
2. 2.5Y 6/4　にぶい黄 シルト質極細砂
3. 10YR 3/1　黒褐 シルト質極細砂



1. 2.5Y 7/4　浅黄 シルト質極細砂
2. 2.5Y 6/4　にぶい黄 極細砂 Mn含む
3. 10YR 6/8　明黄褐 極細砂～細砂 地山土礫含む

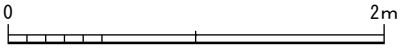


図 27　天王山 3 号墳平面図

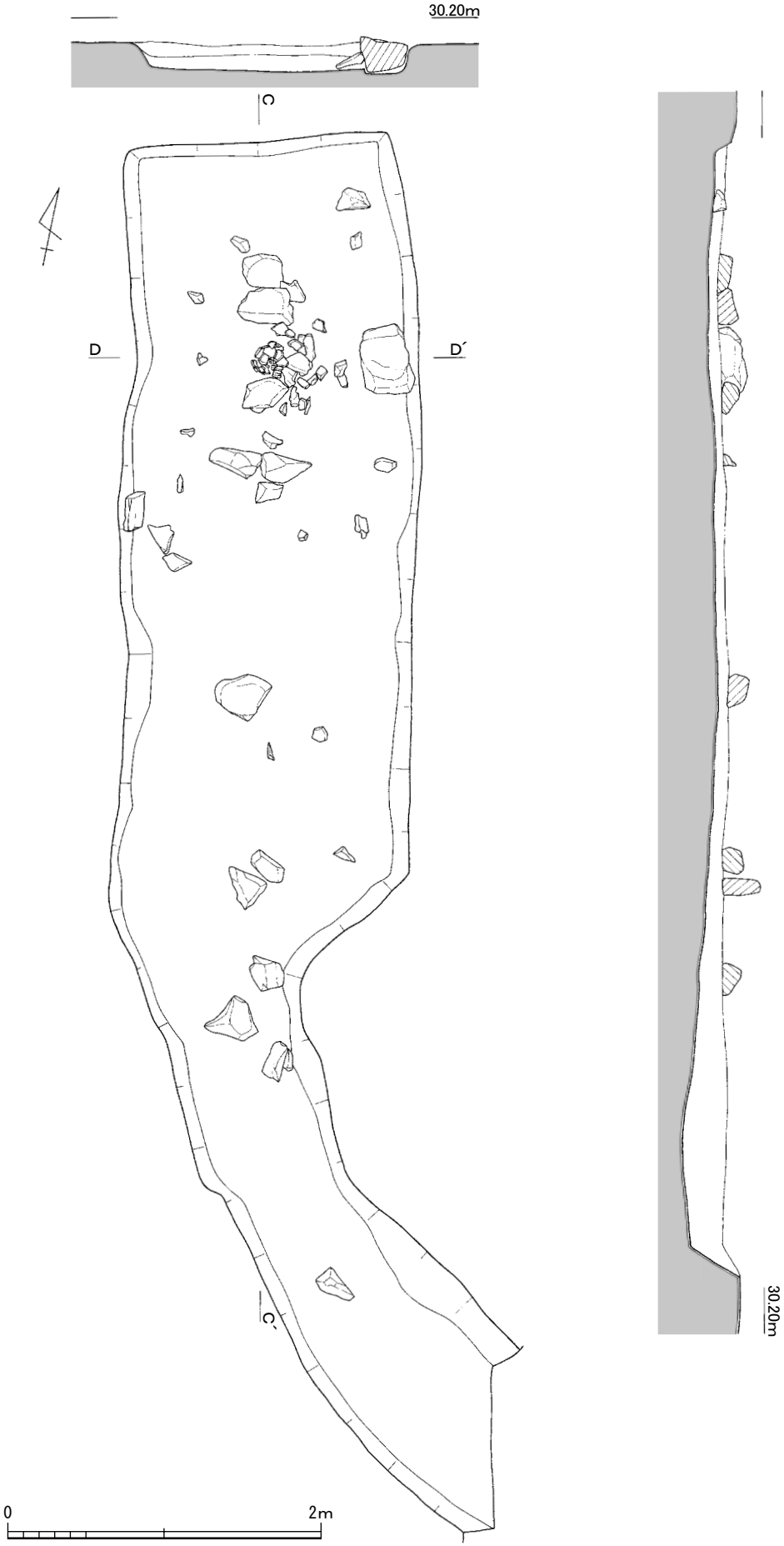


図 28　天王山 3 号墳主体部実測図

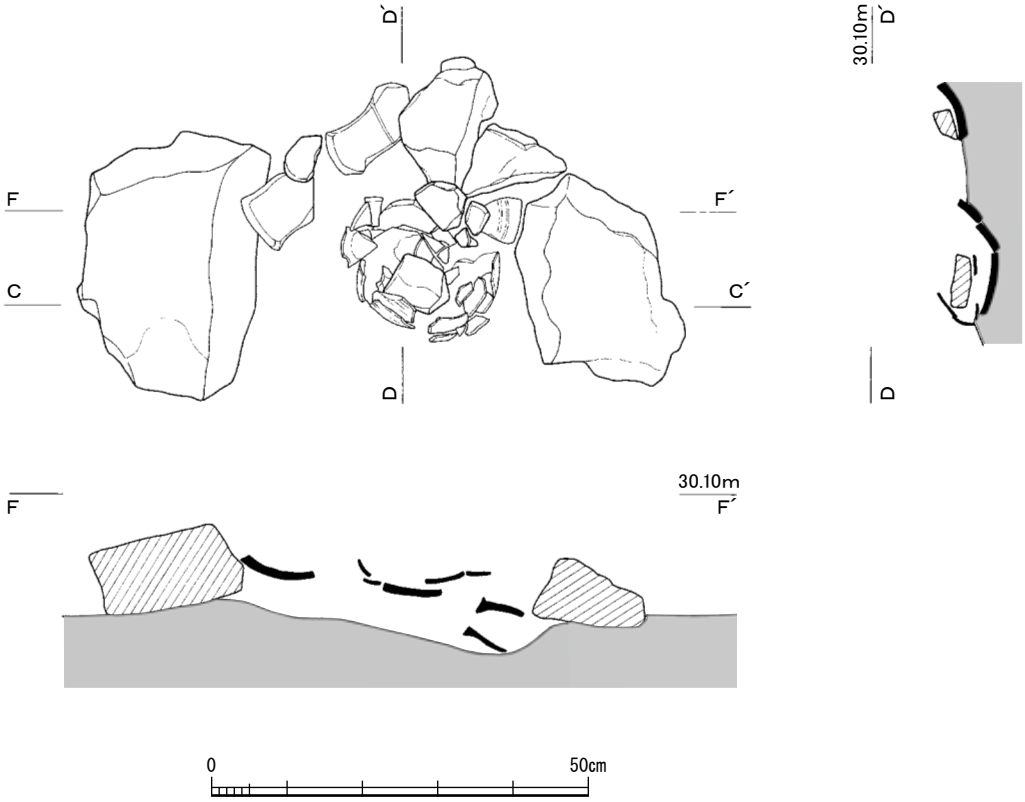


図 29　天王山 3 号墳遺物出土状態図

墓壙は南北に主軸を持つ長方形で、幅 1.9 m、長さ 5.2 mを測る。深さは最大で 0.3 mと残存度は低い。底面はほぼ平坦で開口部に向かってやや下がっている。石材は 10 数石検出したが、大半は原位置を保っているとは思われない。すなわち、床面も大半は旧態を残していないと思われる。

床面の大部分は損壊を受けているが、一部旧状を残している。奥壁手前中央部で奥壁から 1 ～ 2 m前後が残存している。中央部分から東壁付近が残存している。東壁の 1 石のみ原位置を保っている。0.45 mの大きさの石材で内側は平滑である。石室中央部に石材が集中する部分があり、棺台の可能性を考えている。石材の間から平瓶が出土している。石室は 1 石しか残存していないが、墓壙の大きさから石室規模は推定される。2・4 号墳を参考にすれば、幅 1 m未満で長さ 4.5 mまでの石室であろうか。

床面からは中世の土器が出土しており、早くに手が入れられていたことが窺われる。再利用時の遺物と旧河道（SR01）の時期に大きな差はなく、窯跡築造段階で手が加わったと思われる。

墓道は南東側に僅かに湾曲して延びている。最大幅 1 mで深さ 0.3 mである。周溝部分で消失しており、外側部分は SR01 によって削平されたのであろうか。

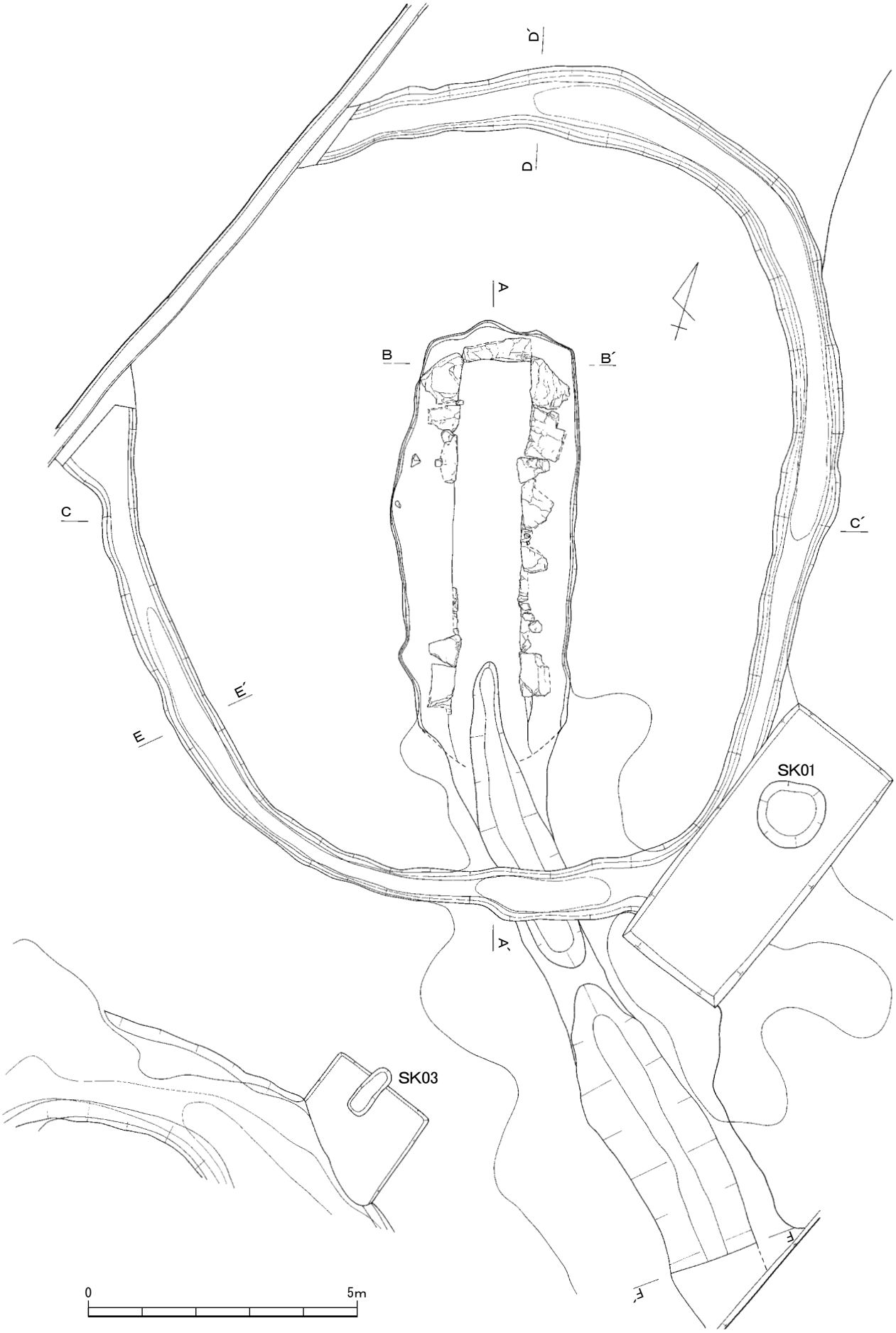


図 30　天王山 4 号墳平面図

6．天王山４号墳

調査区中央で検出している。平面的にほぼ調査しているが、北西の一部は調査区外に延びている。墳丘は完全に削平されていた。周溝が存在することから平面規模は確定できる。南北 15.7 m、東西 14 m の隅円方形に近い形状をしている。3 号墳とは 1 m、5 号墳とは 6 m周溝外側上端同士で離れている。2 号墳とは平面的に重複していそうで、4 号墳が後出で 2 号墳を切っている。2 号墳とは切り合いがあるが、他の 3 基は接して構築されており、計画性が看取される。周溝は幅 0.6 ～ 1.2 mで深さは 0.2 m前後である。断面形状は浅い皿状を呈している。周溝の底面のレベルに大きな差はないが、僅かに南側の開口部側が低くなっている。

主体部は横穴式石室であるが、上部は大きく崩されている。2 号墳同様、開墾時に石材が持ち運ばれ、一部は石室内に落とし込まれたものである。墓壙は東西 3.5 m、南北 8 mの長方形で南辺には墓道が接続してあり、明瞭な壁は有さない。深さは最大で 0.8 m残っている。墓壙中央だけ高くしようとする意図があり、部分的に 0.1 m前後高くなっている。大形石材を据えている部分に限られている。底面のレベルは周溝底より 0.5 m低くなっている。

石室で残存状態の良い部分は 3 石残っている。高さでは最大 0.9 m残存している。石室幅は奥壁前で 1.4 mあり、ほぼ同じ幅で開口部に続いている。長さは 6.2 mで無袖式である。奥壁は 1 石でやや大形の

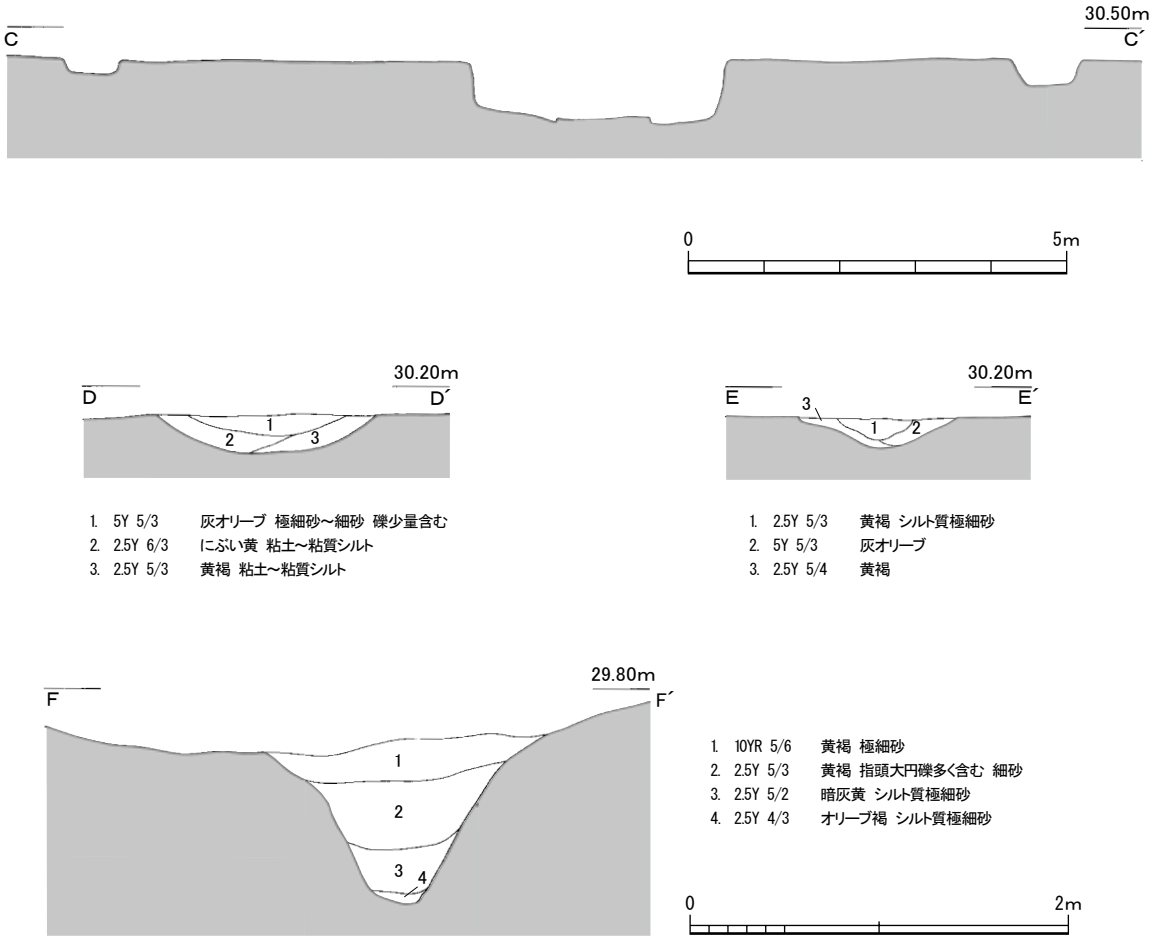


図 31　天王山４号墳周溝・墓道断面図

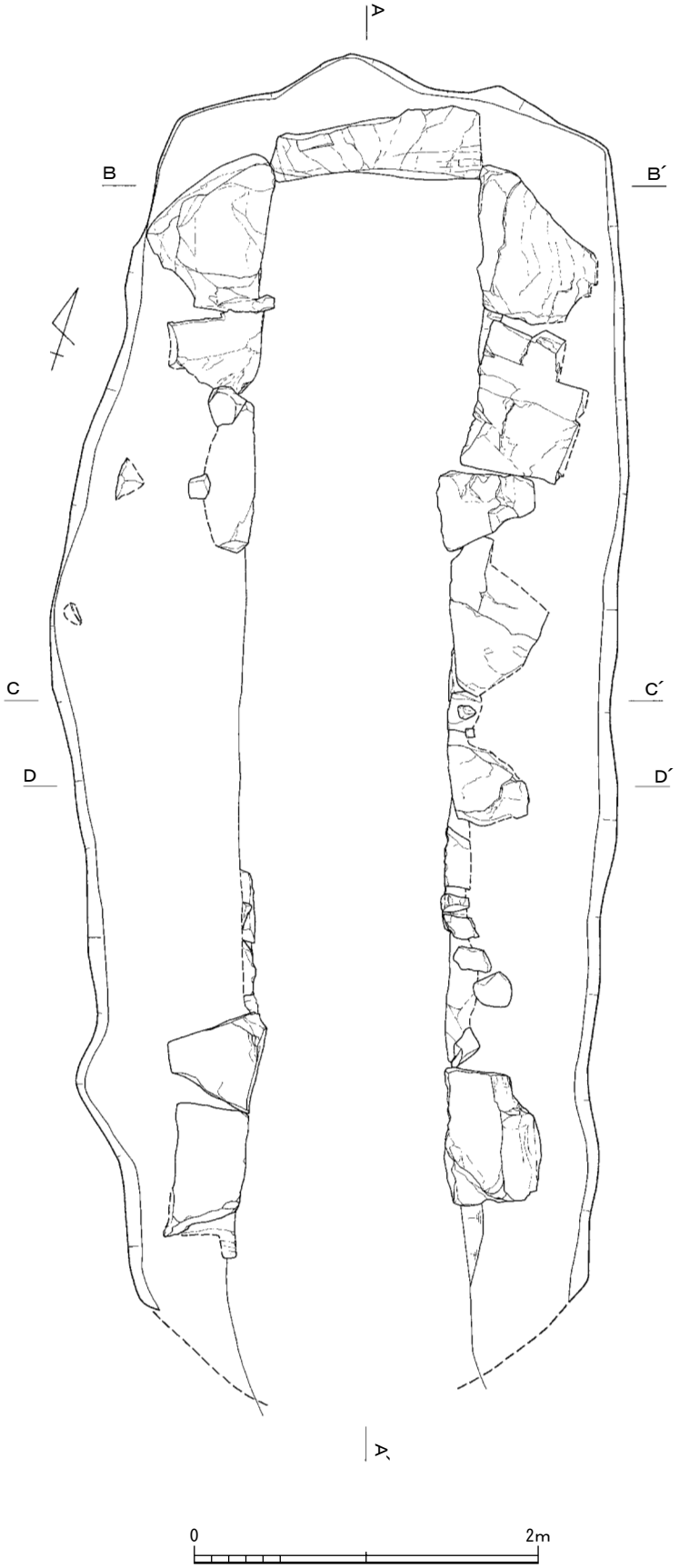


図 32　天王山 4 号墳横穴式石室平面図

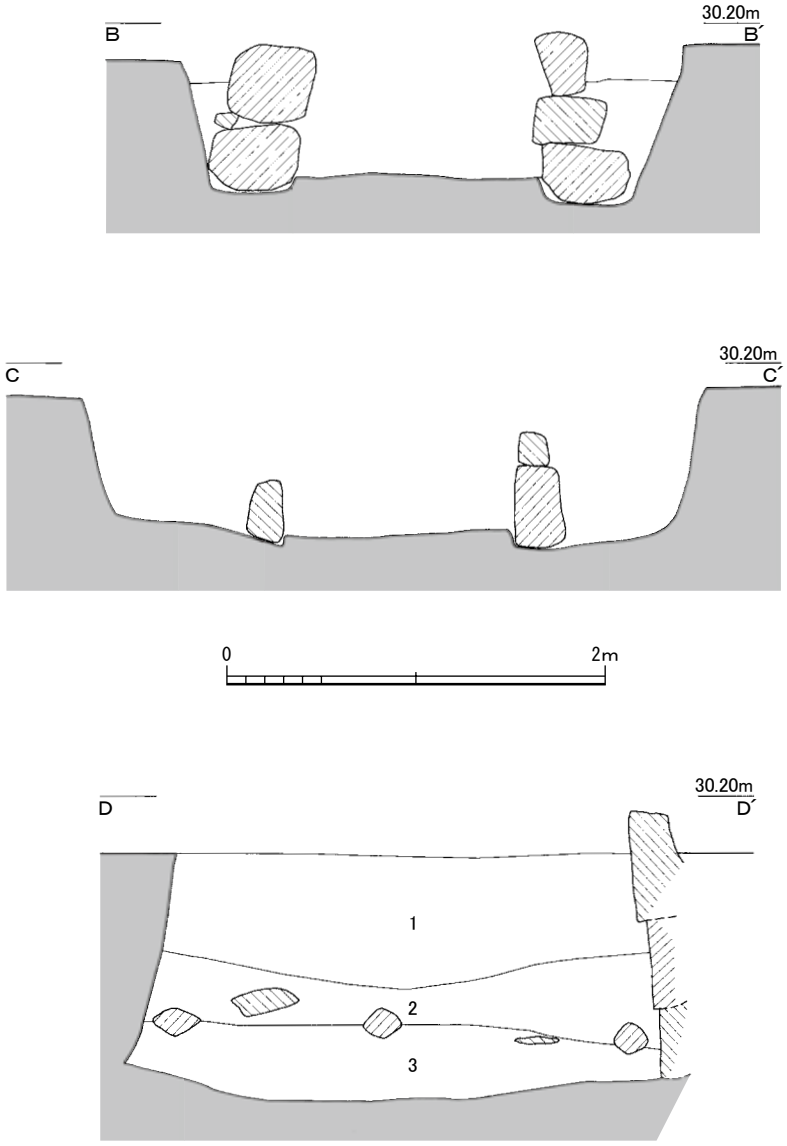


図 33　天王山 4 号墳横穴式石室断面図

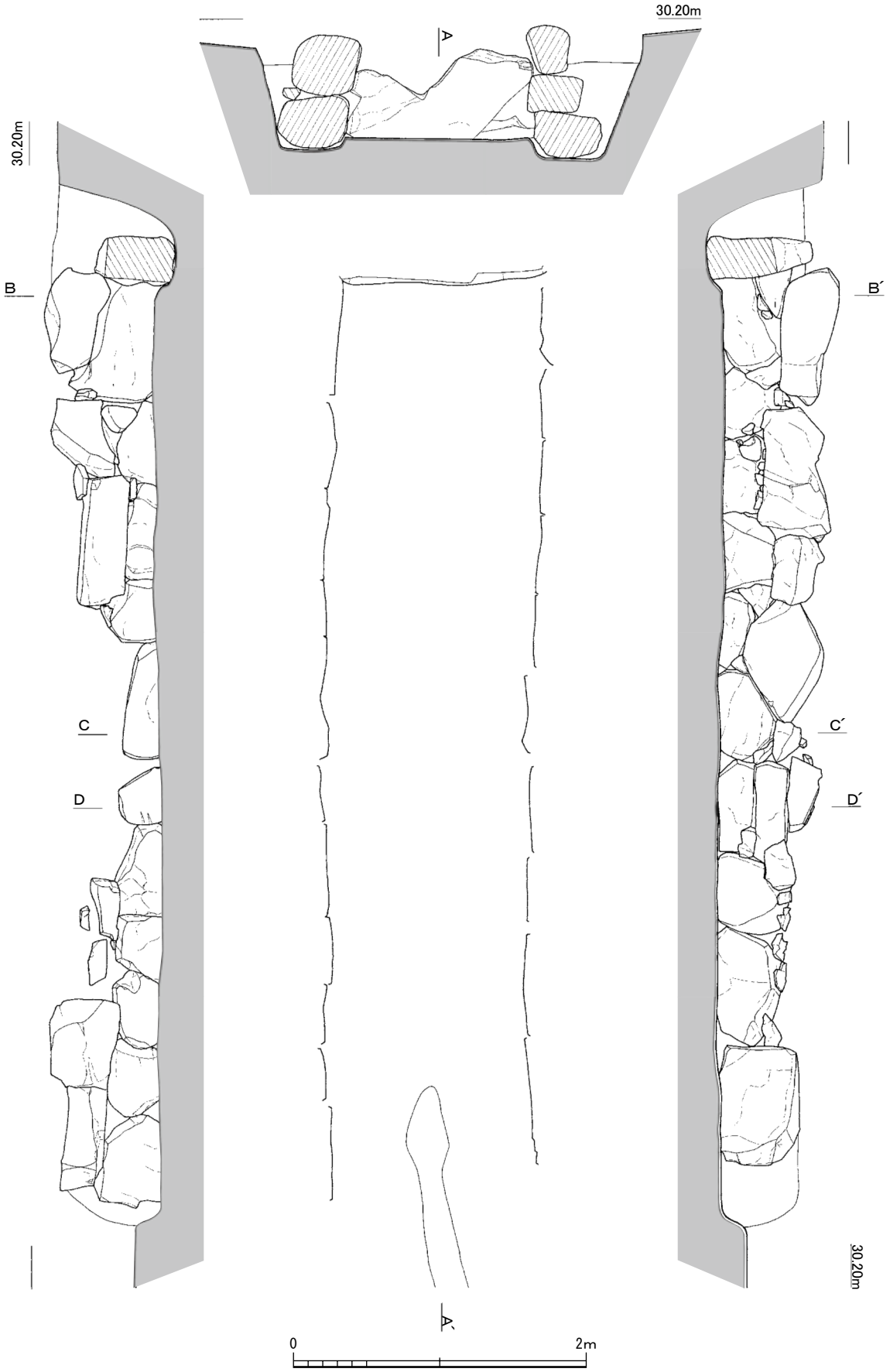
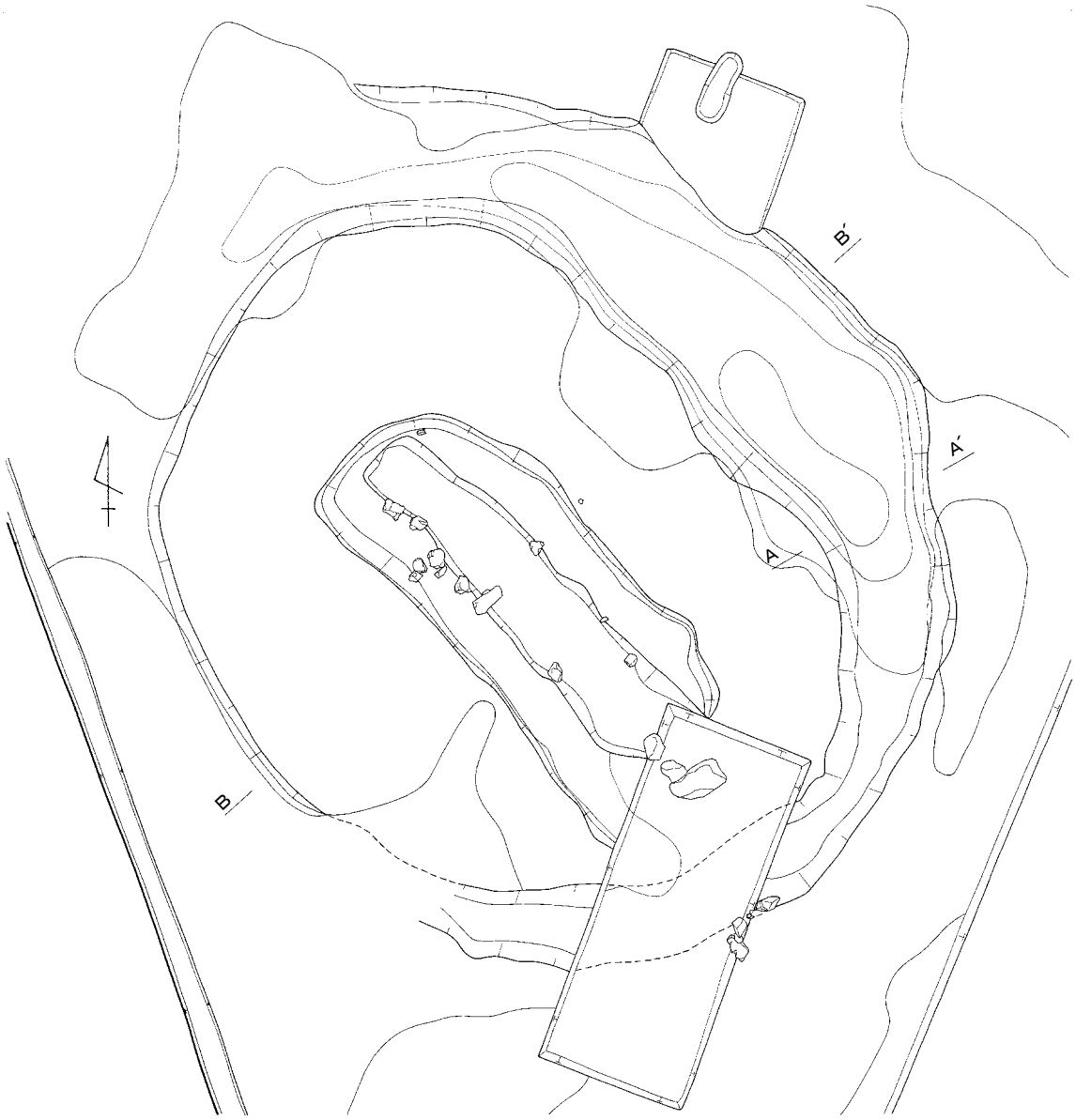
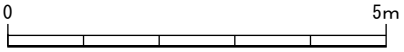
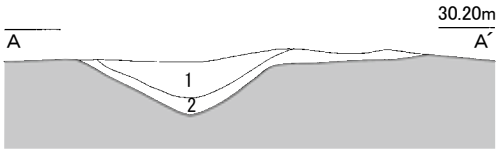


図 34　天王山 4 号墳横穴式石室実測図







1. 2.5Y 5/4　黄褐 粘質シルト～極細砂
2. 10YR 5/4　にぶい黄褐 粘質シルト混じり細砂～小礫

図 35　天王山 5 号墳平面図

石材を横置きしている。側石は僅かに持ち送っているような個所もあるが、基本的には直に近い積み方である。東壁奥半分は１石目の上に目地を有するが、手前は１石上面と２石上面に目地を通している。西壁は奥に大きめの石材を配したことから、この上面と２石目上面が同一面となるように配している。石材は極端に厚みのある石材は少なく、裏込めの石材も少ない。

床面まで手が加わっていたことから、出土遺物は少ない。床面から10㎝上付近で天王山窯跡の時期の須恵器椀が出土していることからも早くから改変されていたことが明らかである。床面からは、須恵器杯蓋・ミニチュア提瓶・壺が出土している。墓道からは超大形提瓶が出土している。

墓道は石室開口部から緩やかな弧を描いて南東部に延びている。断面形状はＶ字形の急斜面でレベルは外側に下がっている。底面に僅かに自然堆積の土が認められるが、その上は意図的に埋めた土で長くは開いていなかったと思われる。周溝部分では明瞭に溝が検出できたように、石室完成後に埋め戻したものと思われる。墓道は調査区外へ続いているが、横の水田畦畔面ではすでに削平されていた。幅は北側が狭く南側に向かって広くなっている。北端は尖っており、1.2 ～ 2.0 mの幅を持つ。深さも南側に向かって深くなり最大で 1.05 mを測る。

７．天王山５号墳

調査区南側に位置している。4 号墳と墳裾で 4 m離れている。調査区内に周溝は納まるはずであるが、西側は削平されて残存状態が悪い。自然条件によるものかもしれない。東西が 13 m、南北が 12 mを測る規模である。北側は後世の影響を受けていると思われ、幅が 2.5 mと広がっている。この部分からは後世の須恵器小片が多く出土している。当支群の中では最も遅れて築造されたものと思われる。

主体部は他と同じ横穴式石室であろうが、ほとんど残っていない。墓壙は東西 2.6 m、南北 6.4 m、最大深さ 0.3 mを測る。墓壙底面が周溝底面より僅かに高くなっている。中央部分が幅 1.2 m、長さ 5.9 mで一段下がっている。深さは３～５㎝と僅かである。西側に小さめの石材が検出されている。奥壁手前で鉄鏃と耳環が出土している。それ以外に須恵器長頸壺頸部の破片だけが古墳時代のもので、他は中世須恵器が出土している。

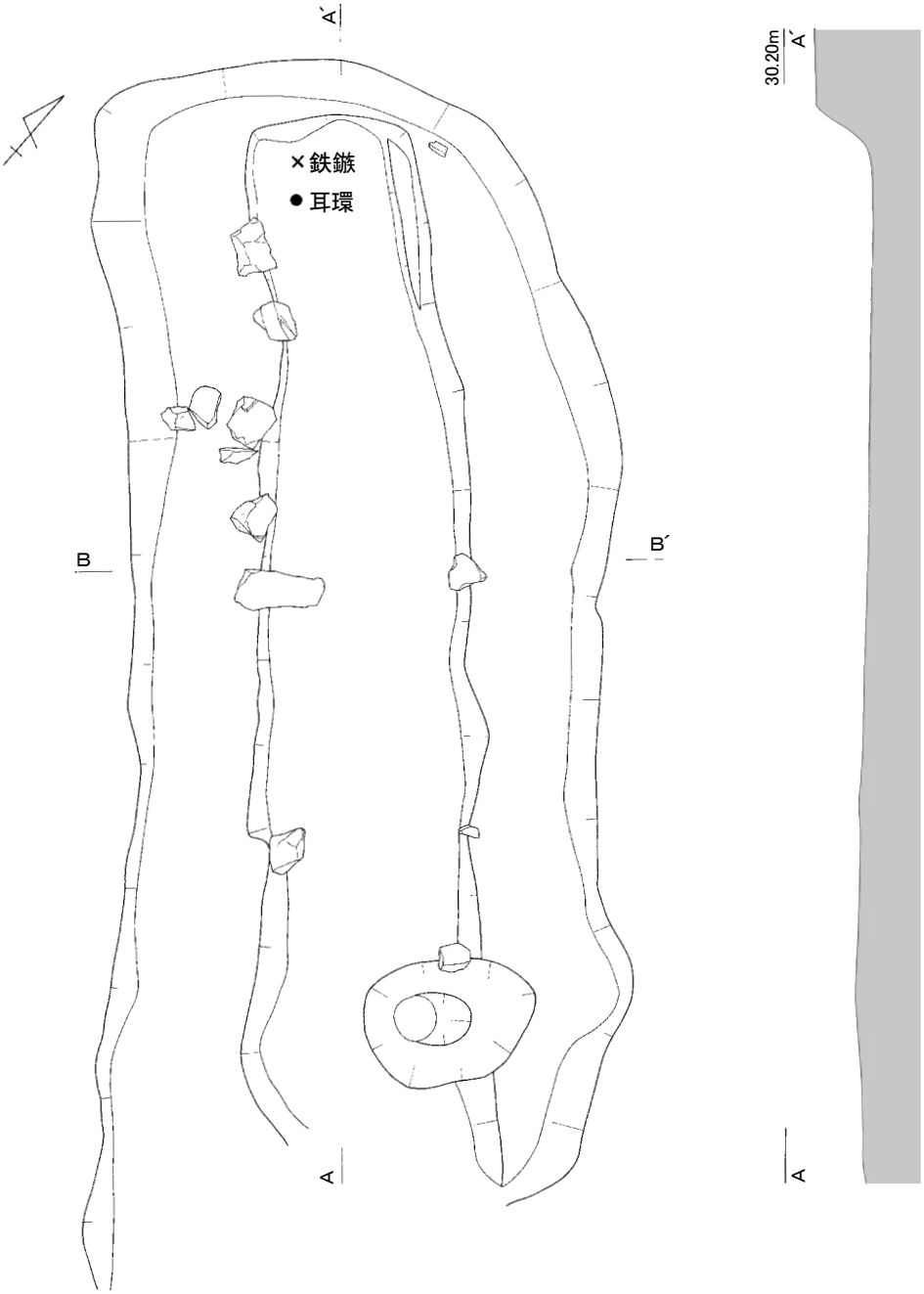
５号墳では開口部に確認調査トレンチが設定されたことから、墓道の存在は明らかでない。ただ、周溝外側には痕跡が確認されなかったことから、３号墳と同じタイプの墓道ではないかと思われる。

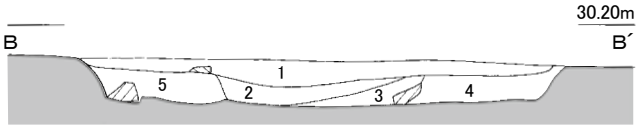
８．旧河道（SR01）

調査区北側中央から調査区内を南東に流れている。自然地形であろう。特に西側は明瞭な肩を有しておらず、自然に溢れ出た状況である。２号墳南側で東に回っているが一部は南側にも溢れたようで同じ土層が南側にも延びていた。全体的に肩部は緩やかで、中央から少し西側の深い部分を有している。2 号墳の西側周溝は削平しており、３～５号墳の東側周溝にも影響を与えている。旧河道埋土と周溝埋土上面まで須恵器が出土しており、平安時代末以降の河道と思われる。

９．その他の遺構

土坑を３基調査している。SK01 は確認調査で検出された円形土坑である。4 号墳の周溝南東部に位置している。径 2.6 mの円形であるが西側はやや歪になっている。北側と南側の肩部が強く焼けており赤化している。底から離れた全体の斜面部下側も焼成され黒灰色から青灰色を呈し、焼土坑の状況を示し





1. 2.5Y 5/4　黄褐 シルト～細砂
2. 10YR 5/4　にぶい黄褐 極細砂～細砂
3. 10YR 5/6　黄褐 シルト混じり細砂～粗砂
4. 10YR 5/6　黄褐 極細砂～細砂
5. 10YR 4/6　褐 粘質シルト～細砂 Mn･鉄分含む

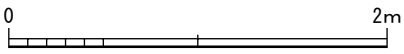
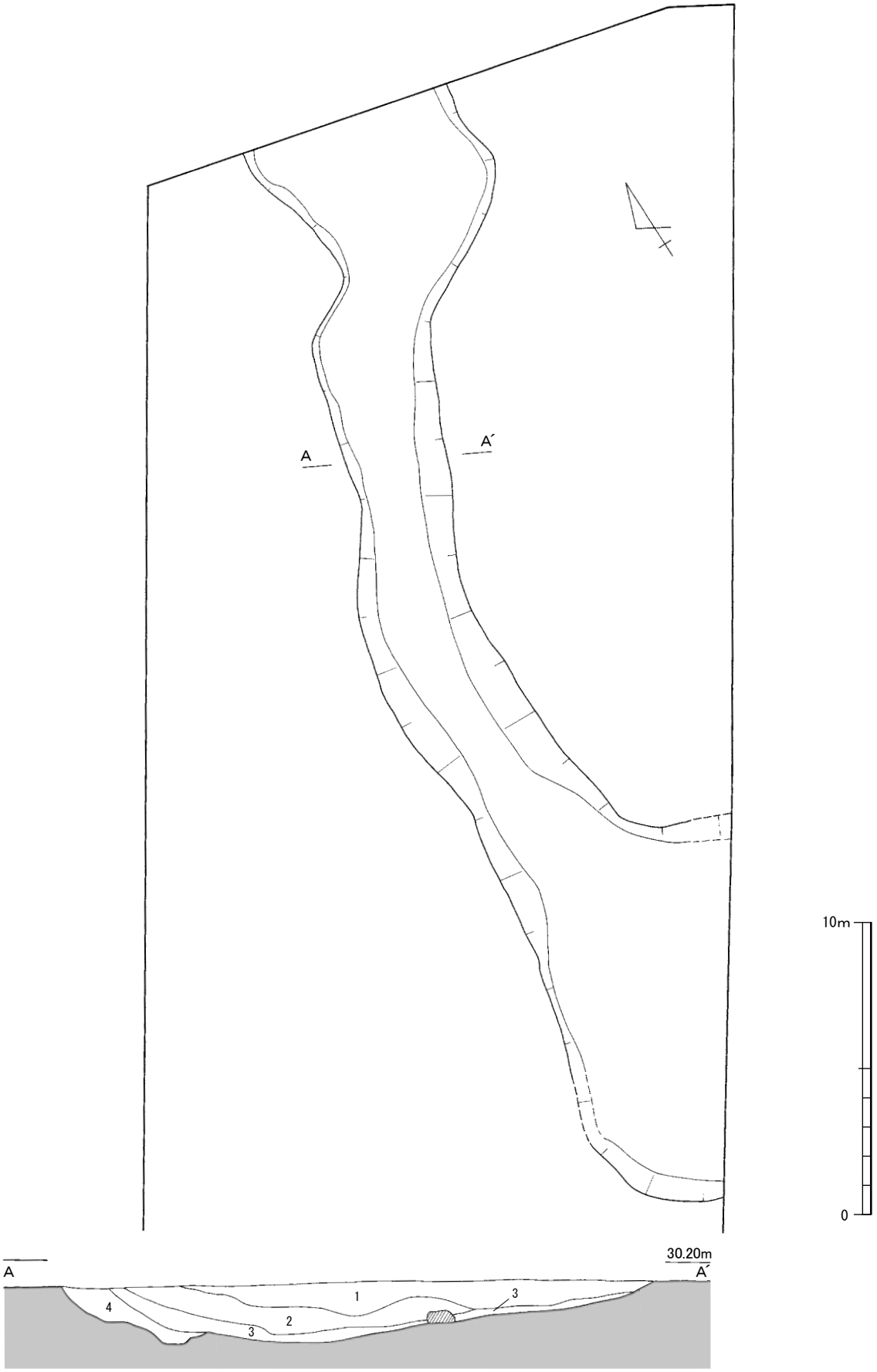


図 36　天王山 5 号墳主体部実測図



1. 10YR 5/6　黄褐 細砂 礫をごくわずかに含む
2. 2.5Y 6/3　にぶい黄 極細砂～細砂 3層をブロック状に含む
3. 5Y 5/1　灰 極細砂
4. 3号墳周濠

0　2m

図 37　流路（旧河道）実測図

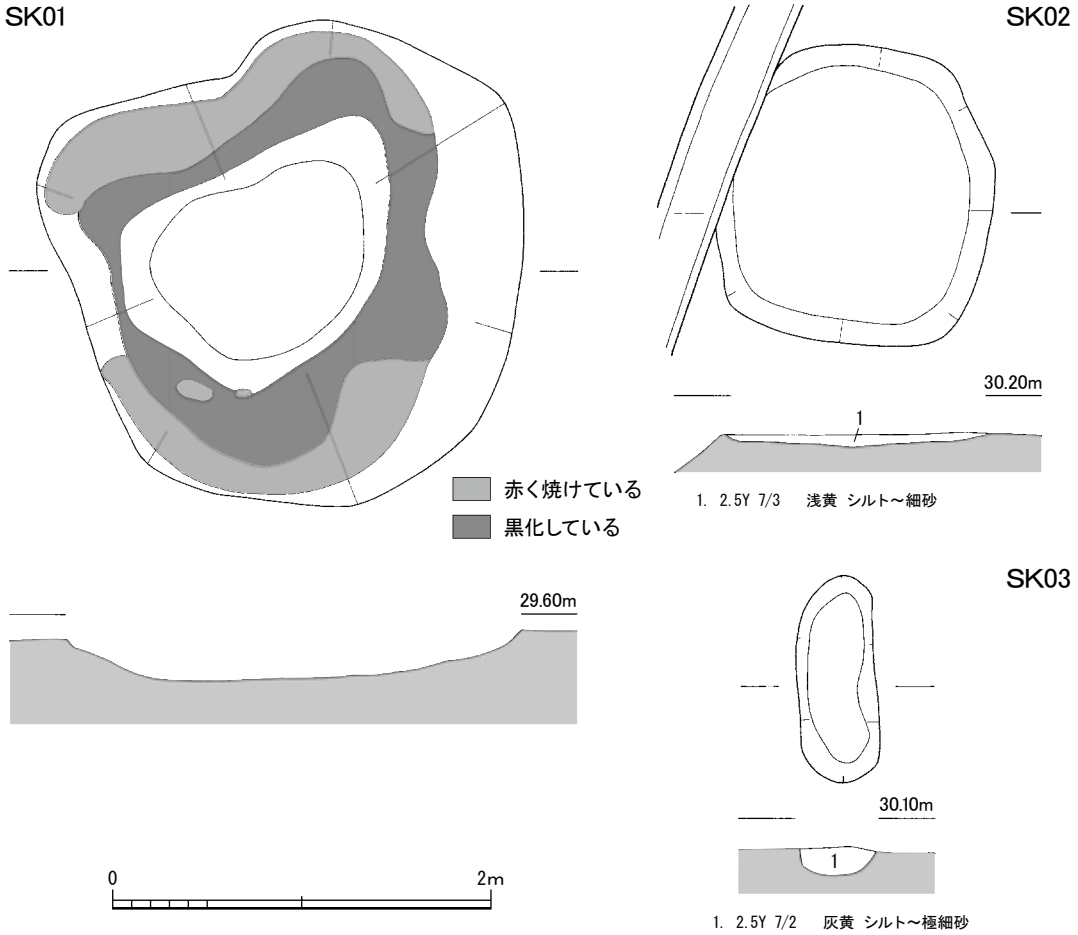


図 38　土坑実測図

ている。深さは最大で 0.25 mでレンズ状の断面をしている。緩やかな斜面で遺物は出土していない。やや長期にわたって使用されたものと思われる。

SK02 は調査区北西で検出している円形土坑である。南北 1.6 m、東西 1.5 mの隅円方形に近い歪な円形である。深さ 0.1 m前後と浅いものである。遺物は出土していない。

SK03 は 5 号墳北側にある隅円長方形の土坑である。南北 1.1 m、東西 0.4 m、最大深さ 0.7 mを測る。肩は直に近く落ちており、底面は丸くなっている。南北方向には水平である。やはり、遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。灰黄シルト～極細砂を埋土にしている。

10. 小結

発掘調査の結果、天王山古墳群の古墳は 5 基調査した。すべて横穴式石室を埋葬主体とする円墳である。県道沿いに東沢古墳が存在しており、同じく円墳で横穴式石室を主体部としている。別冊となる東沢 2・3 号墳も同様であり、3 基から成る新池古墳も同じである。古墳時代後期でも終わり頃に構築された古墳群であり、残存していない古墳も多数あったことが想定される。今回の 5 基も耕作地下に眠っていたもので、墳丘は全く残っていなかった。開墾時に多数の古墳が破壊されたようである。大きく改変され旧地形も残っていないが、尾根筋と山腹の両者ともに古墳が構築されたようである。今回調査した

5基は尾根筋に位置し、新池古墳群は山腹に位置していたと思われる。新池や猫池には多くの石材が存在しており、古墳石材であった可能性が高い。幾つかの小支群を構成されていたであろう。その単位は小さく、2・3基から多くても10基未満であろうと思われる。今回調査した5基も1号墳と2～5号墳の間には窯跡が築かれた谷があることから、別支群と考えられる。

2～5号墳の支群は周辺に広がっている可能性があり、何基で構成されるかは不明である。尾根（台地）上に構築されたこともあって、墳裾（墓域）を画する周溝が顕著である。3～5号墳は周溝同士が近接し最短は2mである。このことは新たな古墳を築く際に前に築かれた古墳が明確に意識されていたことに起因することは明らかである。2号墳は西側を後世の自然河道で削平されて周溝が残っていないが、復原すると4号墳と切り合い関係があり、この間は断絶があったかもしれない。周溝の規模から、2号墳は径18m、4号墳は径16m、3号墳と5号墳は径12mとなる。径18mとなる2号墳はやや大きめの古墳と言えよう。

周溝以外に墓道が存在することも注目される。特に2号墳と4号墳には明瞭な墓道が付いている。築造時に使用したもので、石室完成後には埋め戻されている。その際に墓道に土器を置いており、祭祀行為と思われる。2号墳ではミニチュア提瓶が、4号墳には大形提瓶が置かれていた。周溝の切り合いでは断絶があるとしたが、祭祀形態では共通している。墓道としたV字状の溝は石材を運ぶのに有効であったろうと思われる。

主体部は横穴式石室である。2号墳だけ片袖式の可能性が残されているが、他は無袖である。2号墳も側壁が崩壊しているだけかもしれず、一応すべて無袖としておく。3・5号墳の石室は残存していなかったが、墓壙の大きさから5mまでの長さと推定される。2号墳は8.3m、4号墳は6.5mを測る。奥壁は2号墳が2石から成り縦積みにしており、幅1.4mを測る。4号墳は幅1.2mあり1石を横積みしている。鏡石と言われるほど大きな石材ではない。

出土遺物は少ない。須恵器・土師器・勾玉・鉄鏃と中世土器である。須恵器からみると杯蓋が逆転する時期でTK209型式からTK217型式にかけてと思われる。提瓶に超大形とミニチュアがあることが興味深い。

築造時期は7世紀に入った頃に2号墳が築かれ、次に4号墳、そして5号墳、最後に3号墳と小型化していったものと思われる。今まで理解していた時期よりも新しい7世紀前半に古墳群が構築されていたことになる。

Ⅳ　天王山古墳群の遺物

1．1号墳出土遺物

5点図化しているが、1点(2)は人力掘削時のもので、1点(6)は古墳ではなくSX02出土の近代遺物である。

(2)は小形の杯身で内湾する体部から端部丸く納める。ロクロナデで下端部はロクロケズリが見られる。灰白を呈し、砂粒僅かに含む。(3)は外傾する口縁部で端部は尖りぎみである。ロクロナデで外面に2条の沈線がある。内面は灰白で外面は灰白からオリーブ灰をしている。壺の口縁部であろうか。(4)は甕口縁部である。外反する頸部から突出し内湾ぎみに延び端部は外側に尖る。ロクロナデで灰をしている。(5)は平瓶で底部と把手を欠く。口径11.7㎝と大きめで外反し端部丸い。ロクロナデで口縁部中央に幅広の沈線がある。肩は張っており稜線を有する。肩部と内面上部に自然釉が付着しており、灰白をしている。(6)は施釉陶器の杯である。底面は平たく、体部内湾し端部角張る。内面は白色の釉薬、外面は緑色の釉薬を施し、外面は黒と明るい緑色で文様を描いている。内面にはトチンの痕跡が5ヶ所見られる。高台は断面台形をしており、口縁端部とともに露胎である。

図39　1号墳出土遺物写真（1）

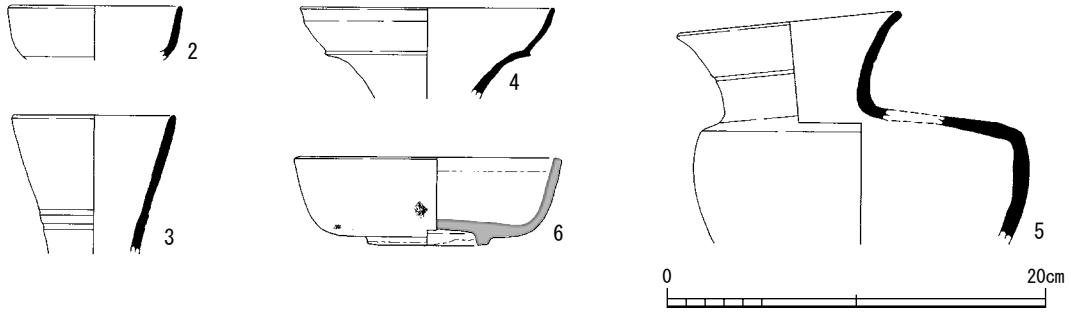


図40　1号墳出土遺物実測図

表2　1号墳出土遺物観察表

No.	種　別	器種	法量(㎝)			技法　他	形態の特徴	備考
			口径	器高	底径			
2	須恵器	杯	(9.00)	(2.90)		ロクロナデ、ロクロケズリ	内湾する体部、端部丸い	
3	須恵器	壺	(8.50)	(7.30)		ロクロナデ、沈線2条	外傾し端部尖りぎみ	自然釉
4	須恵器	甕	(13.50)	(4.80)		ロクロナデ	外反してから内湾する	
5	須恵器	平瓶	(11.70)	(12.40)		ロクロナデ、沈線1条	肩張り、口縁部外反する	自然釉
6	施釉陶器	杯	(14.20)	4.60	6.30	施釉、端部露胎	内湾し高台台形、端部角	

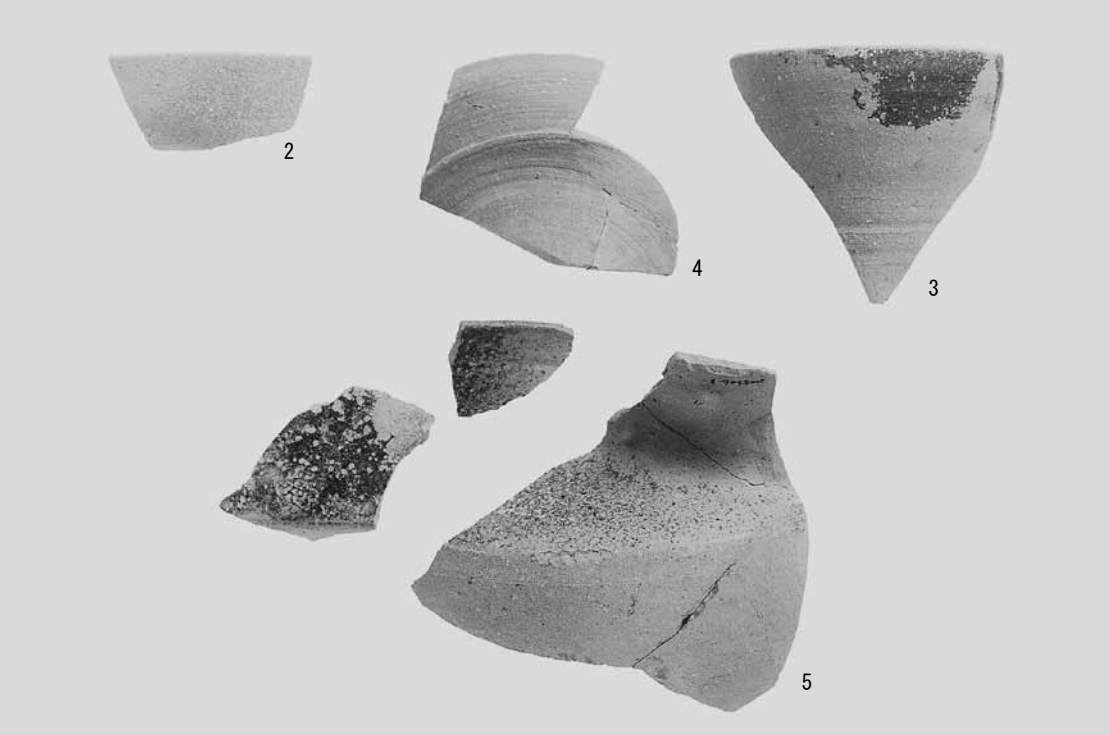


図 41　1 号墳出土遺物写真（2）

2．2 号墳出土遺物

16 点図化している。そのうち、7 点は石室から、4 点は墓道から、5 点は周溝から出土している。周溝からではあるが、旧河道 SR01 の埋没に伴う遺物と考えられる。11 点が本来の 2 号墳出土遺物である。江戸時代と近代の開墾によって石室は破壊されており、その際に多くの遺物が取り出された可能性が高い。

(7) ～ (9) の 3 点は石室内西壁沿いの落ちた側石下からまとまって出土している。杯蓋 2 点と甕 1 点である。(7) の天井部は平坦で体部は内湾しており、端部上で緩い変化点を有している。端部は外側に尖っている。ロクロナデで天井部はロクロケズリからナデ仕上げである。外面は灰で内面は灰白を呈し、僅かに長石など含むが緻密である。(8) は内湾する天井部から体部で、端部近くで変化し稜を持ってから直立ぎみに垂下する。端部は尖りぎみである。ロクロナデから天井部はヘラ切り、内面は 1 方向の仕上げナデを施す。器表は灰～灰白で器肉はやや白っぽい。僅かに細粒を含むが緻密な胎土である。(9) は肩の張る球形の体部で、下半はケズリを施している。肩部上に 1 条の凹線があり、凹線部分に径 1.5 ㎝の円孔を開ける。頸部は長く外反し、変化して外傾する。端部は尖る。頸部中央と変化点の下にも各々凹線が認められる。外面は灰～黒で内面は灰である。胎土は密で焼成良好である。口縁部はロクロナデである。

(10) は西壁沿いの玄門付近床面から出土している長頸壺である。肩の張る扁平な体部で丸底である。肩部上に 2 条の凹線がある。外面はロクロナデで底部はケズリを施す。外に開く口頸部で端部は丸い。頸部上部に 2 条の凹線がある。ロクロナデで灰白をしている。体部下半に自然釉がかかっている。(11) は球形の体部を有する壺で、頸部から上を欠いている。頸は細めで直立しそうである。肩部上に 3 条の凹線がある。ロクロナデからロクロケズリののち、底部はケズリを行っている。灰白で長石・雲母を含むが緻密である。破片は分かれて出土しており、玄門から墓道まで広がっている。(12) は奥壁手前の北東コーナー付近の棺台と思われる石の横から出土している。内湾する底部から直立する体部・口縁部に

図 42　2 号墳出土遺物写真（1）

なる。底面中央は器壁が薄くなっている。ロクロナデで下半はカキメが施され、上半は 4 条の凹線以外にも強いロクロナデで凹凸が生じている。端部は尖りぎみである。内面には自然釉がかかっている。底に脚台が付いており、外反してから明瞭な稜線を持ってから内湾して角張った端部になる。脚台上部に 2 ヶ所円孔がある。焼成はやや甘く、内面は黄灰、外面は灰白である。(13) は壺底部で平底から内湾する体部になる。残存部上端に凹線がみられる。底部内面はユビ成形で底面は回転ヘラ切りののちナデ仕上げ。体部下半はロクロケズリで、上半はロクロナデで自然釉が付着している。ヘラ記号状の直線が認められる。灰～灰白をしている。床面から勾玉が 1 点出土している。

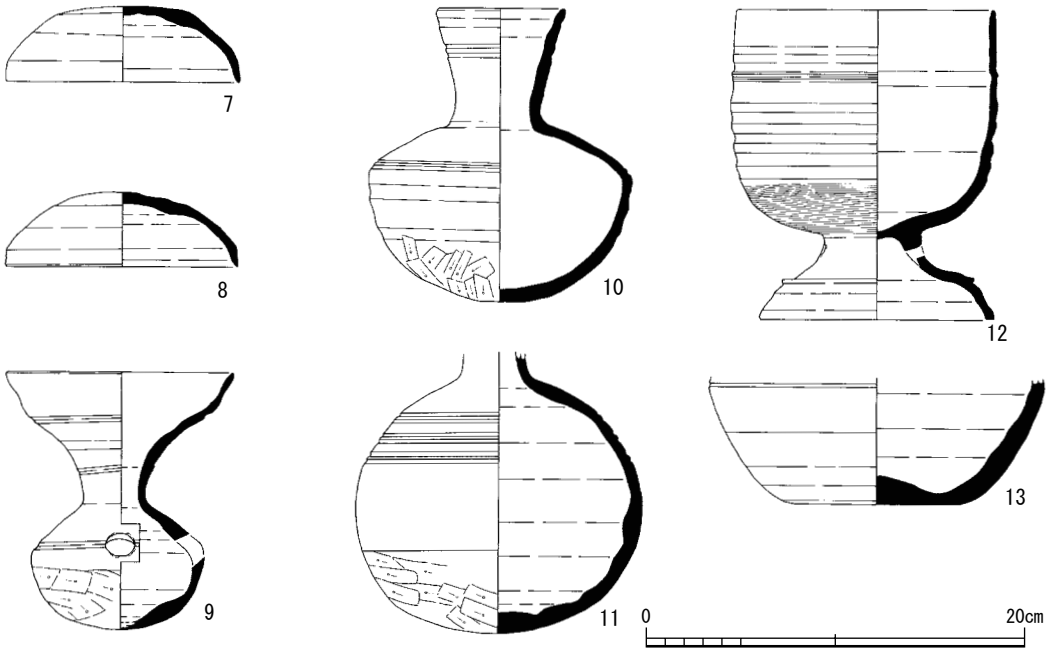


図 43　2 号墳石室内出土土器実測図

図 44　2 号墳出土遺物写真（2）

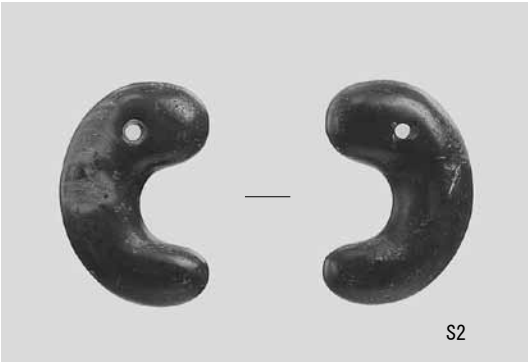


図 45　2 号墳勾玉写真

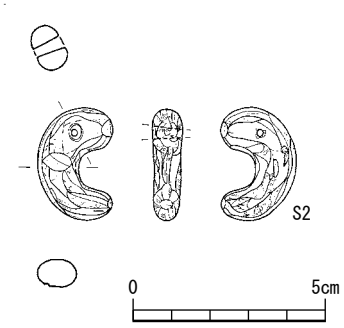


図 46　2 号墳勾玉実測図

表３　２号墳石室内出土遺物観察表

No.	種　別	器種	法量（cm）			技法　他	形態の特徴	備考
			口径	器高	底径			
7	須恵器	杯蓋	12.20	4.00		ロクロナデ、ヘラ切りナデ	内湾し天井部平たい	
8	須恵器	杯蓋	12.20	4.00		ロクロナデ、ヘラ切り	内湾し端部尖る	
9	須恵器	甕	(11.90)	13.60		ケズリ、ロクロナデ、沈線	球形体部から外反し尖る	
10	須恵器	壺	6.60	15.50		ケズリ、ロクロナデ、沈線	肩の張る体部から外傾	
11	須恵器	壺		(14.90)		ケズリ、ロクロナデ、沈線	球形体部から直立する	
12	須恵器	壺（盌）	(13.40)	16.40	12.20	ロクロナデ、凹線、円孔	直立する口縁部に屈曲脚台	
13	須恵器	壺		(6.70)	(10.10)	ロクロケズリ、ナデ	内湾し底部厚い	ヘラ記号?

（　）は復原径・残存高さ

鉄器は４点出土している。奥壁付近と開口部付近の２カ所から出土している。Ｍ１は茎部で鉄鏃であろうか。Ｍ２も断面方形で鉄鏃の可能性が高いが釘かもしれない。Ｍ３・４は不明である。

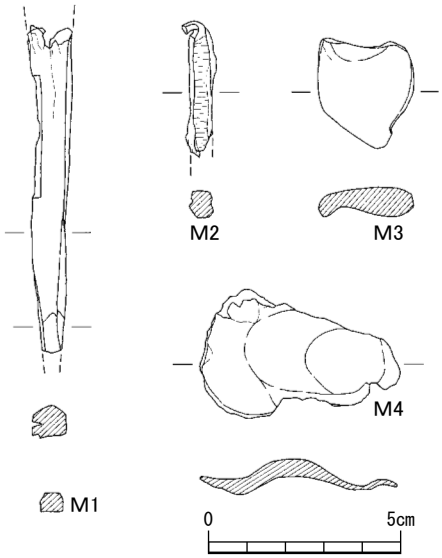


図 47 ２号墳鉄器実測図

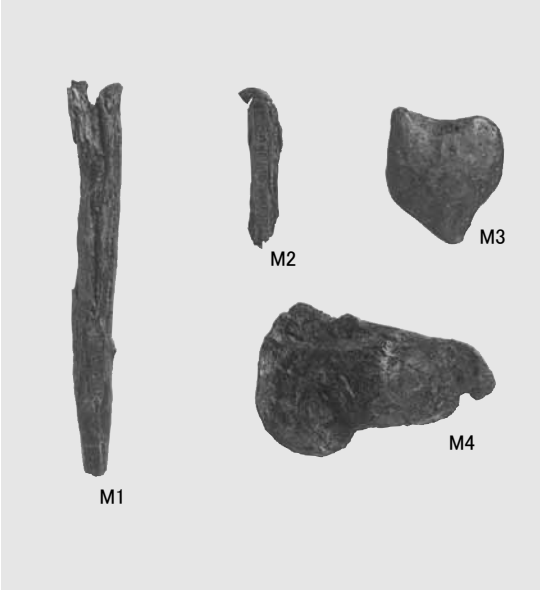


図 48 ２号墳鉄器写真

(14) ～ (17) は墓道から出土している。(14) は小形の提瓶でミニチュアであろうか。焼成は甘く、明褐～褐と須恵器とは異なった色調を示している。僅かに長石などの砂粒含むが、胎土は緻密である。片面はロクロナデで片面はロクロケズリである。ロクロナデの丸みのない面は表面の損傷が激しい。口縁部を欠いているが体部は完存している。磨滅著しいがカキメと思われる痕跡が認められる。(15) は外反する須恵器甕口縁部である。端部は内外に肥厚しており、ロクロナデである。灰白～オリーブ灰外面の方が暗い色調になっている。(16) (17) は土師器甕口縁部である。(16) は頸部が余り明瞭でないくの字で端

部は丸い。丁寧な仕上げで口縁部内面は細かい横方向のハケ整形で全体にヨコナデで仕上げる。器壁も薄く仕上げられている。内面はにぶい黄橙、外面は橙で細砂を含む。 (17) もくの字であるが、頸部内面の稜線は明瞭で厚くなっている。口縁部は内湾ぎみで端部は尖っている。内面はハケ整形で、外面はナデである。ヨコナデで仕上げている。

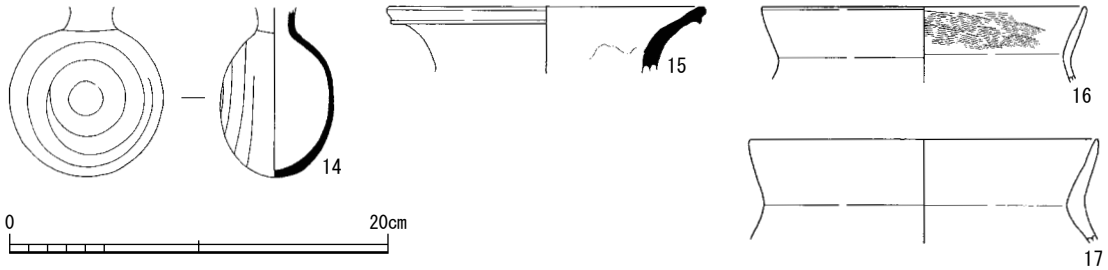


図 49　2 号墳墓道出土遺物実測図

表 4　2 号墳墓道出土遺物観察表

No.	種　別	器種	法量 (cm)			技法　他	形態の特徴	備考
			口径	器高	底径			
14	須恵器	提瓶		(9.00)		ロクロケズリ、ロクロナデ	内湾し頸部立つ	ミニチュア
15	須恵器	甕	(16.80)	(3.50)		ロクロナデ	外反し端部肥厚	
16	土師器	甕	(17.00)	(4.00)		ロクロナデ、内面ハケ整形	緩いくの字、端部丸い	
17	土師器	甕	(18.40)	(5.50)		ロクロナデ、内面ハケ整形	内傾の体部に外傾口縁部	

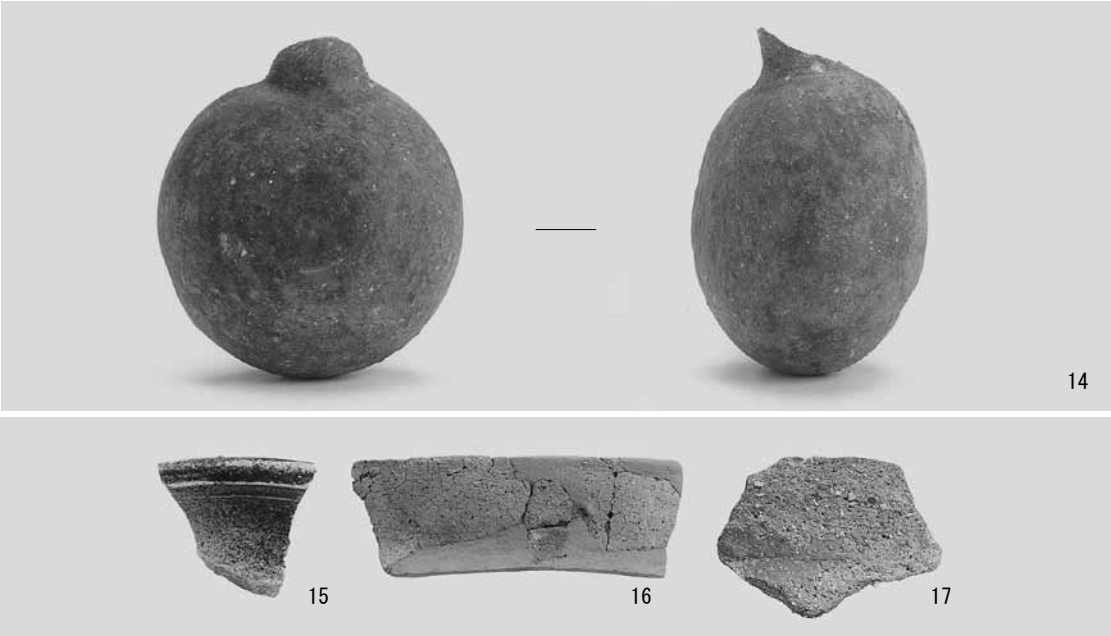


図 50　2 号墳墓道出土遺物写真

(18) ～ (22) は周溝埋土から出土している。古墳とは関係なく旧流路によって周溝が埋没した時期の遺物である。すべて中世の所産で埋没時のものである。天王山窯跡群から流れてきた遺物であろう。(22) だけが平瓦で他は須恵器椀である。(18) ～ (21) は須恵器椀である。(18) (19) は口縁部でロクロナデによって凹凸のある器表となり外傾している。端部は厚みがあるが丸くなっている。灰白～灰を呈し胎土は良好である。(20)(21) は椀底部で糸切り底である。底部の稜線は甘く不明瞭で、底部の器壁は薄い。灰～灰白と淡い色調でロクロナデである。(22) は平瓦の破片である。凹面は布目痕が残り、凸面は縄目のタタキである。灰白をしており、胎土は良好である。布目は５～６本／cmと細かく、縄目も細かく凹凸がはっきりしている。

石室内からは玉と鉄器も出土している。

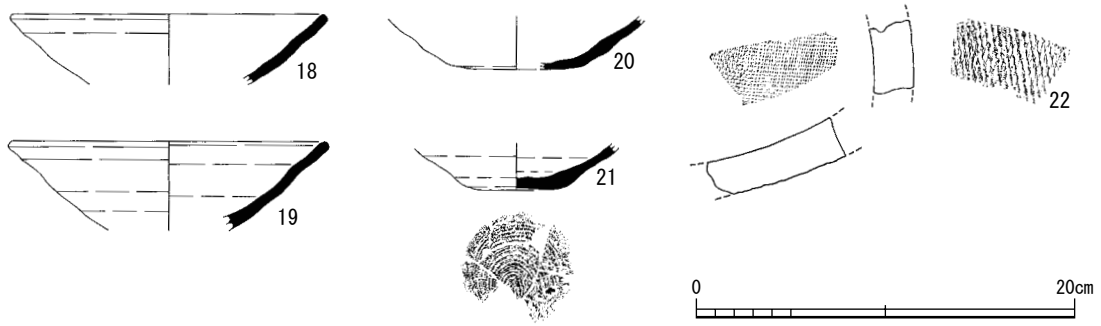


図 51　2 号墳周溝出土遺物実測図

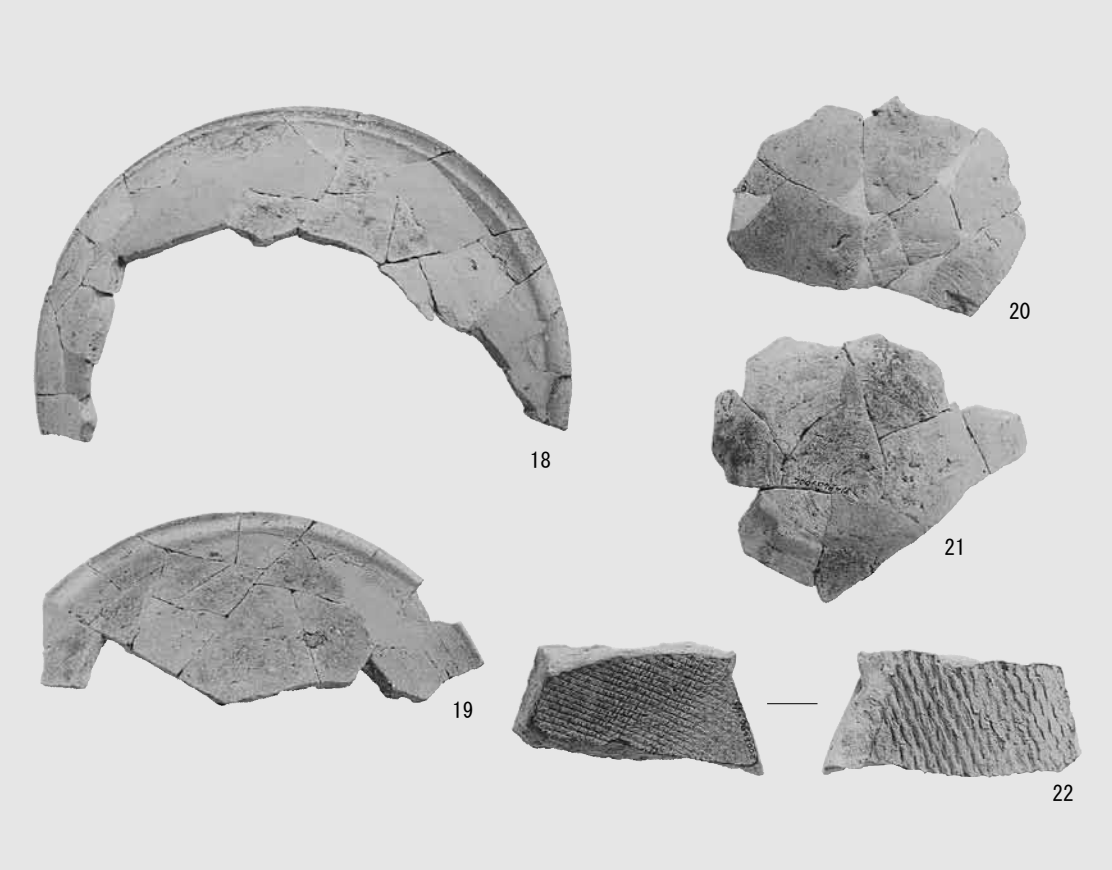


図 52　2 号墳周溝出土遺物写真

表５　２号墳周溝出土遺物観察表

No.	種　別	器種	法量（cm）			技法　他	形態の特徴	備考
			口径	器高	底径			
18	須恵器	椀	(16.40)	(3.70)		ロクロナデ	外傾し端部丸い	
19	須恵器	椀	(16.60)	(4.70)		ロクロナデ	外傾し端部丸い	
20	須恵器	椀		(2.80)	(6.00)	ロクロナデ、糸切り	不安定な平底から内湾	
21	須恵器	椀		(2.50)	(5.40)	ロクロナデ、糸切り	不安定な平底から内湾	
22	瓦	平瓦	(7.50)	(5.20)		布目、斜格子タタキ	内湾	

（　）は復原径・残存高

３．３号墳出土遺物

３点図化しているが、２点は後世の遺物である。(23) は須恵器平瓶で口縁部と体部の接点はなく図上復元した。丸底から扁平な体部になり、肩部も丸い。ロクロケズリで肩部周辺はカキメを施している。内面は底面がユビ成形で体部はロクロナデである。口縁部はロクロナデで屈曲しつつ外傾している。灰～灰白をしている。体部外面に焼成時の有機質（自然釉？）が付着しており、口縁部内面には自然釉が付着している。

(24) は須恵器壺で糸切りされた平底で肩の張る長胴の体部となる。口縁部は短く外傾し端部は尖りぎみである。体部での接点はないが図上復元したものである。全体にロクロナデで仕上げている。玄室出土と壺でほぼ完形に近いことから、再利用時の遺物と考えられる。東播磨の製品と思われる。(25) は須恵器椀で墓道上面で出土している。再利用時の遺物が移動した可能性もあるが明らかではない。糸切り底で僅かな段を有するベタ高台になっている。内湾する体部から端部は丸く納めている。灰白を呈しロクロナデである。東播磨産の須恵器で 12 世紀後半であろうか。隣接する天王山窯跡など周辺で焼かれた可能性も十分に考えられるが、今のところ出土遺物はない。

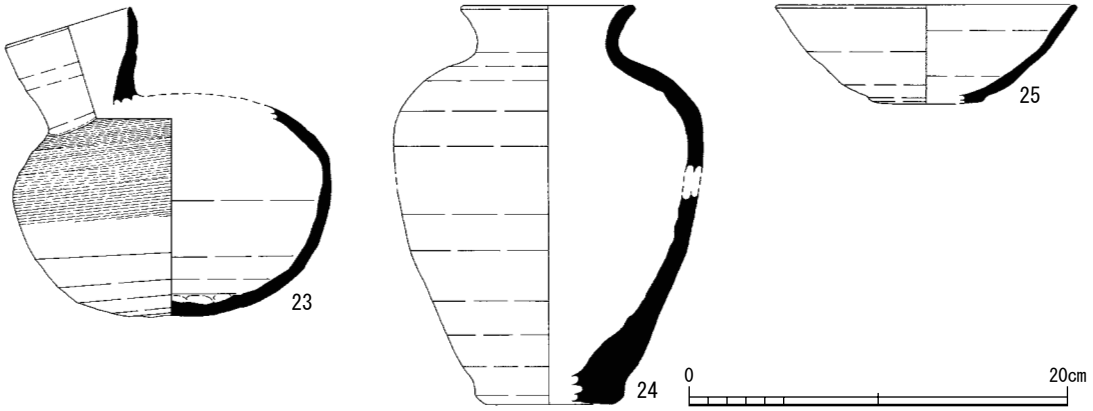


図 53　３号墳出土遺物実測図

表６　　３号墳出土遺物観察表

No.	種　別	器種	法量（cm）			技法　他	形態の特徴	備考
			口径	器高	底径			
23	須恵器	平瓶	6.80	16.40	6.00	ロクロナデ、ケズリ、ナデ	扁平な体部から外傾する	カキメ
24	須恵器	壺	(9.00)	(21.20)	(6.60)	ロクロナデ、糸切り	平底から内湾し口縁外反	
25	須恵器	椀	(15.60)	5.30	(5.80)	ロクロナデ、糸切り	平底から内湾し端部丸い	

図 54　3 号墳出土遺物写真

４．４号墳出土遺物

石室基底部は残存していたものの、床面まで手が加えられており、遺物は余り出土していない。墓道から出土した大型提瓶が注目される。9点図化しているが、古墳主体部のものは5点である。多くの土器が玄室と玄室から離れた位置の破片が接合しており、再利用時やそれ以降に大きく床面が撹乱されたことが理解される。(26) は須恵器杯蓋である。天井部は平たく内湾する体部である。口縁部は欠失して

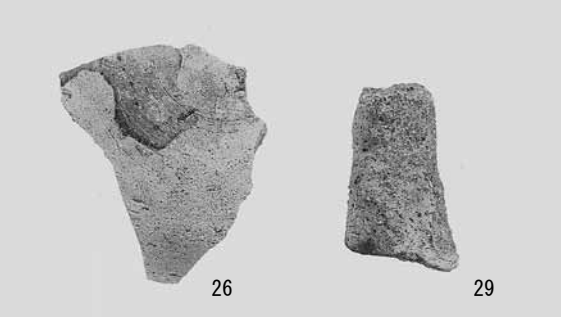


図 55　4号墳出土遺物写真

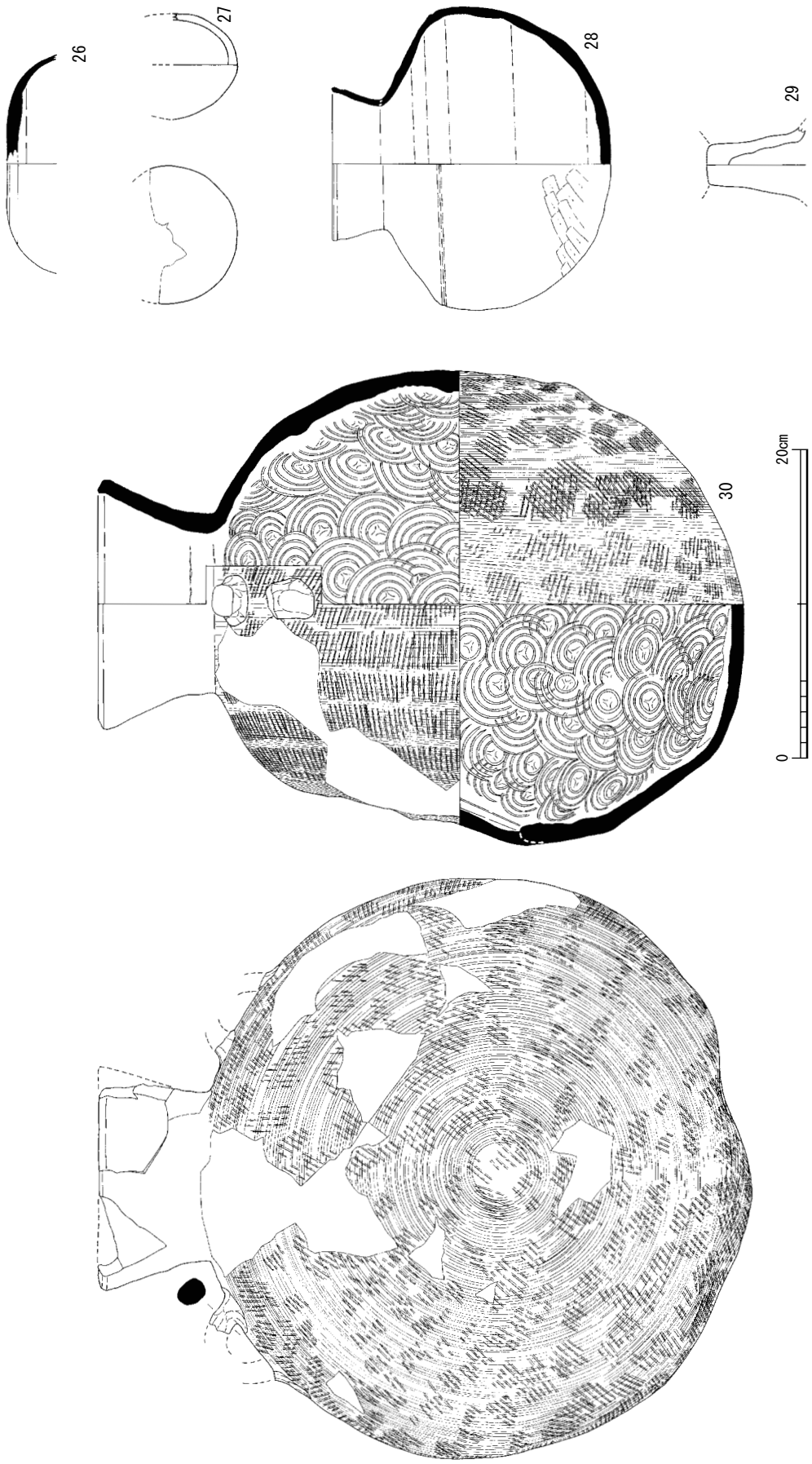


図 56　4 号墳出土遺物実測図

表７　４号墳出土遺物観察表

No.	種　別	器種	法量（cm）			技法　他	形態の特徴	備考
			口径	器高	底径			
26	須恵器	杯蓋		(3.20)		ロクロナデ、ロクロケズリ	天井部平たく 内湾する	
27	須恵器	提瓶		(6.70)		ロクロナデ	内湾する	ミニチュア
28	須恵器	壺	9.80	17.60		ロクロナデ、ケズリ、ナデ	肩張り口縁部 外傾する	
29	土師器	高杯		(6.40)		ユビ成形、ナデ	緩やかに開く	2次焼成
30	須恵器	提瓶	14.80	42.00		ロクロナデ、タタキ、カキメ	内湾する体部 から外反	大型

（　）は復原径・残存高

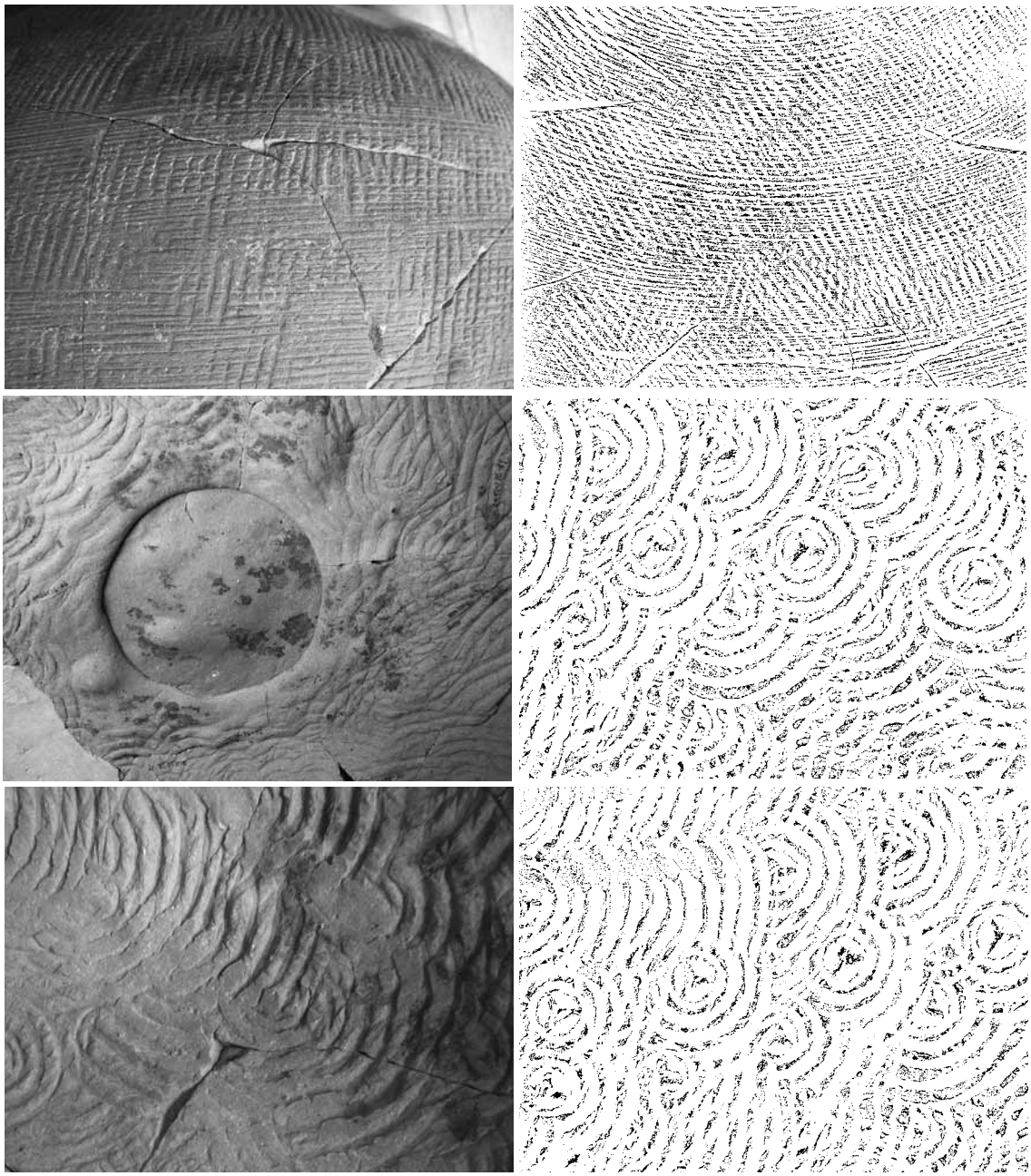


図 57　４号墳大形提瓶内外面の製作技法

いる。内面はにぶい黄橙～灰黄褐で外面は灰白である。色調が示すように焼成はやや甘い。ロクロナデで天井部はロクロケズリである。(27) はミニチュアであろう。2 号墳墓道出土の (13) に似ていることから提瓶とした。保存状態は悪く磨滅している。扁平な球形となりナデ仕上げで、灰白をしている。羨道からの出土である。(28) は須恵器壺で羨道から出土している。丸底で外傾する短めの口縁部が付く。球

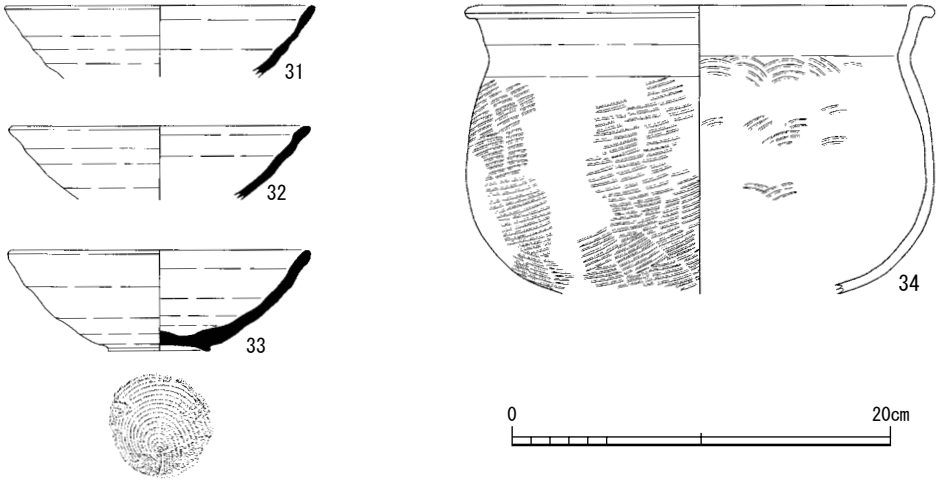


図 58　4 号墳再利用時の遺物実測図

図 59　4 号墳再利用時の遺物写真

形の体部であるが肩が張り、1条の沈線が施される。ロクロナデで仕上げるが、底外面はケズリからナデで仕上げる。灰白～褐灰をしており、肩部には自然釉が付着している。体部下半には焼成時の杯痕跡が2ヶ所見られる。(29) は土師器高杯脚部である。石室東側で玄室から羨道にかけての部分から出土している。杯部は全く残存していない。ソケット状に組み合うタイプである。外傾し屈曲して裾広がりとなると思われるが変化点で割れている。形態から横穴式石室の時期より遡る可能性が高い。にぶい橙～にぶい黄橙を呈し、細砂を含む。(30) は大型の須恵器提瓶である。開口部下から墓道にかけてから主に出土しているが、一部羨道部や羨道東側でも出土している。器高42㎝と非常に大型でミニチュアとともに出土していることが興味深い。技法は通常の提瓶と同じで内面は同心円のタタキであり、外面は平行タタキから片面のみカキメを施している。ただ、余り平坦でなく球形に近くなっている。口縁部は外傾し端部は内側に肥厚し角張っている。肩部両側に輪状の把手（断面楕円形）が縦に付加されているが、端部しか残っていない。灰白～灰で焼成は良い。

4号墳再利用時の遺物

それ以外に再利用時と思われる遺物を4点図化している。(31) ～ (33) は須恵器椀である。色調は灰白で胎土は緻密である。(31) は内湾し端部は丸く肥厚ぎみである。ロクロナデで、その凹凸が器表に現れている。(32) も似ているが、より器表の凹凸が激しい。外傾ぎみで端部は丸い。(33) は復原完形の椀で底部は糸切りである。ベタ高台で底面は凹んでいる。ロクロナデで内湾し端部は丸い。(34) は土師器鍋である。重心の低い内湾する体部から底部に至るが底部は残存していない。頸部は大きくならず、甘い稜線から外傾する。端部は外側に水平に引っ張っている。体部内面は同心円文が残りナデ仕上げしている。外面は平行タタキが見られる。口縁部はヨコナデであり、橙をしている。

表8　4号墳再利用時出土遺物観察表

No.	種　別	器種	法量（㎝）			技法　他	形態の特徴	備考
			口径	器高	底径			
31	須恵器	椀	(16.20)	(3.00)		ロクロナデ	内湾し端部丸い	
32	須恵器	椀	(15.60)	(3.90)		ロクロナデ	内湾し端部 反りぎみに丸い	
33	須恵器	椀	(15.40)	5.30	(5.40)	ロクロナデ、糸切り	内湾し端部丸い、 平底	
34	土師器	鍋	(23.20)	(15.30)		ヨコナデ、タタキ	下膨れに内湾し 口縁部外傾	

5．5号墳出土遺物

土器は (35) 1点だけ図化しているが、原位置は移動している。須恵器長頸壺で外傾する頸部である。残存部下端から水平に広がり肩部になるもので体部との接合痕跡が残る。ロクロナデで灰白をしている。

金属器は石室内から出土しており、大きくは原位置から動いていないと思われる。耳環と鉄鏃が1点ずつで、耳環は最大径2.5㎝で銅芯の金張りである。部分的に剥落しており、断面は正円ではない。鉄鏃の切先は残っておらず、残存長9.6㎝を測る茎部分の破片である。

5号墳周溝上面出土遺物

SR01から流れてきた中世の須恵器である。4点図化している。すべて椀である。(36) は口径16.5㎝、

器高 5.5 ㎝で平底から内湾する体部で端部は丸く肥厚している。底面は糸切りで底部と体部の境界は甘い。灰白～灰で焼成はやや不良である。(37) は内湾する口縁部で端部は丸く肥厚し、反りぎみである。ロクロナデで黄灰～灰で砂粒含んでいる。(38) は平底から内湾する体部で端部は肥厚している。口径 17.8 ㎝、器高 6.0 ㎝に復原される。(39) は糸切りの平底である。灰白で砂粒含む。

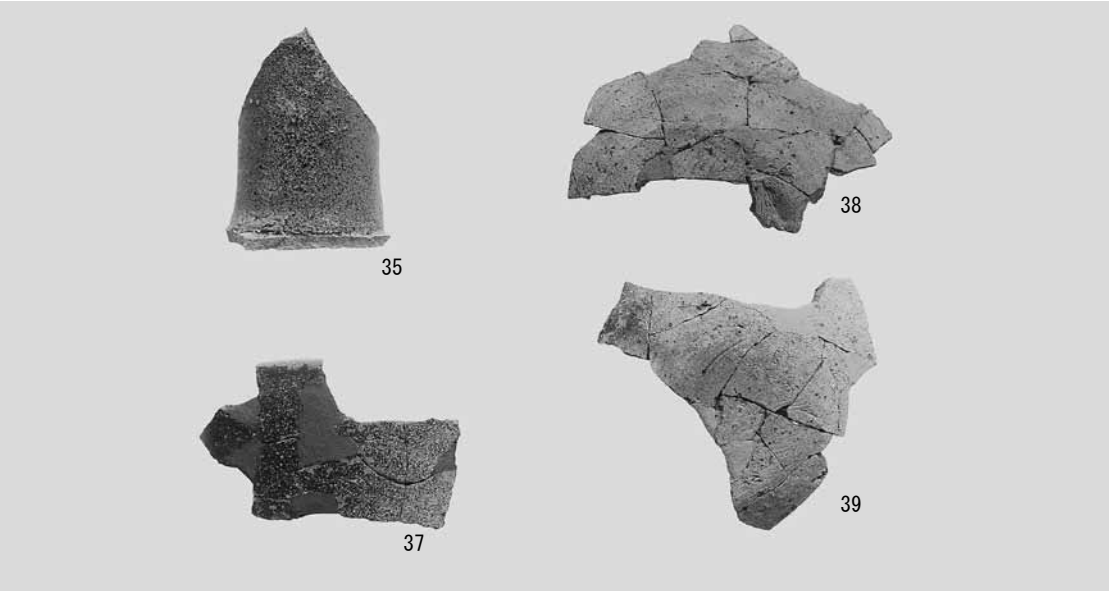


図 60　5 号墳出土遺物写真

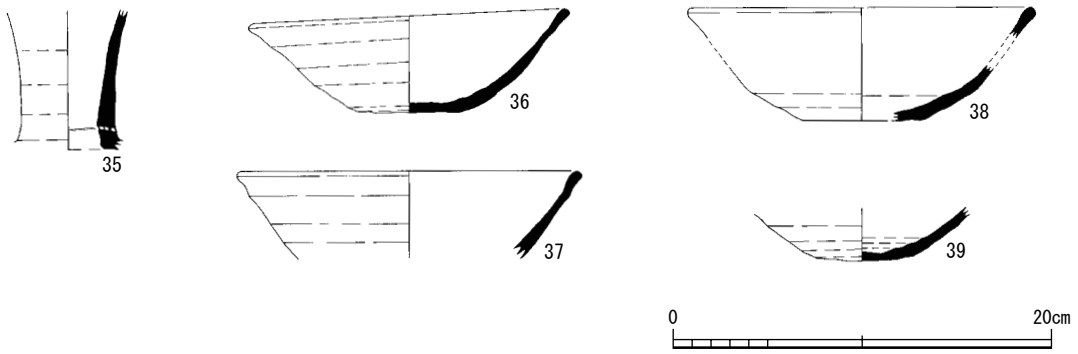


図 61　5 号墳出土遺物実測図

表 9　5 号墳出土遺物観察表

No.	種　別	器種	法量 (cm)			技法　他	形態の特徴	備考
			口径	器高	底径			
35	須恵器	壺		(7.30)		ロクロナデ	外反する	
36	須恵器	椀	16.50	5.50	5.40	ロクロナデ、糸切り	不安定な平底から内湾	
37	須恵器	椀	(17.80)	(4.60)		ロクロナデ	外傾し端部肥厚ぎみに丸い	
38	須恵器	椀	(17.80)	(6.00)	(6.30)	ロクロナデ、糸切り	不安定な平底から内湾	
39	須恵器	椀		(2.80)	5.20	ロクロナデ	不安定な平底から内湾	

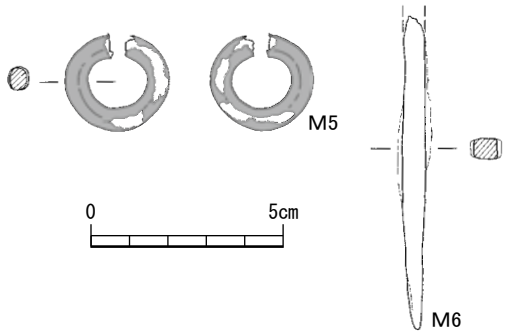


図 62　5 号墳出土金属器実測図

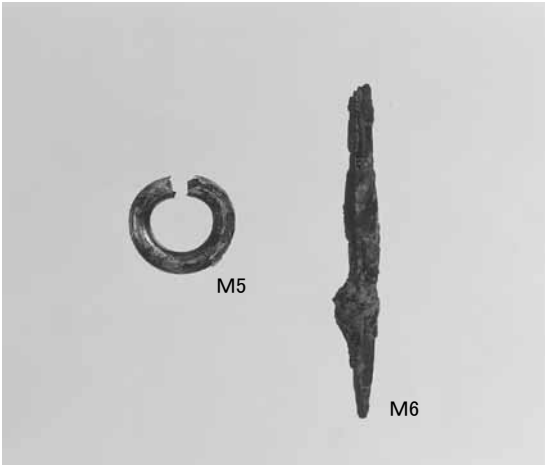


図 63　5 号墳出土金属器写真

6．包含層出土遺物

(40) ～ (45) の 6 点は古墳時代の遺物ですべて須恵器である。(46) ～ (52) の 7 点は後世の遺物である。(40) は杯身の口縁部で、受部・口縁部ともに端部を欠いている。僅かに内湾している。復原径 12.4 ㎝前後になる。内面浅黄、外面灰を呈し、砂粒含んでいる。外面に重ね焼きの別個体の破片が付着している。(41) は提瓶の破片である。内湾する肩部から短く屈曲して直立する口縁部になる。端部は残存していない。ロクロナデで灰～灰白である。(42) は壺体部で 2 条の沈線があり、その間に大きなヘラ先刺突文があり、上にやや小さめの刺突文が施される。沈線間の刺突文は右上がりで、上の刺突文は僅かに左上がりである。内湾する体部であるが、肩が張っている。(43) も壺体部で口縁部を欠いている。肩が張り水平気味

表 10　包含層出土遺物観察表（古墳時代）

No.	種　別	器種	法量 (cm)			技法　他	形態の特徴	備考
			口径	器高	底径			
40	須恵器	杯身		(2.10)		ロクロナデ	内湾し受部短く 端部内傾	重ね焼き
41	須恵器	提瓶		(5.30)		ロクロナデ	内湾する体部から 外傾	
42	須恵器	壺		(5.40)		ロクロナデ、ヘラ先刺突文	肩張り内湾	
43	須恵器	壺		(3.50)		ロクロナデ、ヘラ先刺突文	肩張り扁平で内湾	自然釉
44	須恵器	壺		(5.10)		ロクロナデ、刺突文沈線	内湾する	
45	須恵器	脚台部		(5.60)	(8.00)	ロクロナデ、カキメ	内湾し高台開き 端部肥厚	

（　）は復原径・残存高

になっている。肩部には自然釉がかかっており、2条の沈線があり、その間に列点文が施されている。内面はにぶい黄橙で外面は灰白～灰オリーブである。(44) も壺体部で内湾している。2条の沈線間に幅広の刺突文が右上がりで施文される。(45) は壺脚台で、内湾する体部に外傾する高台部が付く。端部は角張り肥厚している。外面にはカキメが施される。

(46) ～ (49) は須恵器椀である。(46) ～ (48) は屈曲しながら外傾する口縁部で端部は丸く納める。ロクロナデで灰～灰白である。(47) だけが内湾ぎみである。(49) は糸切りの平底を有する底部で体部は内湾

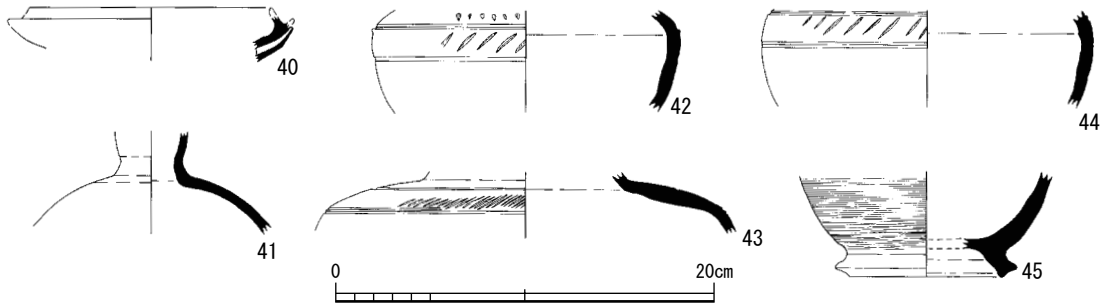


図 64　包含層出土遺物実測図（古墳時代）

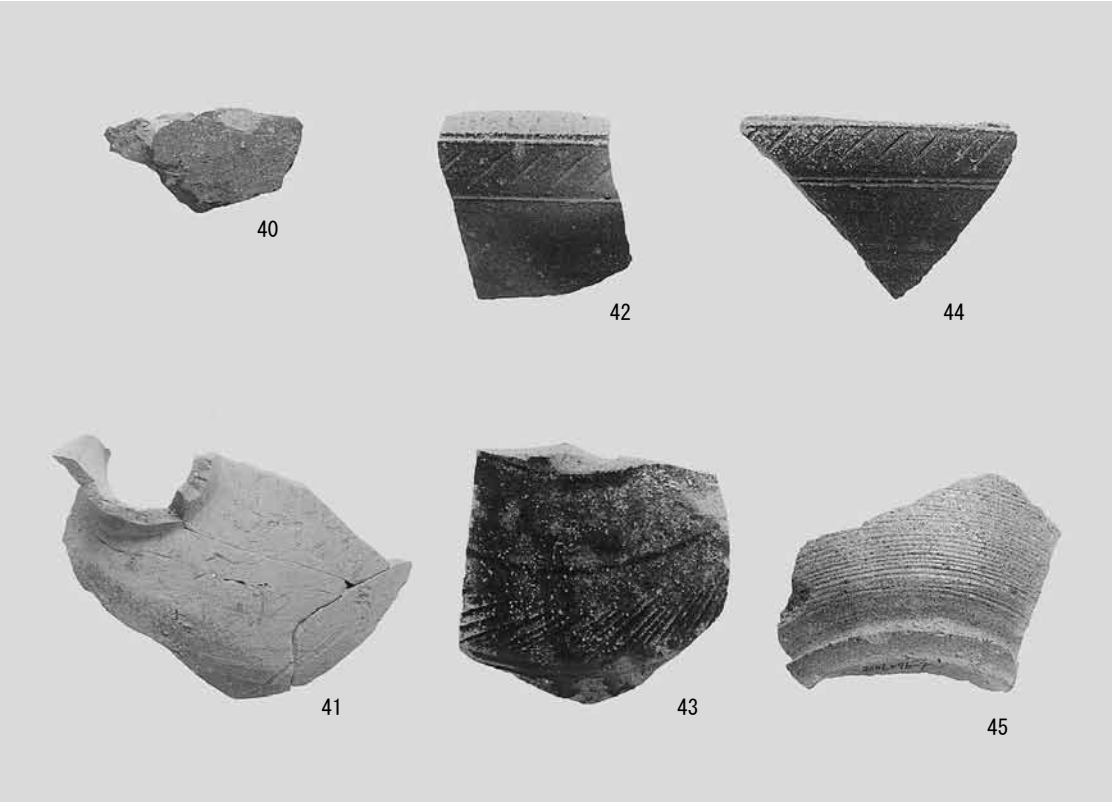


図 65　包含層出土遺物写真（古墳時代）

する。(50) は丹波焼鉢底部で、平底から短く外傾し直立ぎみに外反している。外反しかける部分に 4 条の沈線を施す。外面は黒褐、内面はオリーブ黒である。(51) は須恵器皿で口径 18.8 ㎝、器高 2.4 ㎝を測る。平底から内湾ぎみに外傾し端部は丸い。器壁は厚めで灰～灰白を呈する。ロクロナデで唯一古代の遺物である。(52) は平瓦で端面は 2 面取りをしている。

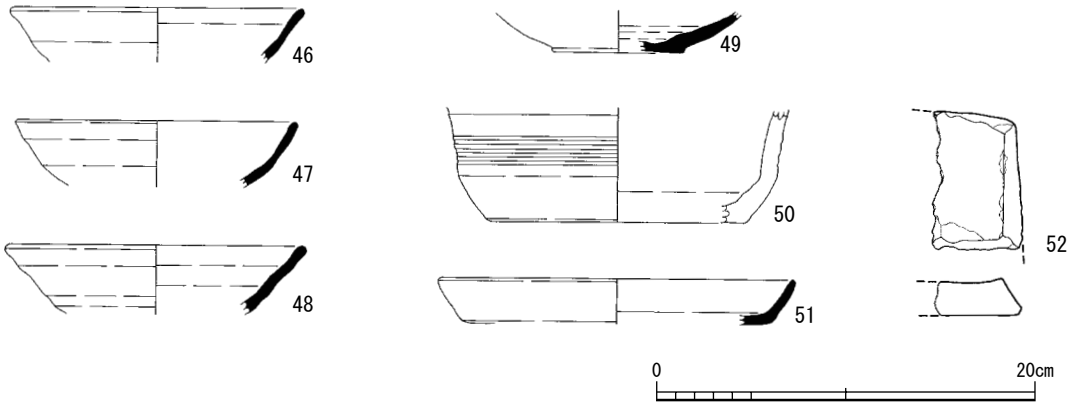


図 66　包含層出土遺物実測図（古墳時代以外）

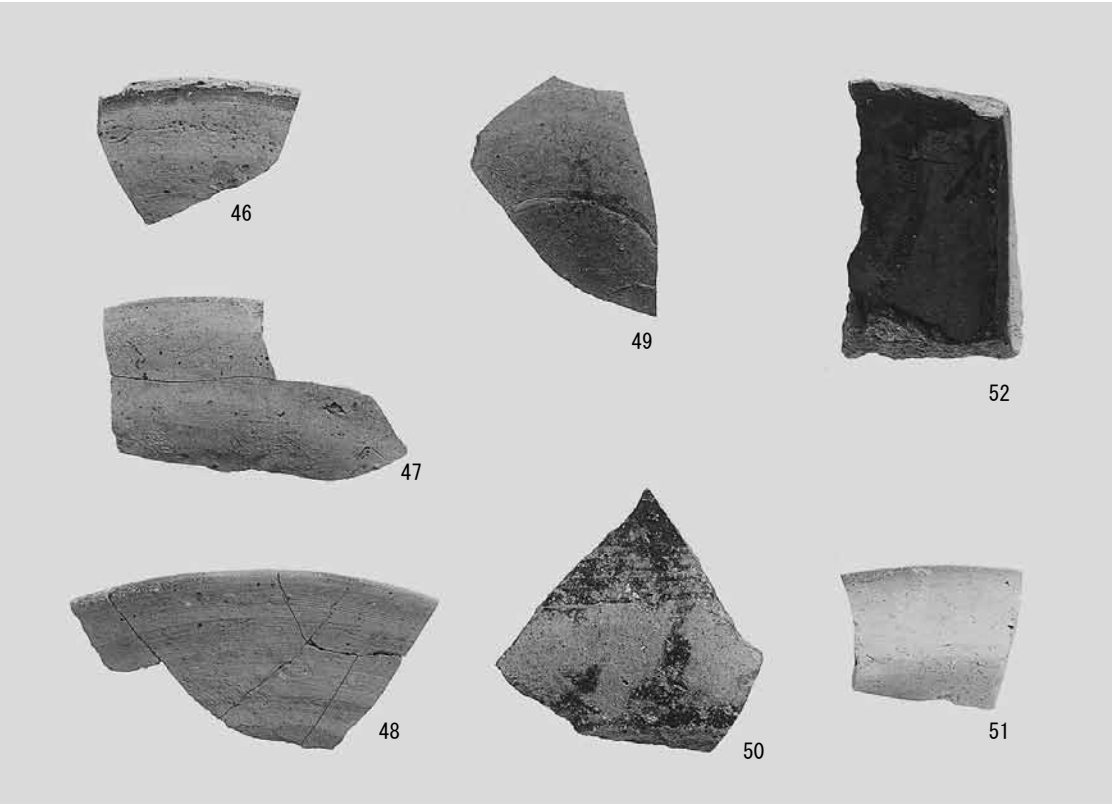


図 67　包含層出土遺物写真（古墳時代以外）

表 11　包含層出土遺物観察表（古墳時代以外）

No.	種　別	器種	法量（cm）			技法　他	形態の特徴	備考
			口径	器高	底径			
46	須恵器	椀	(15.10)	(2.90)		ロクロナデ	外傾し端部反り丸い	
47	須恵器	椀	(14.80)	(3.50)		ロクロナデ	内湾し端部丸い	
48	須恵器	椀	(15.60)	(3.60)		ロクロナデ	外傾し端部丸い	自然釉
49	須恵器	椀		(2.20)	(6.90)	ロクロナデ、糸切り	平底から内湾	
50	無釉陶器	鉢		(6.00)	(13.40)	ロクロナデ、ナデ、沈線	平底から屈曲して内湾	丹波焼
51	土師器	皿	(18.80)	(2.40)		ロクロナデ	平底から外傾し端部丸い	
52	瓦	平瓦	(7.30)	(4.80)		布目	内湾し端面面取り	

包含層から 2 点石器が出土している。ともにサヌカイトで磨滅している。S 3 は 2 次加工のある剥片である。S 4 は小形であるがスクレーパーの可能性がある。

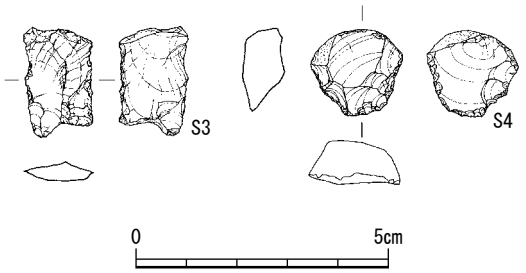


図 68　石器実測図

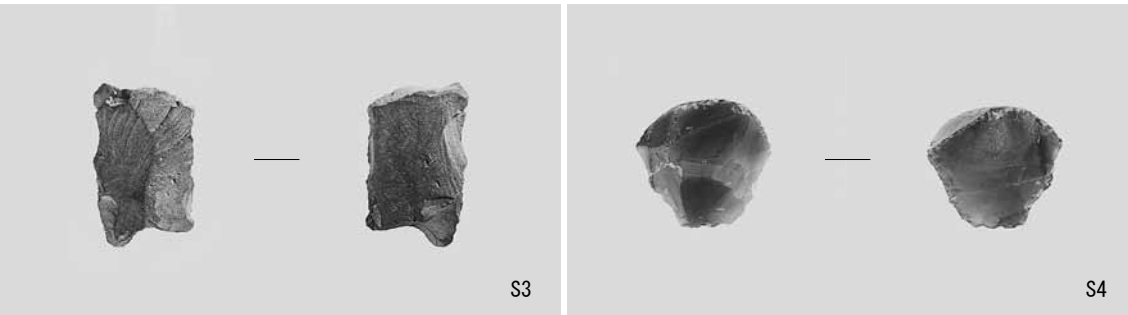


図 69　石器写真

Ⅴ　天王山窯跡群の調査

１．概要

調査対象地は段丘を開析し北に開口する谷とその支谷である。この付近の字名は「カマ谷」と称し窯跡群の存在が想定されることから、窯跡の存在を想定し、斜面にあたる水田にトレンチを設定して確認調査を行った。窯の存在を想定しえたのは２地点のみである。調査対象地周辺は近代に入って開墾が行われ、さらに近年ほ場整備が行われたことにより地形改変が著しい。

２．天王山１号窯の調査

本発掘調査は斜面の水田１筆を対象に行った。この水田は谷の斜面を切り盛りすることにより造成されたもので、下方は厚い盛土がなされる反面、上方は表土直下で地山が検出されるほど削平され、旧地形を大きく改変した結果によるものである。

確認調査時に調査区北半部の耕土直下で窯体片や焼土などが混じる層を検出している。その範囲は幅4.5 m、長さ５m程度、高さ１mの高まりとなり、両側に溝状の落ち込みがみられたため、崩落した窯体を想定した（ＳＸ０１）。しかし、周囲の掘削を進めていくと、これらを包含するのが、客土あるいは堆積土の中であることが明らかとなり、地山面に赤化などの変色も認められなかった。以上からこの地点は窯跡ではないと判断した。出土遺物の接合関係から、後述する１号窯の窯体の一部が削平され、運ばれて集積したものであろうと推定される。

窯の構造と立地

ＳＸ０１とは別に調査区南半部の西側斜面で新たに窯体を、谷部では灰原を検出した。

窯体

窯跡は、段丘から北向きに開口した谷の西側斜面基部に構築される。焼成部上端が削平により消滅し、焚口部の一部はトレンチの掘削により損なわれ、残存状態は不良である。焼成部南壁の一部をが残存するのみで、他は火熱による変色により窯体の範囲を辛うじて推定できる。

窯体は標高 24.4 m～ 25.9 mに位置する。周囲を浅く掘り込み、発生土を地上に盛って窯を構築した地上式である。

窯体の主軸方向は N-115.5° W を示し、傾斜角度は焼成部で 21.5°、燃焼部で 14.5° を測る。規模は現存長 3.75 m、幅は焼成部で 1.1 m、焚口部は幅を狭めて 0.6 mとなる。床面は舟底状を呈し中央付近が窪む。窯壁の残存高は４㎝程度である。

焼成部床面直上から須恵器椀などの遺物が出土しているが、いずれも破片である。

床面除去後、炭化材などが詰まった径５～ 15 ㎝、深さ３～ 16 ㎝の小穴を９基検出した。小穴はほぼ窯体の中軸に沿って分布する。検出位置から天井部を支えた仮支柱と推定されるが、穴は上面では検出しえず、その構築法については明らかにできていない。

窯体の南北は周溝状に大きく掘削され、南側は窯壁片などが混じる土によって埋没していた。北側はやや幅が広く、本来は盛土などにより平坦地を設けていたのかもしれない。ここでは幅 0.4 mの溝を検出した。

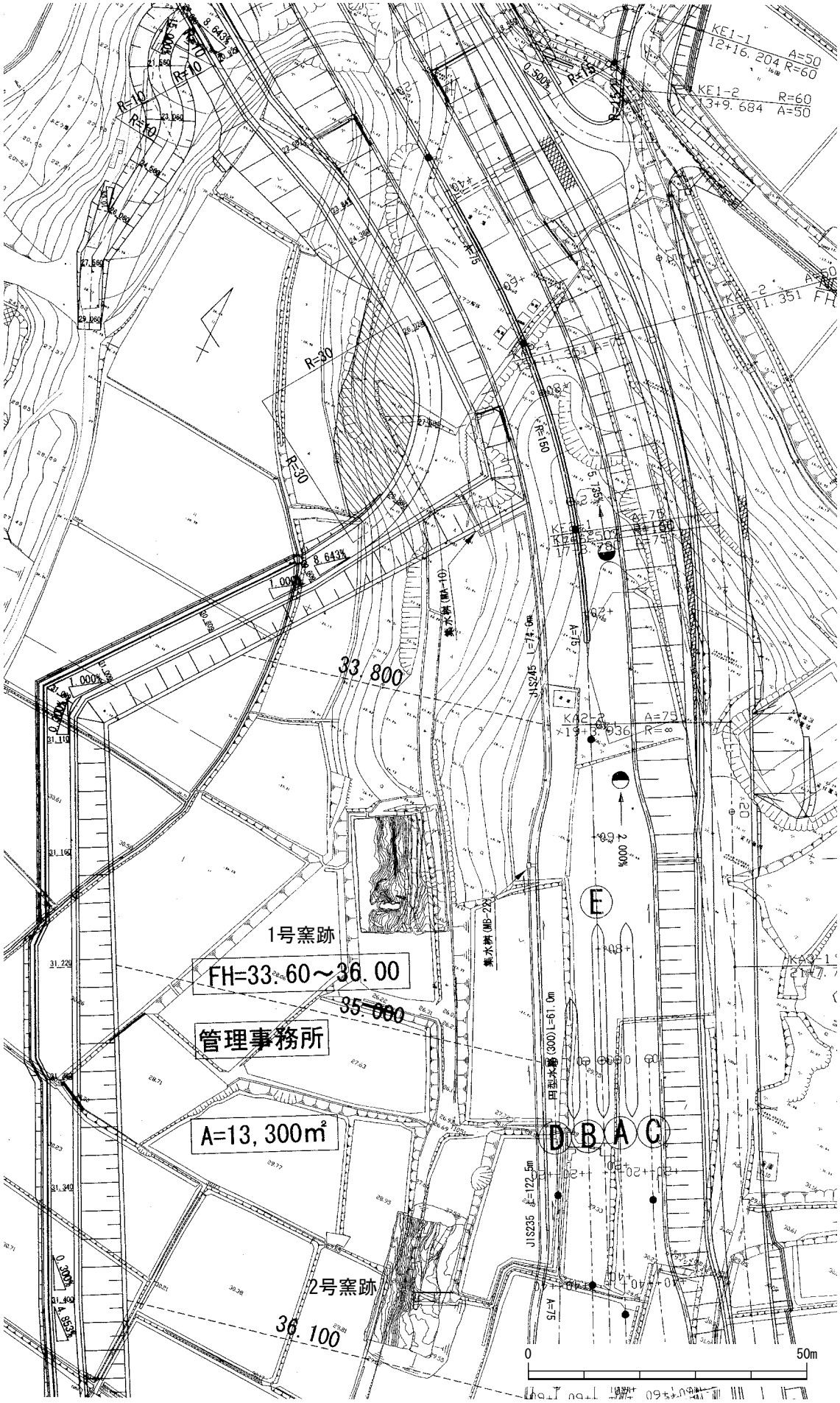


図 70　天王山窯跡群全体図

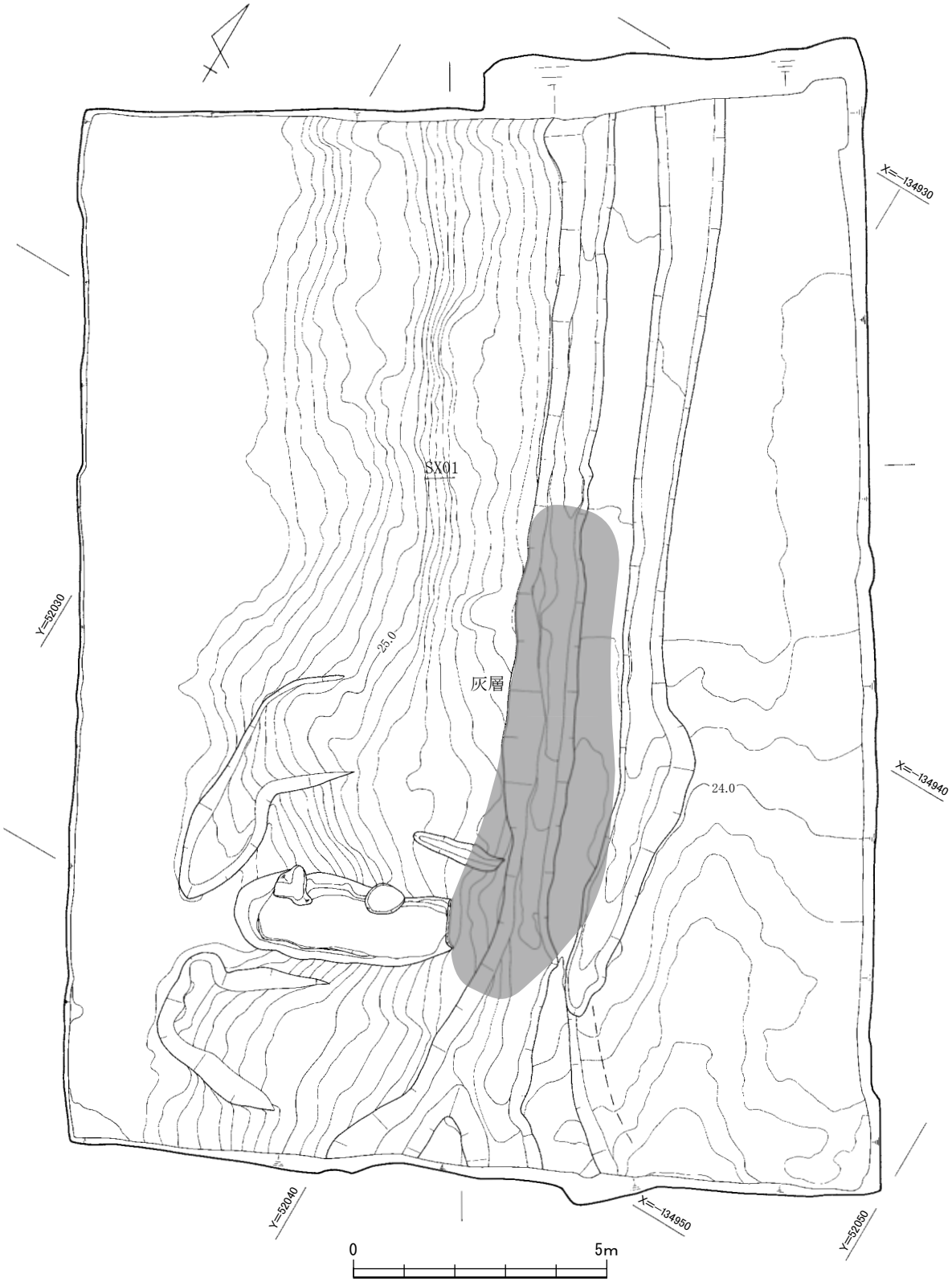
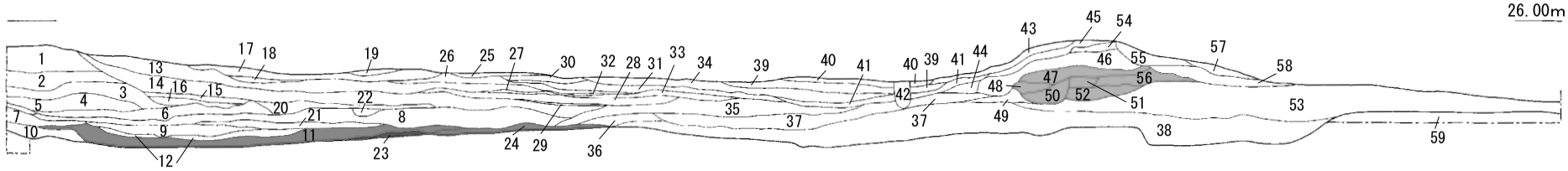
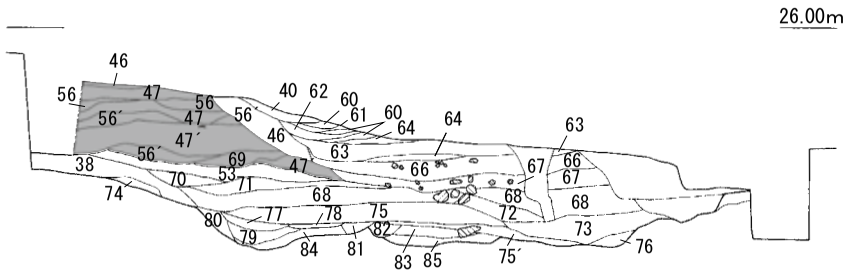


図 71　天王山 1 号窯跡調査区全体図





窯体

灰原

窯体片等を含む堆積（SX01）

0　4m

1. 7.5Y 6/1　灰 細砂
2. 2.5GY 6/1　オリーブ灰 細砂
3. 2.5GY 6/1　オリーブ灰 細砂
4. 2.5GY 6/1　オリーブ灰 細砂
5. 10GY 7/1　明緑灰 細砂 礫多数含む
6. 10GY 7/1　明緑灰 細砂 礫多数含む
7. 7.5Y 6/1　灰 細砂 礫多数含む
8. 7.5Y 6/1　灰 細砂 礫多数含む
9. 7.5Y 6/1　灰 細砂 礫多数含む
10. 2.5Y 5/1　橙灰 細砂
11. 2.5Y 5/1　橙灰 窯細片多少混じる（灰原）
12. 5Y 5/1　黄灰 細砂
13. 2.5Y 7/3　浅黄 シルト質細砂
14. 2.5Y 7/2　灰黄 シルト質細砂
15. 2.5Y 7/2　灰黄 シルト質細砂
16. 5Y 6/1　灰 細砂
17. 10YR 6/1　褐灰 シルト質細砂
18. 2.5Y 6/2　灰黄 細砂
19. 7.5Y 6/1　灰 細砂
20. 2.5Y 6/2　灰黄 シルト質細砂
21. 10Y 7/1　灰白 粘土
22. 2.5Y 6/1　黄白 粘土 φ3cm程度の礫含む
23. 2.5Y 2/1　赤黒 シルト質極細砂（窯の床面）
24. 2.5Y 5/1　橙灰 細砂（窯体片含む）
25. 2.5Y 6/4　にぶい黄 細砂
26. 2.5Y 6/1　黄灰 極細砂
27. 2.5Y 7/3　浅黄 細砂
28. 2.5Y 5/2　暗灰黄 粘土
29. 2.5Y 5/2　暗灰黄 細砂
30. 2.5Y 7/3　浅黄 細砂
31. 10YR 6/3　にぶい黄橙 極細砂
32. 2.5Y 6/1　黄灰 細砂
33. 7.5YR 6/1　灰褐 極細砂
34. 2.5Y 7/3　浅黄 細砂
35. 2.5Y 5/3　黄褐 粘土 φ2cm程度の礫含む
36. 2.5Y 5/3　黄褐 粘土
37. 2.5Y 6/3　にぶい黄 極細砂
38. 7.5Y 5/2　灰褐 細砂 φ5～10cmの礫含む
39. 10YR 6/3　にぶい黄橙 細砂
40. 10YR 6/1　褐灰 細砂
41. 10YR 6/1　褐灰 粘土（土壌化）
42. 撹乱
43. 7.5YR 6/1　褐灰 細砂
44. 10YR 6/6　明黄褐 細砂 φ1cm程度の細礫含む
45. 10YR 6/6　明黄褐 細砂
46. 10YR 6/6　明黄褐 細砂
47. 7.5YR 4/4　褐 細砂 窯壁片混じる
48. 10YR 5/6　黄褐 細砂 窯壁片混じる
49. 10YR 4/6　褐 細砂
50. 10YR 4/6　褐 細砂 窯壁片混じる
51. 7.5YR 6/4　褐 細砂 窯壁片混じる
52. 2.5Y 6/4　にぶい黄 極細砂
53. 10YR 5/6　黄褐 細砂 φ1cmの細礫含む
54. 10YR 6/6　明黄褐 極細砂
55. 2.5Y 6/6　にぶい黄 中砂
56. 2.5Y 6/3　にぶい黄 極細砂
57. 5Y 6/6　明黄褐 極細砂
58. 10YR 6/6　明黄褐 細砂
59. 10YR 6/3　にぶい黄橙 シルト質細砂 φ3cm程度の礫含む
60. 10YR 6/4　にぶい黄褐 シルト混じり細砂～粗砂
61. 10YR 6/3　にぶい黄褐 シルト質極細砂～粗砂 やや粘性をおびる（土壌化層）
62. 10YR 6/3　にぶい黄褐 シルト質極細砂～粗砂 やや粘性をおびる（土壌化層）
63. 10YR 6/8　明黄褐 シルト質極細砂～細砂 粘性やや強い φ5～8cm程度の礫を含む（土壌化層）
64. 10YR 6/6　にぶい黄褐 シルト混じり細砂～粗砂
65. 10YR 5/8　黄褐 シルト質極細砂～細砂 細砂･粗砂多く含む
66. 7.5YR 5/8　明褐 シルト質極細砂～細砂（遺物･窯体片混じる）
67. 10YR 6/6　明黄褐 シルト質極細砂 φ5～10cm程度の礫を含む
68. 10YR 5/8　黄褐 粘質土 φ10～15cm程度の礫を含む
69. 10YR 5/8　黄褐 シルト質極細砂～細砂
70. 10YR 4/6　褐 シルト混じり極細砂～粗砂 φ0.7～3.0cm程度の礫を含む
71. 10YR 6/6　明黄褐 シルト混じり極細砂～細砂
72. 10YR 6/8　明黄褐 シルト質極細砂 φ1～3cm程度の礫をわずかに含む
73. 10YR 5/6　黄褐 シルト混じり砂礫土 φ2～5cm程度の礫を多く含む
74. 10YR 4/6　褐 シルト質極細砂
75. 10YR 5/8　黄褐 シルト
76. 10YR 5/4　にぶい黄褐 シルト質極細砂
77. 10YR 4/3　にぶい黄褐 シルト混細砂 φ3～7cm程度の礫多く含む
78. 10YR 5/4　にぶい黄褐 シルト混細砂 φ1～5cm程度の礫多く含む
79. 10YR 3/4　暗褐 シルト混細砂 φ3～8cm程度の礫多く含む
80. 10YR 4/4　褐 極細砂～細砂
81. 10YR 5/4　にぶい黄褐 細砂 粗砂～中礫混じる
82. 10YR 4/3　にぶい黄褐 シルト質細砂 炭化物含む
83. 10YR 4/2　灰黄褐 シルト混細砂 φ1～5cm程度の礫多く含む 炭化物･土器片少量含む
84. 10YR 5/6　黄褐 シルト質細砂 φ1～3cm程度の礫多く含む
85. 10YR 5/3　にぶい黄褐 シルト φ1cm程度の礫多く含む

図 72　天王山 1 号窯跡土層断面図

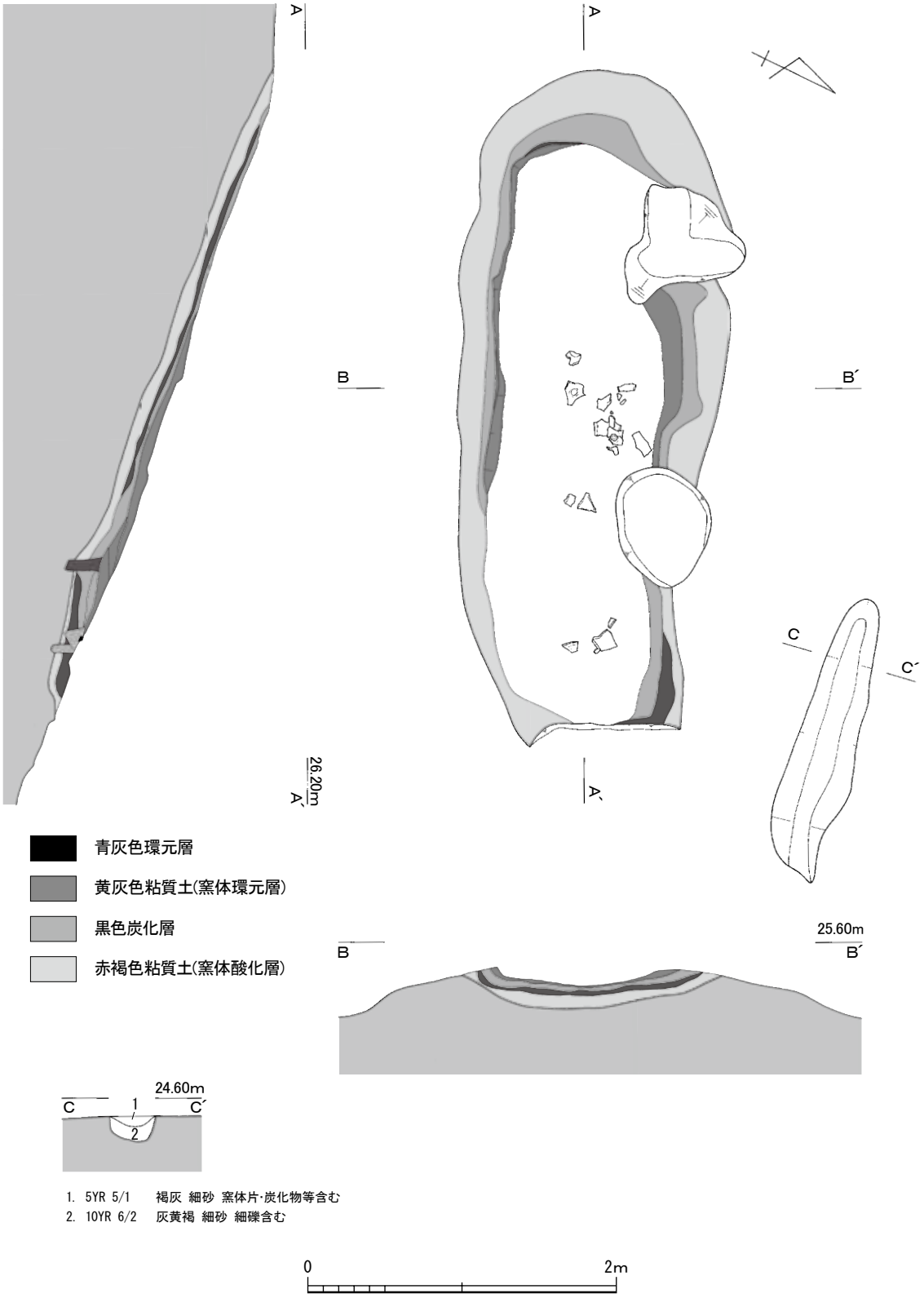

A
A
B
B´
C
C´
A´
26.20m
A´
青灰色環元層
黄灰色粘質土(窯体環元層)
黒色炭化層
赤褐色粘質土(窯体酸化層)
25.60m
B
B´
24.60m
C
C´
1
2
1. 5YR 5/1　褐灰 細砂 窯体片･炭化物等含む
2. 10YR 6/2　灰黄褐 細砂 細礫含む
0
2m

図 73　天王山 1 号窯跡

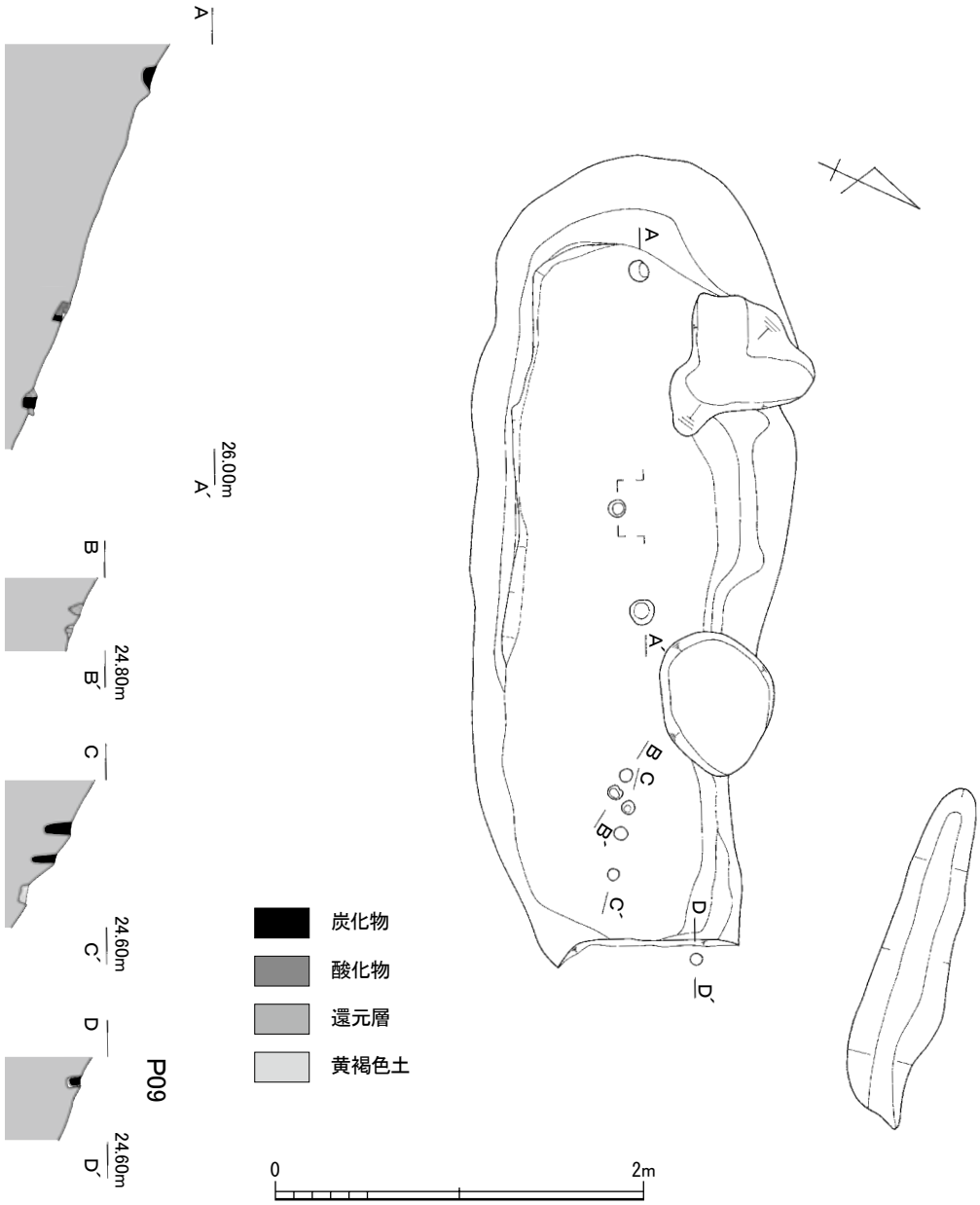


図 74　天王山 1 号窯跡

灰原

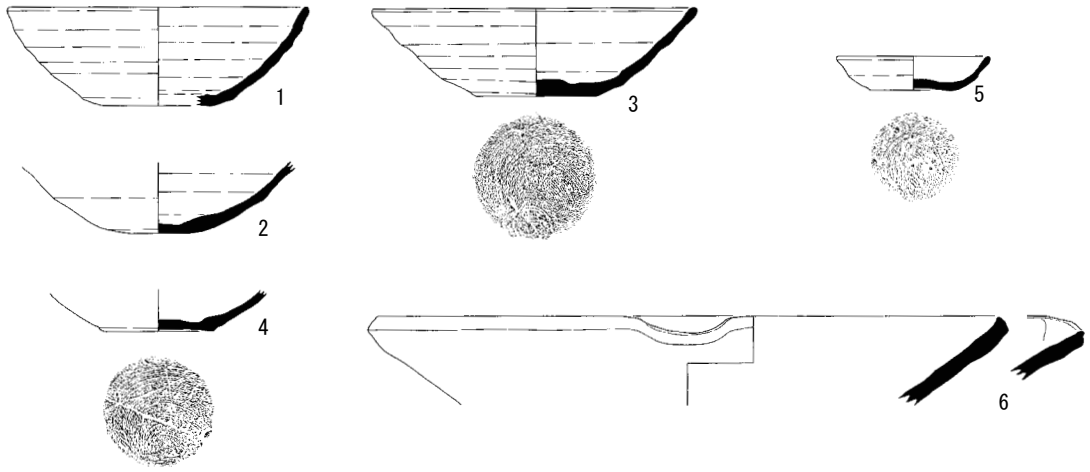
焚口付近から谷底を流れる溝の上層に広がり、流水により押し出されて下方(北側)へ広がったものと思われる。灰層は南北 5 m、東西 3 m程度の広がりしか持たない。層厚は薄く、最大で 30 ㎝程度である。またこの箇所以外に明瞭な灰の堆積層はみられない。

3．天王山 1 号窯跡の遺物

窯体出土遺物

椀　調整は内外面ともに回転ナデ。底部は糸切りである。体部は 1 ・ 2 が比較的丸みをもち、 3 はやや直線的である。底部は 4 が平高台状を呈するが、その他は体部との境界が明瞭でない。見込みは 2 ・ 4 がわずかに窪む程度である。

窯体出土



灰原出土（1）

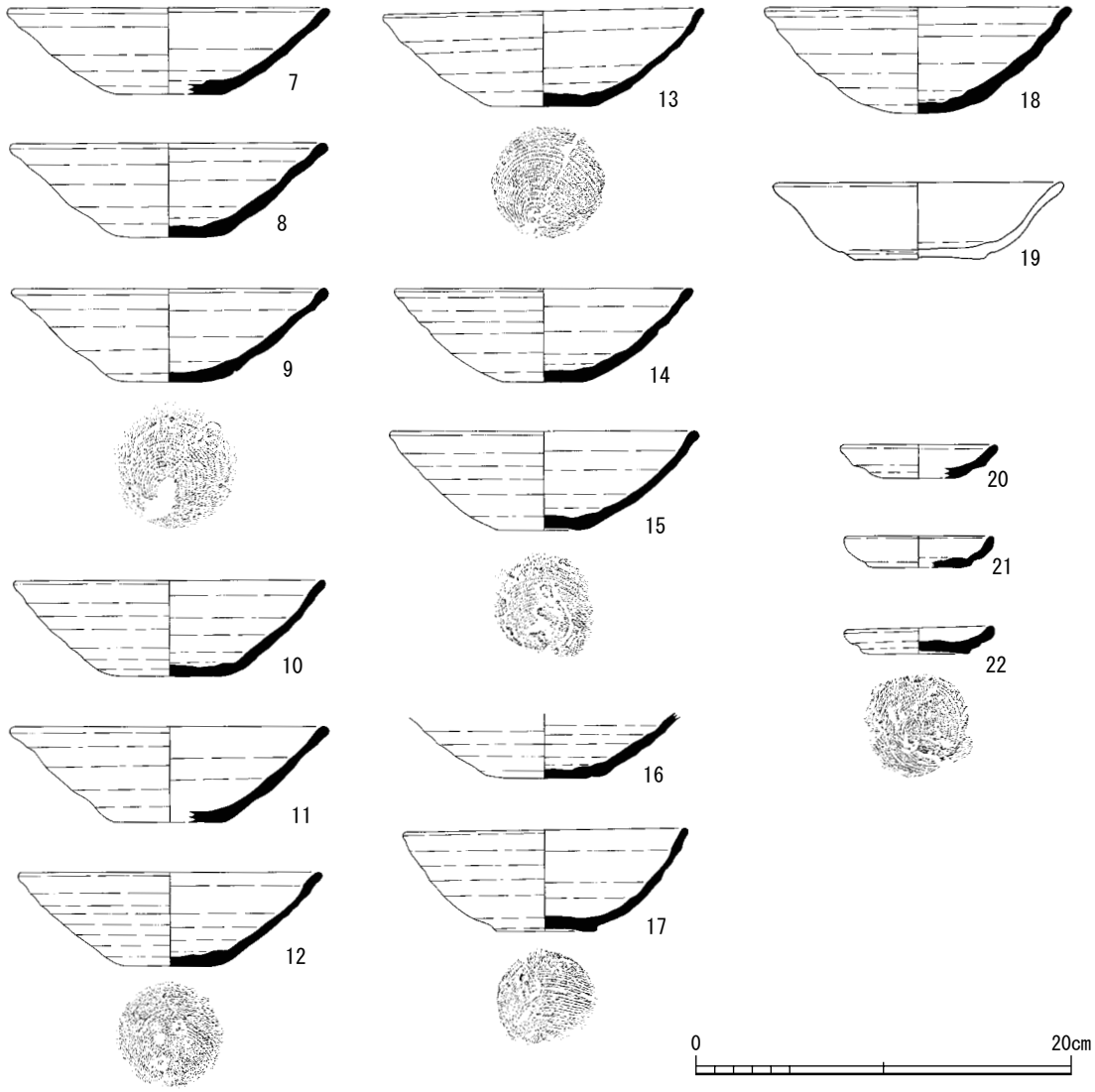
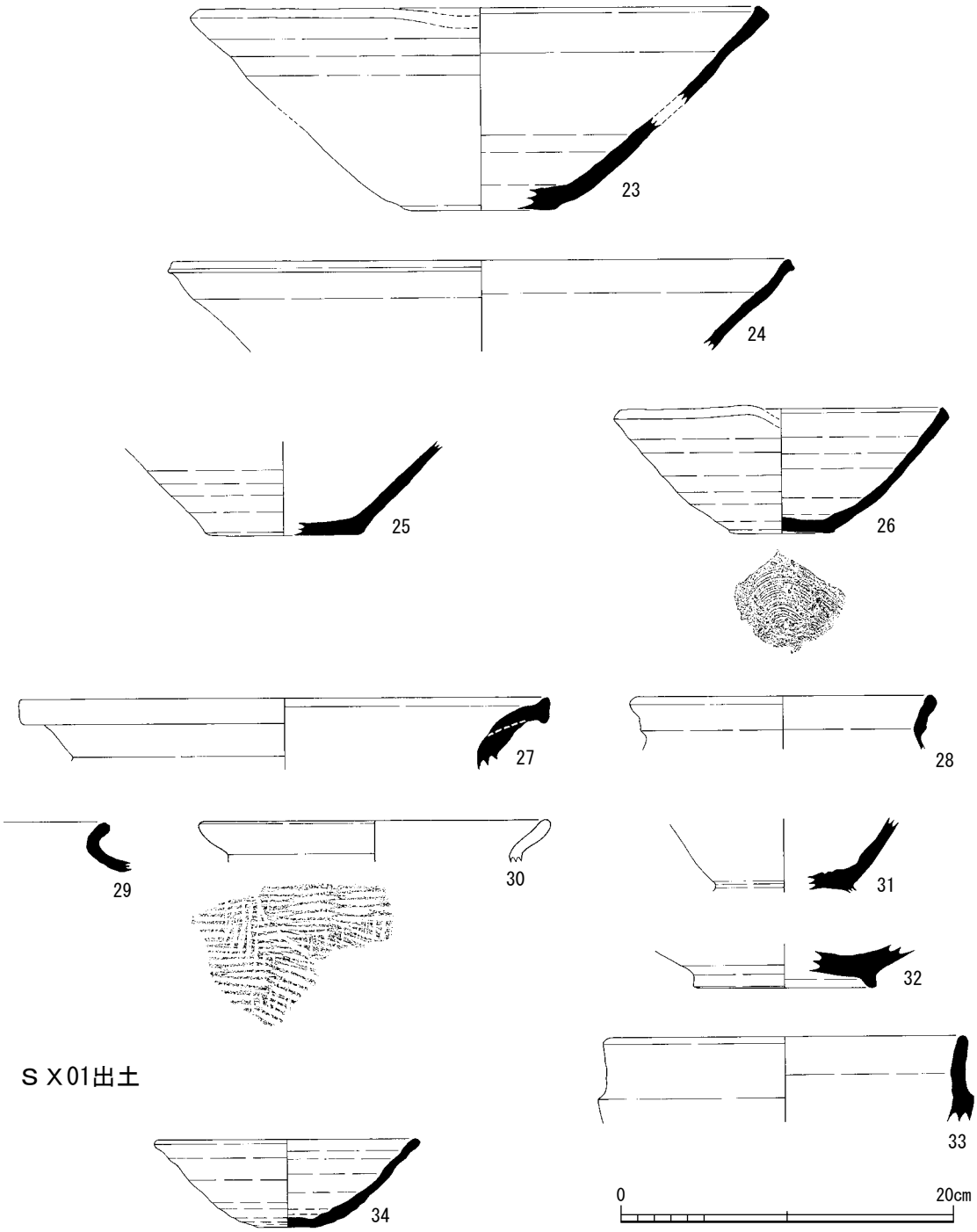


図 75　天王山 1 号窯跡出土遺物実測図（1）

灰原出土（2）



ＳＸ01出土

図 76　天王山 1 号窯跡出土遺物実測図（2）

小皿　5 は器高が高く体部がやや内湾する。調整は内外面とも回転ナデ。底部は糸切りである。

鉢　6 は口縁端部が突出する形態である。

瓦　35 ～ 37 が出土している。35 は側面が丸みをもち、複数回のナデを施すとみられる。釉付着のため凸面の調整は明瞭でないがナデと思われる。焼成は良好である。36 は須恵質で凹面に縦・横の 2 方向にナデを施す。側面は 2 段階のナデを施す。

灰原出土遺物

椀　調整は内外面ともに回転ナデ。底部は糸切りである。7 ～ 9 は体部が直線的で見込み部の凹みは消失している。10 ～ 12 は体部が直線的で見込み部がわずかに凹む。13 ～ 18 は体部が丸みをもち見込

み部の凹みはほぼみられない。17 は平高台状を呈する。19 は口縁端部が外反し、肥厚する。

小皿　調整は内外面ともに回転ナデ。底部は糸切りである。器高が低く 21、22 は底部が平高台状を呈する。

鉢　調整は内外面ともに回転ナデ。底部は糸切りである。23 は体部内面と口縁端面がほぼ直角をなし、口縁端部は上へ拡張するもので、出土した鉢の主流をなす。24 は唯一口縁端部が外側へ突出する形状。26 は小型の鉢で 1 点のみ出土した。体部はやや内湾ぎみである。

甕　須恵質のものと土師質を呈するものなどが出土した。ただしすべて細片であり出土総数は 20 片程度と少ないことから、多くとも数個体しか存在しないと考える。27 は口縁端部を上下に拡張する。29 は口縁部が屈曲し、端部は丸く終わる。

壺　全容のわかるものは出土していない。31・32 は壺底部と思われるが、いずれも輪高台である。

不明品　細片であるが経筒筒身の可能性がある。焼成は普通なものと甘いものが各 1 点ある。33 は細片であるが直立ぎみな体部をもつと思われる。

瓦　平瓦のみ出土した。軒瓦や丸瓦、道具瓦の出土は確認できない。凹面に布目を残し、凸面は無文タタキあるいはナデを施す。端面、側面はケズリを施す。

38 は焼成が甘い。側面は丸みをもち軽くケズリを行うが回り込んだ布目が残る。39 は須恵質である。凹凸面とも斜方向のナデを施す。凹面は斜め方向にナデを施すが布目が残す。端面はケズリ、側面は粗いケズリである。40 は焼成が甘く凸面の調整は不明である。41 は須恵質で側面はケズリを行う。43 は須恵質で布目の残る凹面に粗いナデを施している。44 は須恵質で側面はケズリ、端面は粗いケズリを施す。45 は須恵質で側面は丸みをもつ。46 は須恵質で端面・側面とも粗いケズリを施す。

4．天王山 1 号窯跡小結

調査の結果 1 号窯は須恵器椀と平瓦、そして少量の小皿と鉢を生産した瓦陶兼業窯であることが明らかとなった。窯体は焚口部、煙道部を損ない、焼成部も削平され遺存状態は良好でなく全容は明らかでないが、すべて地上に窯が露出していた地上式の構造であったと推定する。

出土遺物は須恵器、瓦片がある。須恵器は、椀、鉢、甕、壺、不明製品が出土した。鉢は 80 片前後出土している。大小 2 種を生産していたと思われるが、小型は 1 点出土したのみで、生産は大型を主体としている。大型は底部破片から少なくとも 7 個体前後あったと推定される。小皿の出土は 8 片程度と少ない。

椀は出土遺物の中で多数を占める。大半が須恵質であるが、土師質のもの 2 片ある。調整は内外面ともに回転ナデを施し、底部は糸切りである。体部は丸みをもって内湾するものが多いが、やや直線的なものも混じる。見込みの凹みと平高台が痕跡程度にわずかに残るものと消失したものがある。このような特徴は森田編年の第Ⅰ期第 2 段階から第Ⅱ期に相当するが、遺構自体は長期にわたり存続した痕跡が認められないことから、12 世紀代の中に位置づけることが可能かと考え、過渡的な段階のものと考える。

瓦は平瓦のみ出土し、丸瓦、軒瓦などは出土していない。生産は平瓦に限られていたのか、たまたま丸瓦や軒瓦が出土していなかったのかは明らかではない。出土瓦は小片のみで全容のわかるものはないが、すべて凹面に布目を残し、凸面は無文のタタキあるいはナデを施す。通有の瓦製作技法によって製作されたもので、この特徴は神出、久留美・跡部窯跡群の分類でのⅠ類とされるものである。

複数の窯跡を調査した久留美窯跡群ではⅠ類の占める割合の高い窯として柳谷 10 号窯がある。この

窯体出土

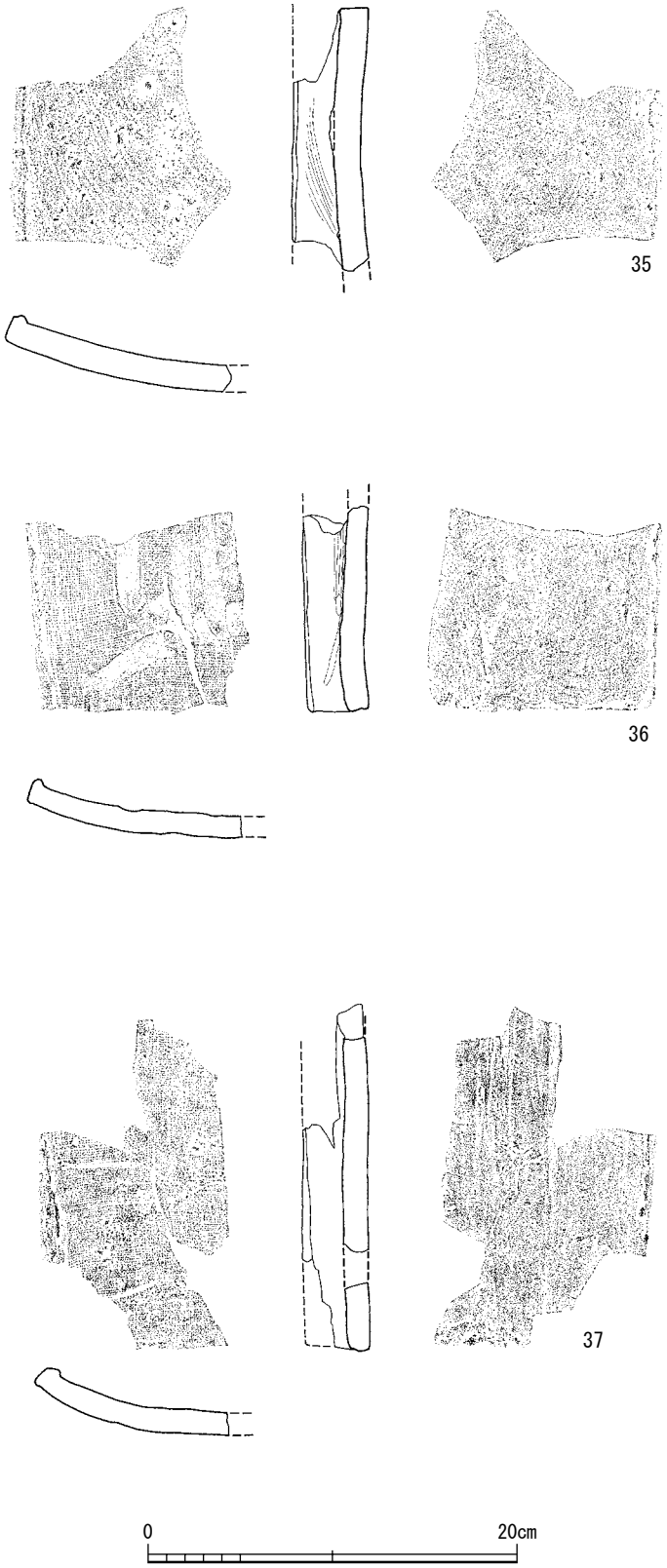


図 77　天王山 1 号窯跡出土遺物実測図 (3)

灰原出土（1）

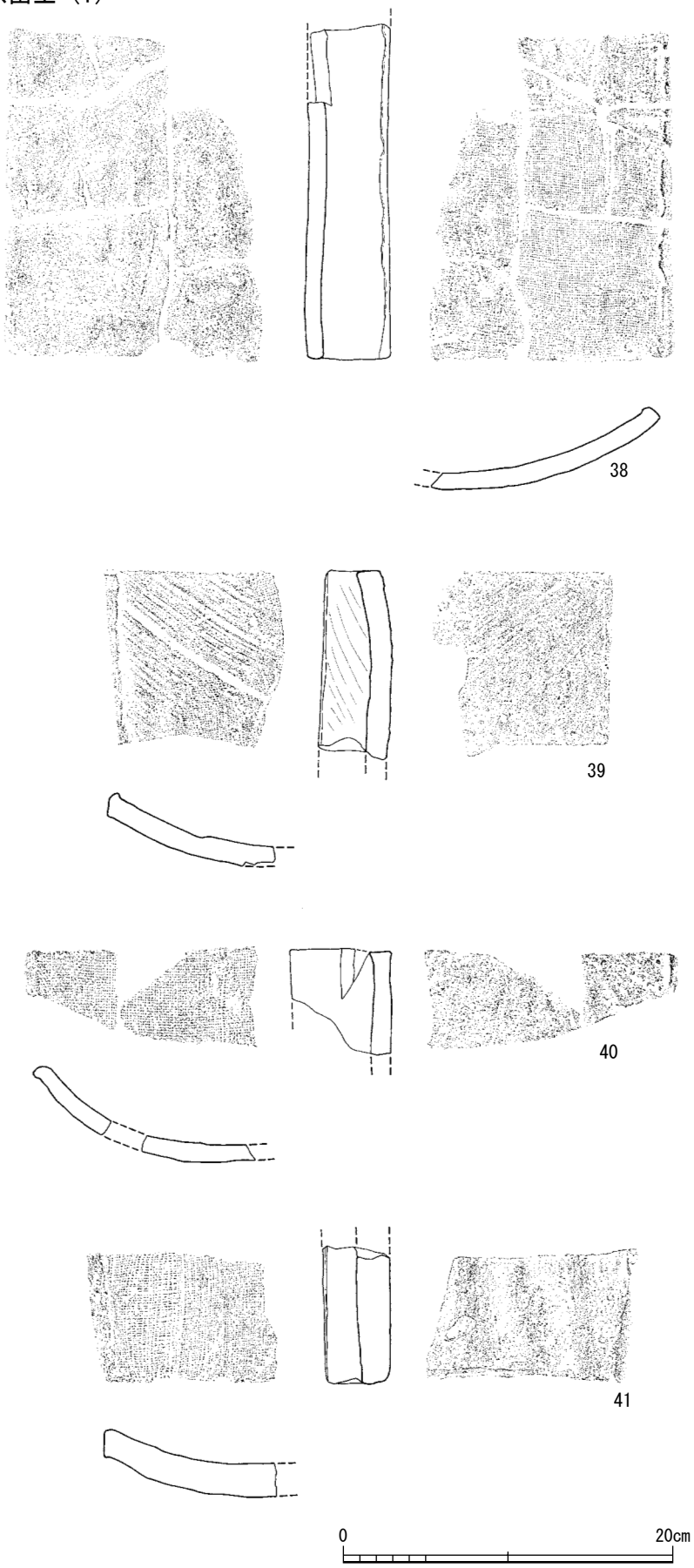


図 78　天王山 1 号窯跡出土遺物実測図（4）

灰原出土（2）

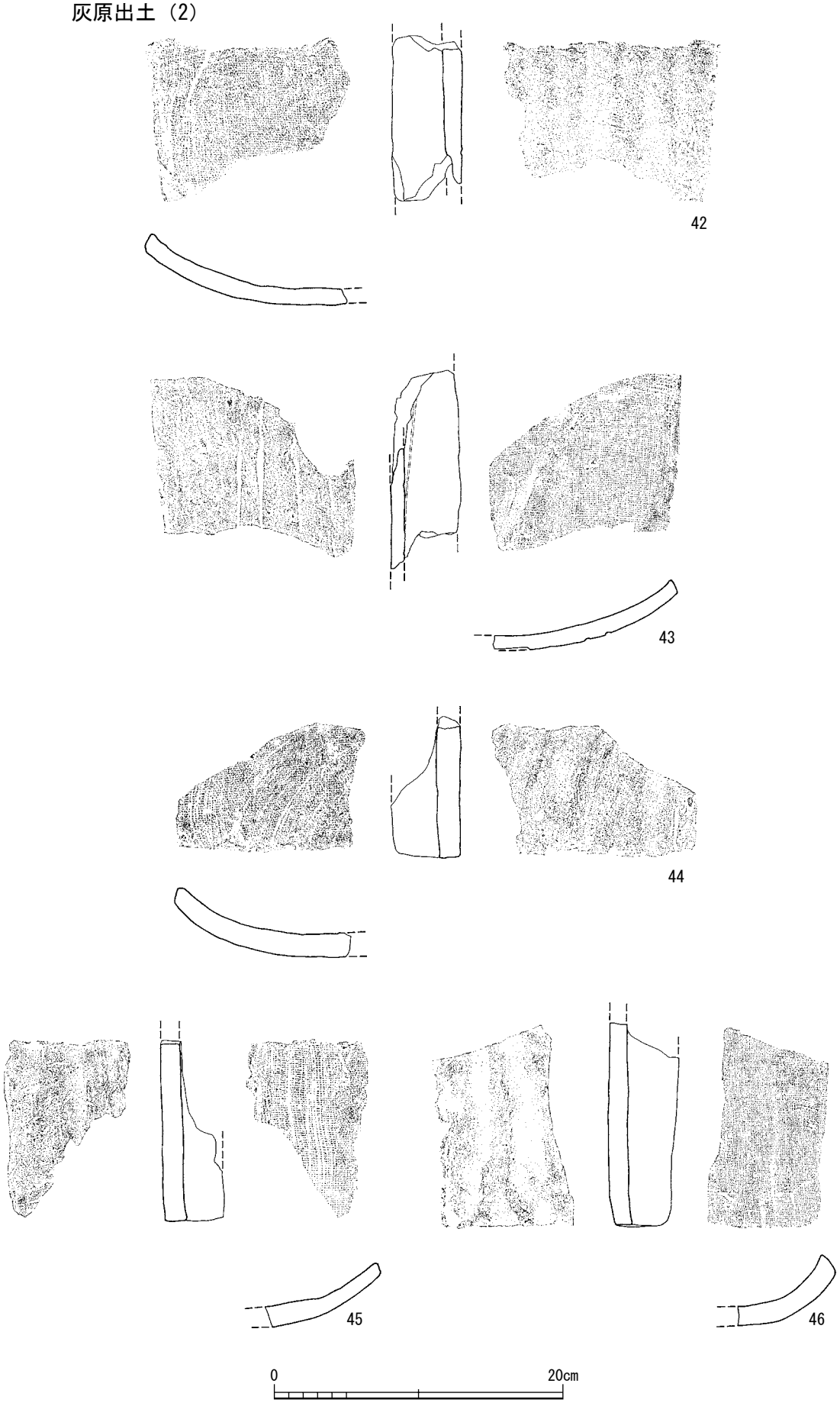


図 79　天王山 1 号窯跡出土遺物実測図（5）

10 号窯の出土遺物は須恵器と瓦の時期で齟齬があり 12 世紀第 3 四半期としつつも 1136 年頃までさかのぼる可能性をもつ。窯の構造は本報告の窯と類似する点もあり天王山 1 号窯跡の操業時期は柳谷 10 号窯に併行するかやや後出するものと推定する。

5．天王山 2 号窯跡の調査

調査対象地は谷の見かけ上の最深部に所在するが、一帯は地形改変が著しい。調査区内は谷筋がほぼ南北方向にのび、現地表下には厚く盛土がなされている。盛土直下には旧表土層が残存し、西から東へ傾斜する地形が確認できる。旧表土直下は地山となる。確認調査では谷底付近のトレンチで瓦片がまとまって出土したことから灰原を想定し、遺物出土地点から窯跡は谷の西斜面に所在すると考えられた。

調査の結果、谷斜面では地山に赤化などの変色はなく、窯体片や焼土なども確認できず、窯跡の所在を明らかにできなかった。本調査区は 1 号窯よりも約 55 m離れ、上方に位置することから、 1 号窯跡付近から採取した土砂をこの付近に客土し、その際に遺物が混入したことは考えがたい。出土した瓦片は細片であるものの摩滅が少ないため、比較的近距離に窯本体があった可能性は高いと考える。西斜面は標高 28 m付近を境に上方がやや平坦となることから、旧地形は大きく改変されているとみられ、窯跡はその痕跡を残さないまでに削平され消滅したのかもしれない。

出土遺物

出土遺物は瓦片のみである。いずれも小片であり焼成は良好でない。うち 1 点のみ図化した。

47 は平瓦である。凹面には布目が残り、凸面は無文と思われるタタキあるいはナデを施している。残存する側・端面はヘラケズリを施す。

小結

調査の結果、窯体そのものや明瞭な灰原の痕跡は確認できなかった。ただし谷内でまとまった瓦の出土をみたことから、付近に窯が所在した可能性は高いと考える。 2 号窯跡は南北にのびる谷沿いに 1 号窯跡とともに所在し、少なくともこの 2 基で窯跡群を形成したのであろう。出土した瓦片は 1 号窯跡出土のものと大差ないことから、同時期の操業であったと推定する。ただし出土遺物量は少なく、出土範囲も限定されることから、 1 号窯跡同様操業期間は短かったものと思われる。

2 号窯に伴うと考える出土遺物は瓦に限られるが、この時期加古川流域で瓦のみを生産していた窯跡は確認されていないため、瓦窯であったとは断定しがたい。

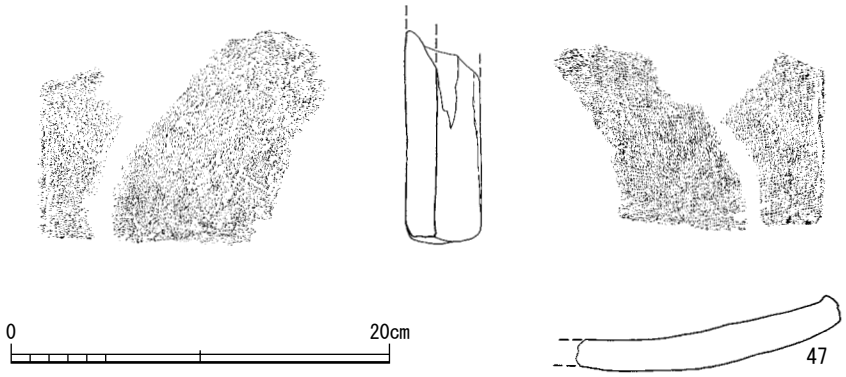


図 81　天王山 2 号窯跡出土遺物実測図

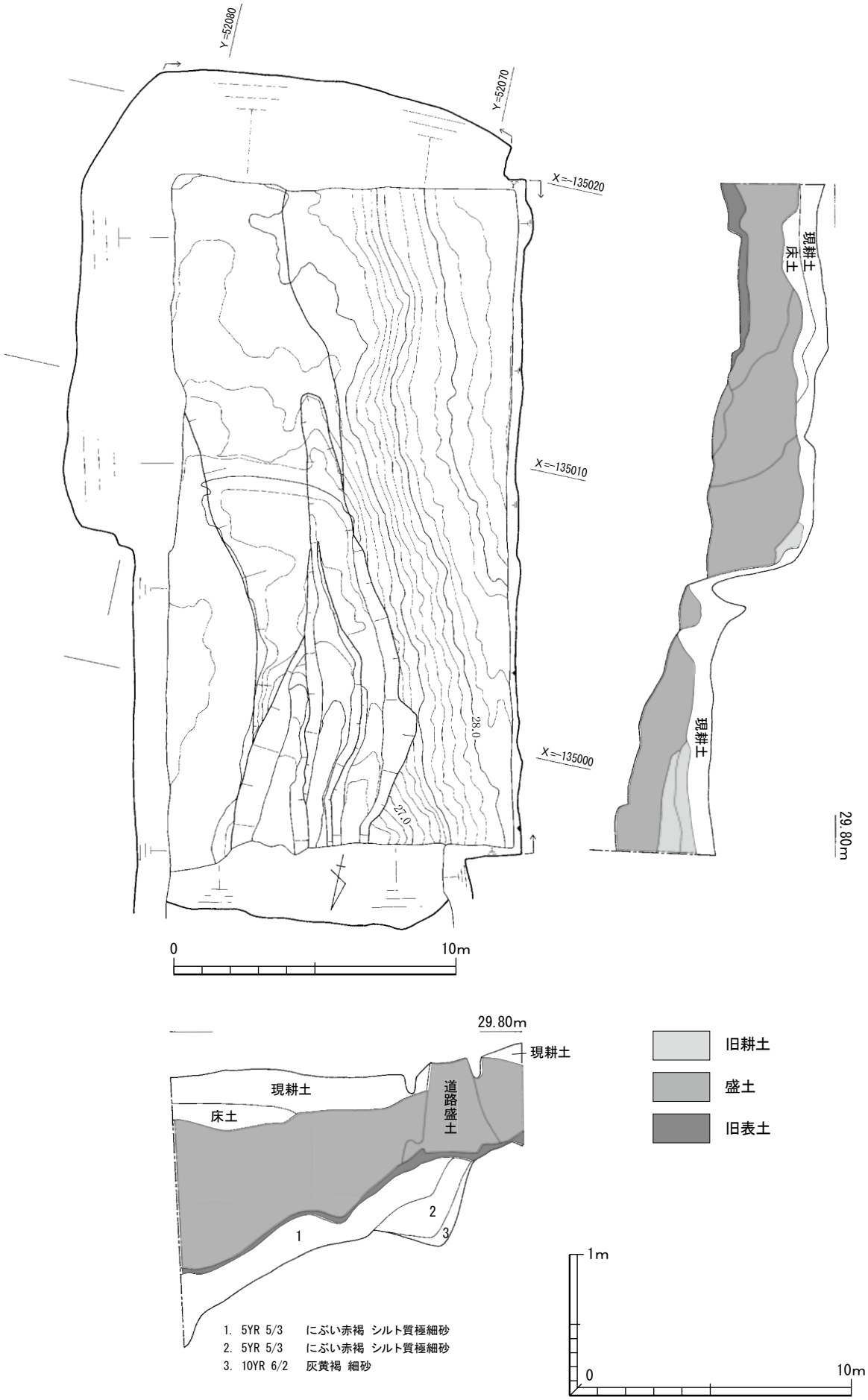


図 80　天王山 2 号窯跡調査区全体図

Ⅵ　おわりに

天王山古墳群・天王山窯跡群の調査は確認調査を含めて3カ年を費やして調査を実施した。さらに2カ年の整理調査を終えて報告書刊行に至った。

同じ天王山と呼称しているが、時期は全く異なる遺跡である。天王山古墳群は7世紀前半の古墳群であり、天王山窯跡群は12世紀の瓦陶兼業の窯跡である。古墳群は5基、窯跡群は2基調査したが、それ以上に周辺に広がっていたことは確実である。1号墳以外の古墳群と窯跡群は谷を隔てているが、2～5号墳でも石室内の再利用時を除いても、周溝や旧河道から窯跡群の時期の須恵器が出土している。調査した窯跡以外にも異なる小規模な窯跡が築かれていたであろう。この時期遺跡周辺の播磨南部は全国的に見ても大窯業地帯であり、多くの窯跡群が操業していた。天王山窯跡群は現状では1回きりの小規模な窯跡で、盛んに焼成していたとは言えない。が、瓦・須恵器ともに地域性が高いわけではなく、周辺の工人が窯を設けものと思われる。小規模ながらも1地点ではなく広域に焼成していたのは興味深い点である。天王山古墳群周辺で今まで知られれていた窯跡はすべて古い段階のもので12世紀にも生業していたことは注目される。

天王山古墳群は、今回の調査ではじめて認知した古墳群である。近世・近代になってからの開発に伴うもので、新しいものは第2次世界大戦後の損壊ということになる。本来の基数は推定出来ないが、2～5号墳の稠密度から考えると膨大な数になると思われる。以前は播磨では6世紀後半に古墳づくりが多く、7世紀以降は減少するものと思われていたが、そのようなことはない。最近の調査では7世紀代に入ってからの古墳が多数知られるようになった。今後、天王山古墳群のような例が増えるものと思われる。

図　　版

天王山古墳群　遠景（北西から）

天王山古墳群　遠景（南東から）

天王山古墳群　遠景（北西から）

天王山古墳群　遠景（北東から）

天王山古墳群　遠景（北東から）

天王山古墳群　垂直写真

天王山古墳群　周辺空中写真（国土地理院撮影）

調査前全景（南から）

調査区空中写真（南西上空から）

全景（北西から）

全景（南東から）

SX01 礫散布状況（南東から）

SX01 完掘状況（北西から）

SX02 礫散布状況（南西から）

SX02 完掘状況（北西から）

SX03 全景（北東から）

SX03 礫散布状況（北東から）

墳調査区全景（南から）

全景（北から）

全景（南から）

検出状況（南から）

全景（南から）

横穴式石室全景（南から）

横穴式石室全景（南から）

横穴式石室（北から）

石室奥壁

西壁

石室堆積状況（奥壁から）

床面堆積状況

棺台

奥壁西側遺物出土状態

西壁沿い土器出土状態

開口部付近土器出土状態（北から）

奥壁掘り方断面

床面下層土坑（南から）

石室と掘り方（南から）

石室と掘り方（北から）

西側墳裾平安時代流路

平安時代流路断面

石室石材矢穴

全景（検出状況・南から）

南側周溝アゼ

北側周溝アゼ

開口部アゼ

全景（南から）

全景（東から）

墓壙全景（北から）

石室遺物出土状態（東から）

検出状況（南から）

全景（南から）

石室内堆積状況（南から）

石室内堆積状況

調査風景

石室内中世椀出土状態

調査風景

石室全景（南から）

石室全景（南から）

石室西壁

石室東壁

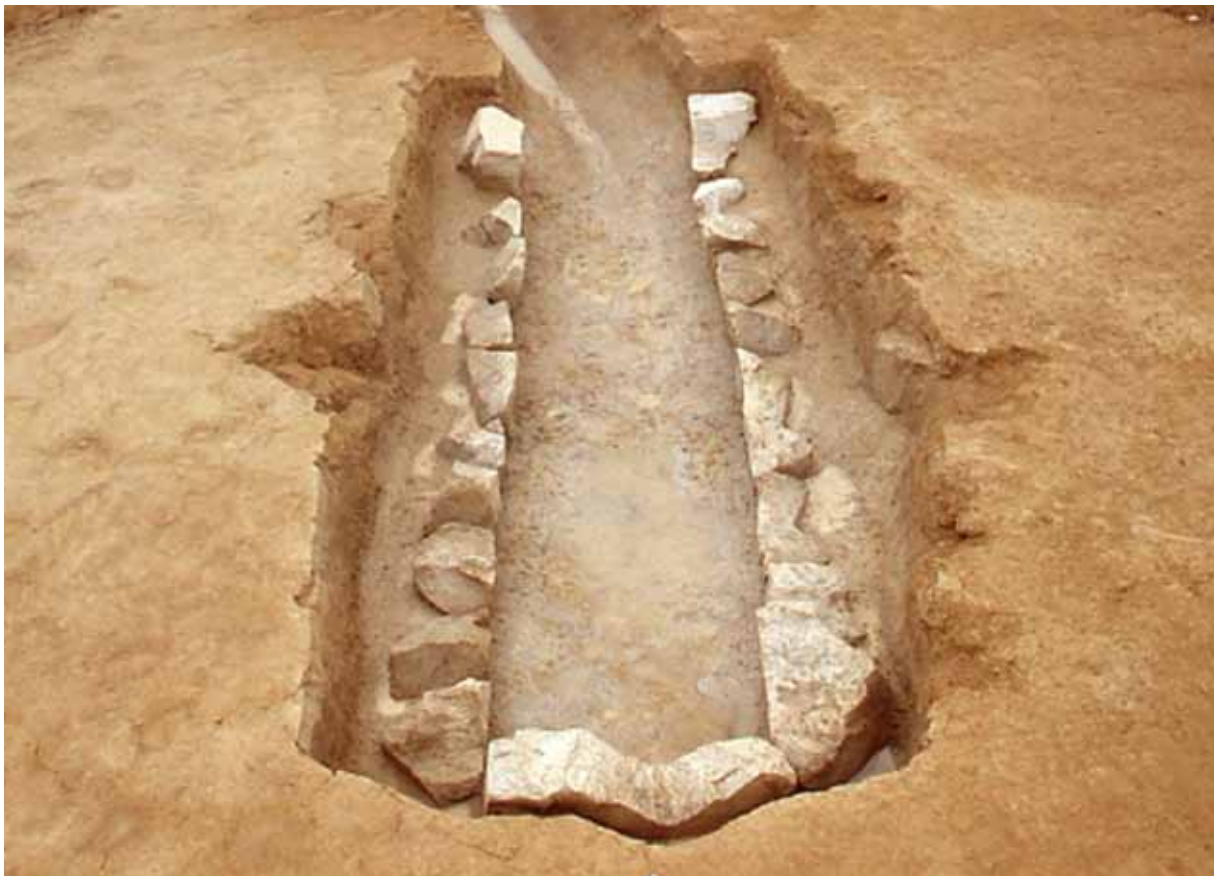
石室全景（北から）

東壁

墓道堆積状況

石室基底石全景（南から）

全景（南西から）



石室基底石全景（北から）

石室基底石・墓道全景（南から）

検出状況（南東から）

全景（南東から）

全景（北西から）

石室内堆積状況

全景（北東から）

耳環出土状態

全景（南西から）

墓壙全景（南東から）

石室全景（北東から）

周溝堆積状況

石室全景（北西から）

周溝中世土器出土状態

全景（東から）

全景（南から）

SR01 堆積状況（南から）

SK01（西から）

SK03 断面

SK03（南から）

全景

全景（北から）

全景（北西から）

調査区遠景（北東から）

調査区遠景（南東から）

調査区全景（南東から）

窯体検出状況（北東から）

窯体内遺物出土状況（北東から）

窯体完掘状況（北東から）

窯体断ち割り状況（北東から）

炭化材断面 (1)（南から）

炭化材断面 (2)（南から）

炭化材断面 (3)（南から）

還元面除去（北東から）

還元面除去縦断（1）（南から）

還元面除去縦断（2）（南東から）

溝断面（東から）

灰原断面（南東から）

SX01 断面（東から）

調査区南北断面（東から）

調査区全景（南から）

西壁断面（北から）

南壁断面（北西から）

天王山古墳群　出土遺物

2 号墳出土鉄器

5 号墳出土金属器

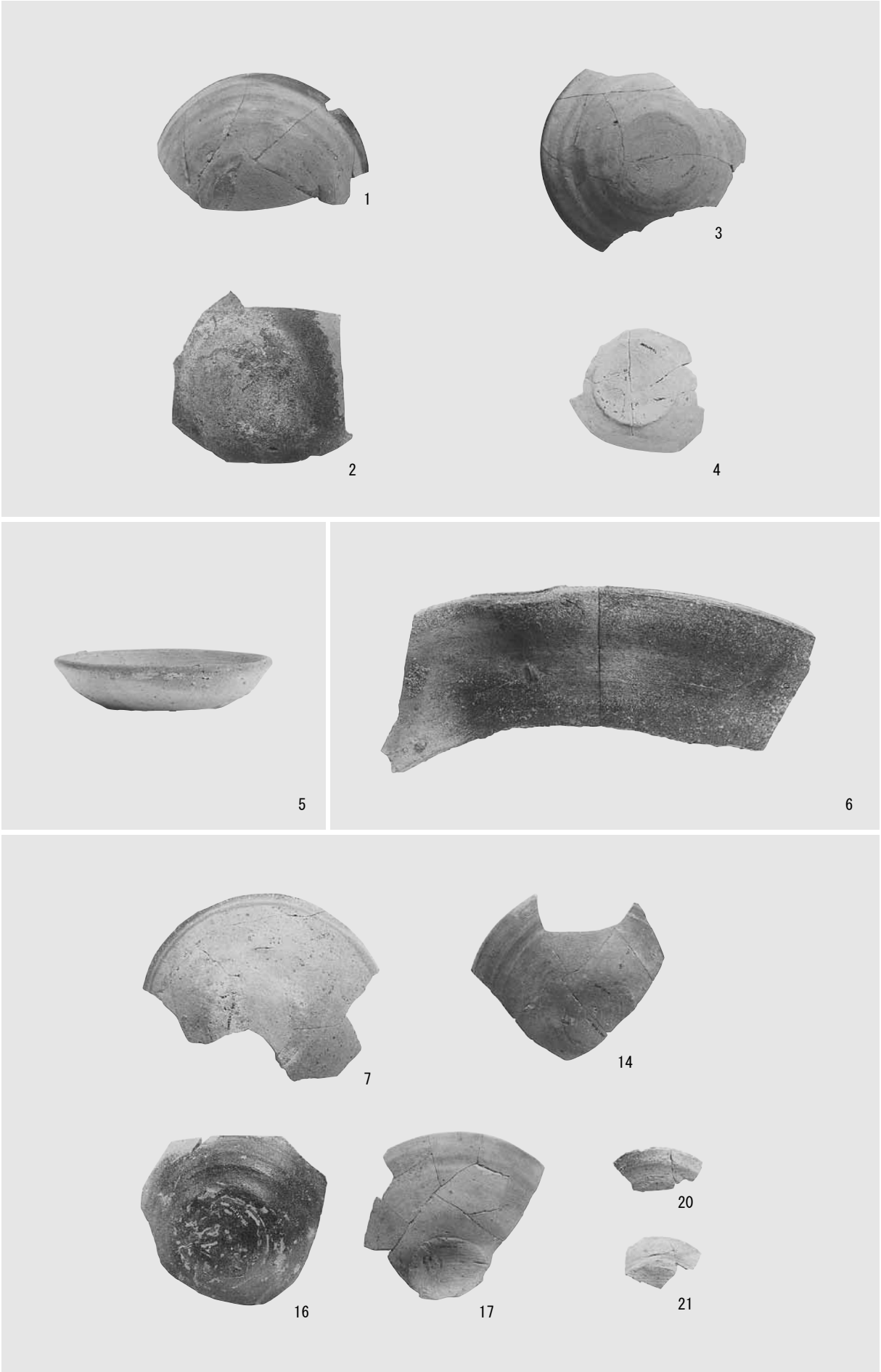
2 号墳出土遺物

2 号墳出土勾玉

4 号墳出土遺物

天王山古墳群　再利用時遺物

天王山窯跡群　出土遺物



出土遺物 (1)

8

13

9

15

10

18

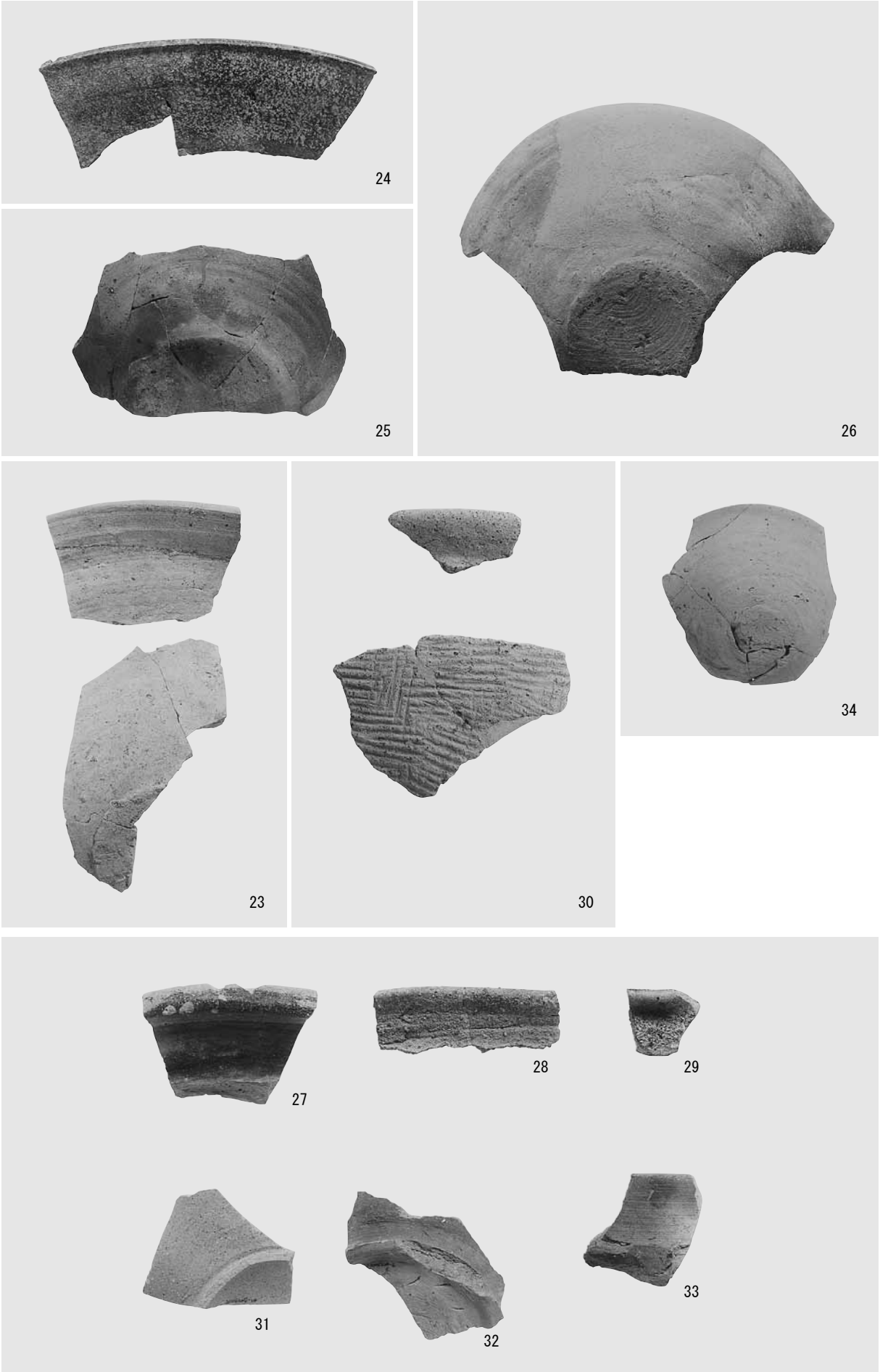
11

19

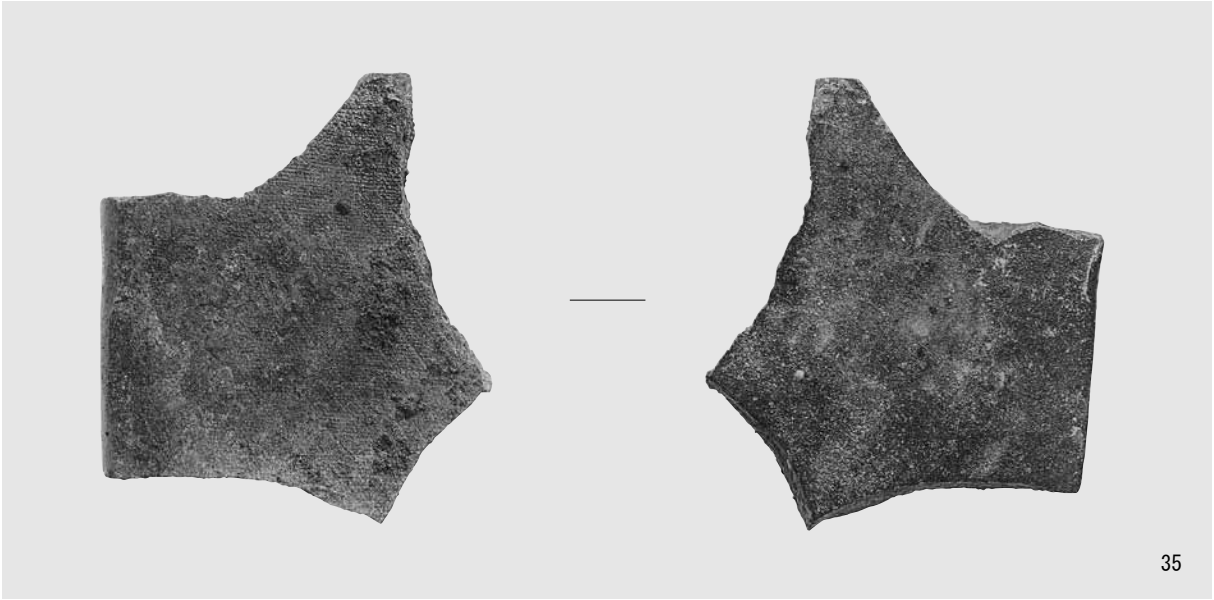
12

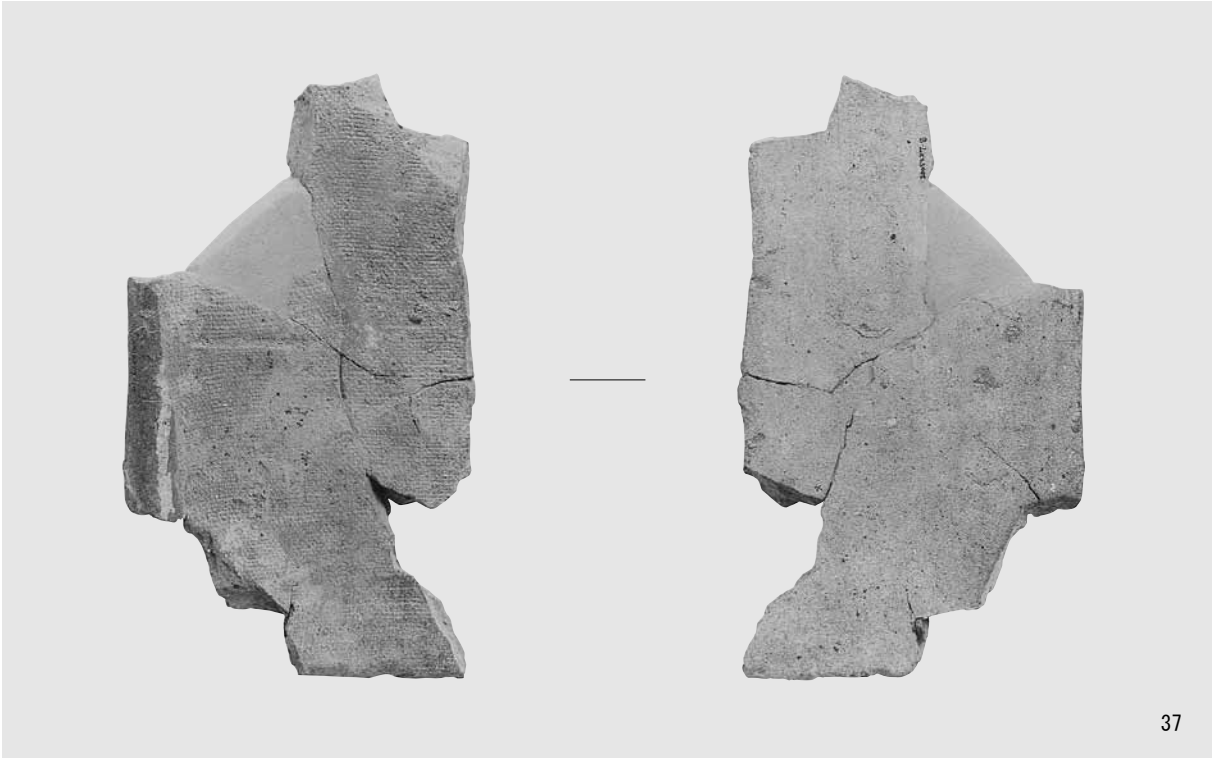
22

出土遺物 (2)

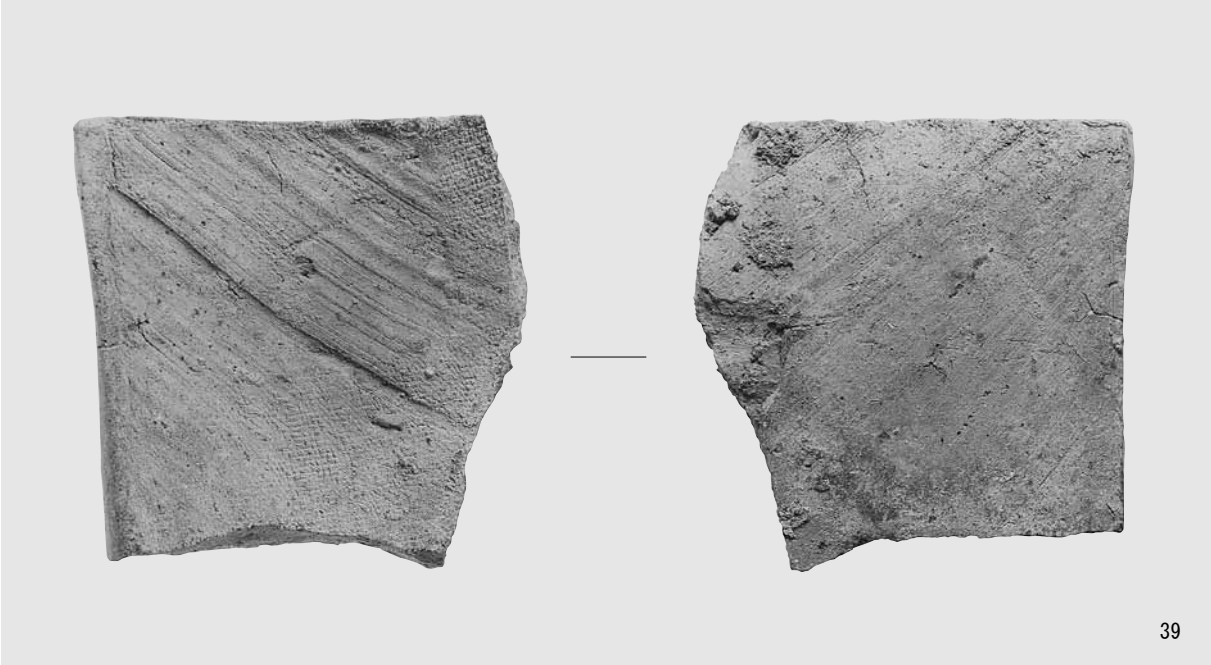


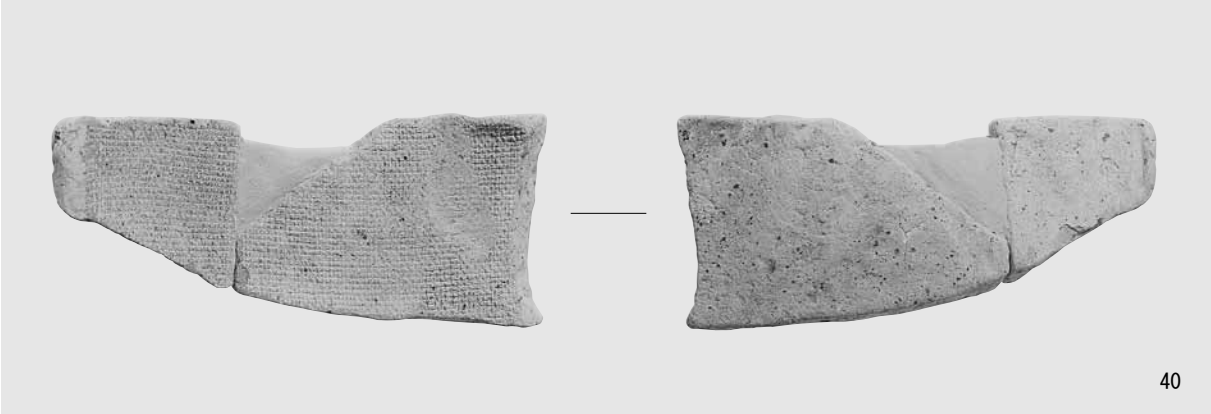
出土遺物 (3)



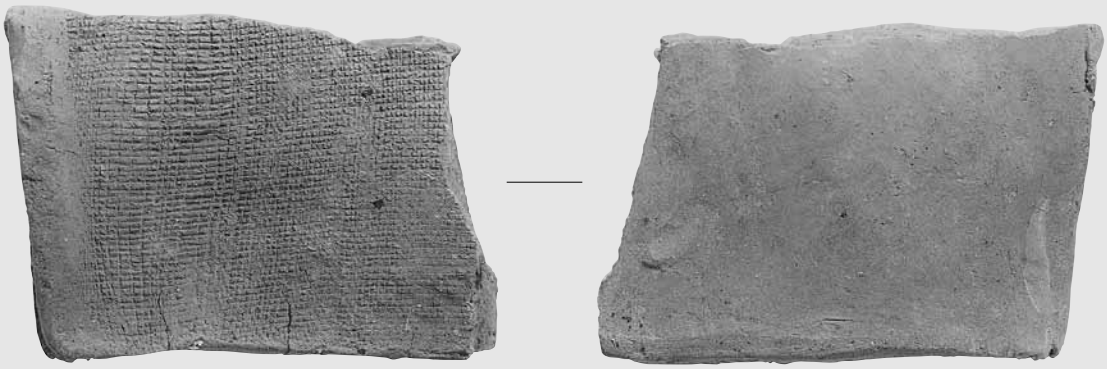


出土遺物 (4)

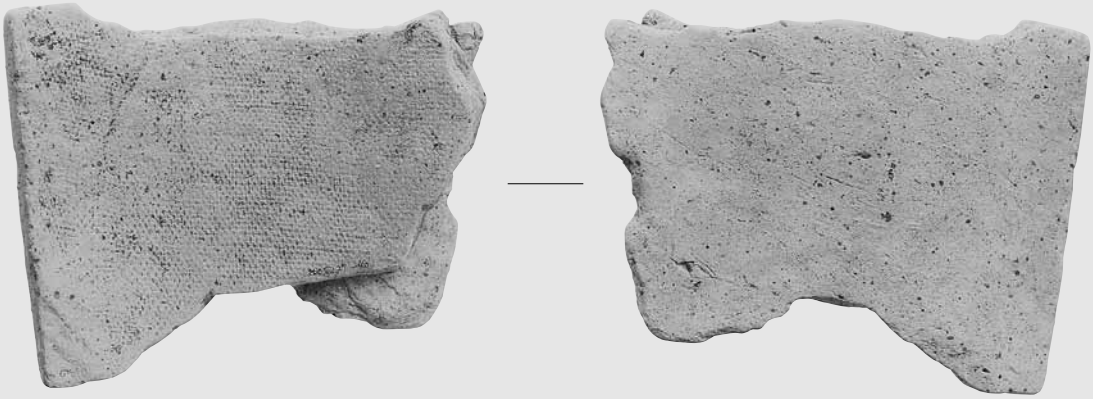




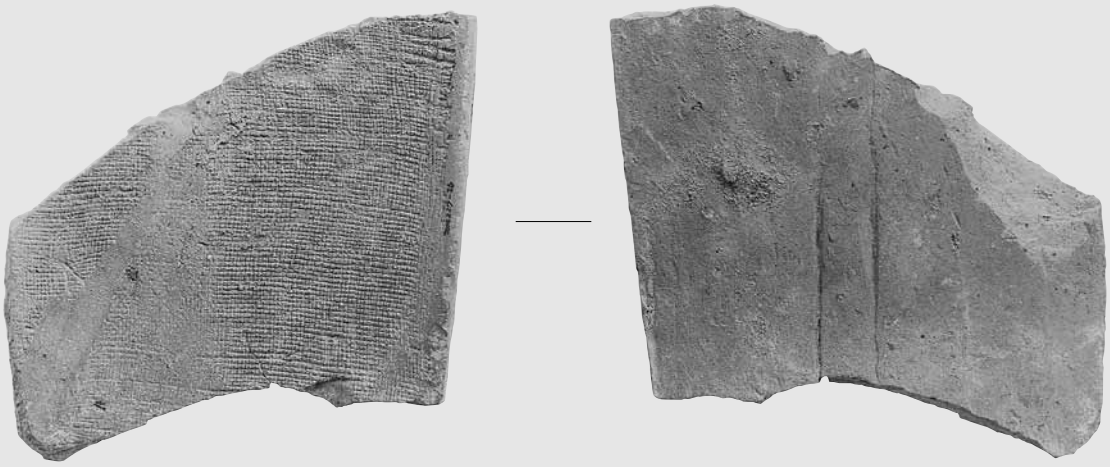
出土遺物 (5)



41



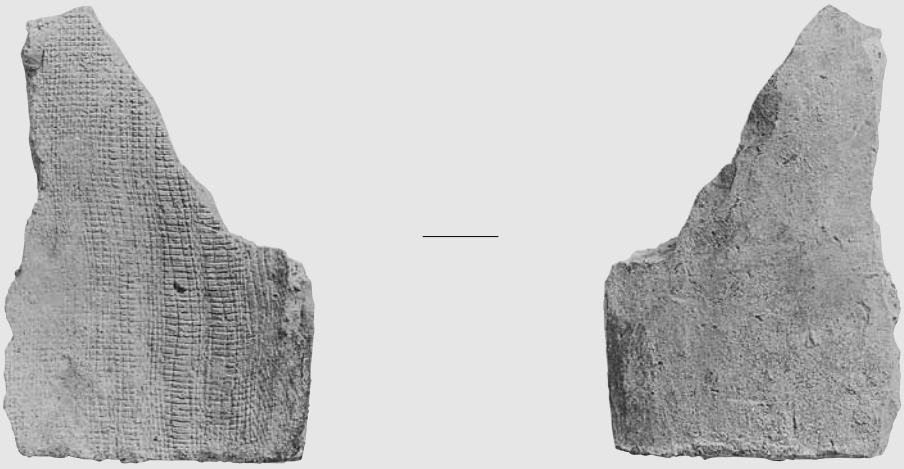
42



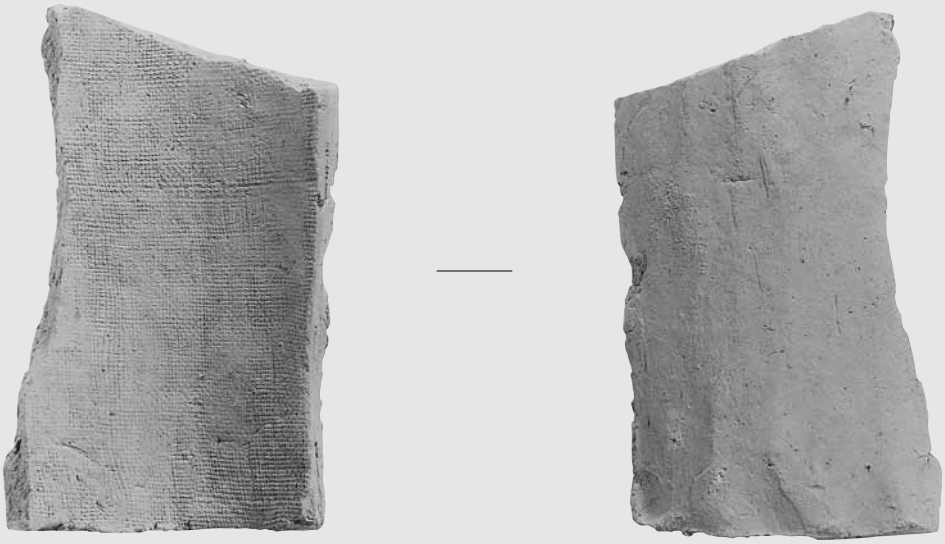
43

出土遺物 (6)

44

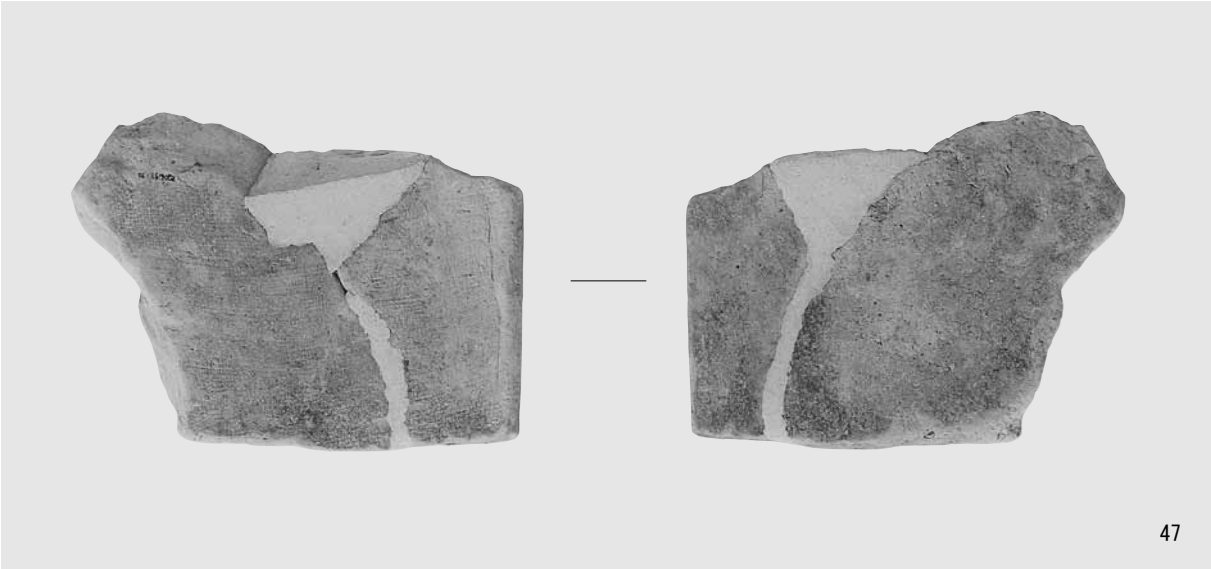


45



46

出土遺物（7）



出土遺物 (8)

報告書抄録

ふりがな	てんのうさんこふんぐん・てんのうさんかまあとぐん
書名	天王山古墳群・天王山窯跡群
副書名	主要地方道加古川小野線（東播磨南北道路）改築事業に伴う発掘調査報告Ⅴ
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第402冊
編著者名	渡辺　昇・長濱誠司
編集機関	兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1　　TEL　078(437)5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10-1
発行年月日	2011年3月24日

所収遺跡名	所在地	コード				調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号	北緯	東経			
確認調査	兵庫県加古川市八幡町上西条字天王山	28464	2004197	34°46′53″	134°54′7″	2004.9.13～11.26	2,263㎡	主要地方道加古川小野線（東播磨南北道路）改築事業
			2005117			2005.5.24	60㎡	
本発掘調査			2005206			2006.1.24～3.13	783㎡	
			2006076			2006.7.5～8.18	1,026㎡	
							本発掘	
							1,809㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
天王山古墳群	古墳	古墳時代後期	横穴式石室	須恵器・鉄鏃・勾玉・耳環	
天王山窯跡群	窯跡	平安時代末～鎌倉時代	窯跡	須恵器・瓦	

要　約	古墳時代後期の古墳群である天王山古墳群は横穴式石室を埋葬主体とする円墳で構成されている。比較的大形の石室を持つ２号墳が最初に築造され、４号墳が築かれ、さらに３・５号墳が造られる変遷が明らかとなった。鎌倉時代に再利用されている。天王山窯跡群は平安時代末から鎌倉時代の小規模・短期間の須恵器窯跡群で瓦も焼成している。

加古川市　　兵庫県文化財調査報告　第 402 冊

天王山古墳群
天王山窯跡群

―（主）加古川小野線（東播磨南北道路）改築事業に伴う発掘調査報告書―

2011（平成 23）年 3 月 24 日発行

編　集　兵庫県立考古博物館
〒 675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中 1 丁目 1 番 1 号
Tel.　079－437－5589
発　行　兵庫県教育委員会
〒 650－8567　神戸市中央区下山手通 5 丁目 10 番 1 号
印　刷　富士高速印刷株式会社